一般国道
２１０号　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第23集

堂畑遺跡Ⅲ

福岡県うきは市吉井町新治所在遺跡の調査

下巻

2005

福岡県教育委員会

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第23集

堂畑遺跡Ⅲ

福岡県うきは市吉井町新治所在遺跡の調査

下巻

2005

福岡県教育委員会

目　次

［上巻］

巻頭図版
序
例言
目次
図版目次
挿図目次
表目次

Ⅰ．はじめに……1（大庭）
　1．調査の経過……1
　2．調査の組織……3
Ⅱ．位置と環境……5
Ⅲ．発掘調査の記録……9
　2．3次調査2区検出遺構と遺物……9（小澤・大庭）
　（1）第1面の遺構と出土土器……9
　（2）第1面ピット・遺構面……123
　（3）第2面の遺構と出土土器……133
　（4）第2面ピット・遺構面……250
　3．4次調査3区検出遺構と遺物……254（小澤・大庭）
　（1）第1面の遺構と出土土器……254
　（2）第1面ピット・遺構面……330
　（3）第2面の遺構と出土土器……333
　（4）第2面ピット・遺構面……349
　4．4次調査4区検出遺構と遺物……353（小澤・大庭）
　（1）第1面の遺構と出土土器……353
　（2）第1面ピット・遺構面……364
　（3）第2面の遺構と出土土器……365
　5．4次調査5区検出遺構と遺物……366（小澤）
　（1）第1面の遺構と出土土器……366
　（2）第2面の遺構と出土土器……369
　（3）第3面の遺構と出土土器……372
　6．3・4次調査表採・側溝等出土土器……373（大庭）
　7．石器・石製品・土製品・金属器……377（小澤・大庭・能登原）
　（1）石器・石製品……377
　（2）土製品……386
　（3）金属器……391

［下巻］

目次
図版目次
挿図目次
表目次

Ⅳ．自然科学分析……397
　（1）樹種同定……397（古環境研究所）
　（2）種実同定……400（古環境研究所）
　（3）鉛同位体分析……403（淀川・平尾・谷水・元興寺文化財研究所）
Ⅴ．まとめ……409
　1．堂畑遺跡出土の須玖Ⅱ式土器群……409（小澤）
　2．堂畑遺跡におけるカマドの在り方ついて……413（大庭）
　3．堂畑遺跡周辺における7世紀後半～8世紀末の土師器の変遷について…417（大庭）
　4．堂畑遺跡における集落の変遷について……421（大庭）
付編　浮羽高校所蔵三牟田出土石剣について……426（大庭）

図版目次

巻頭図版	1	1	鷹取山頂から堂畑遺跡を望む（南西から）
		2	堂畑遺跡から東を望む（右中央の森が月岡・日岡古墳）
巻頭図版	2	1	2区第2面152号竪穴住居跡出土状況（北から）
		2	2区第2面166A号竪穴住居跡カマド（東から）
巻頭図版	3	1	3区第1面196号竪穴住居跡カマド（東から）
		2	2区第2面20号溝（A群）出土状況（北から）
巻頭図版	4	1	2区第2面20号溝出土土器
		2	2区第2面148号竪穴住居跡出土土器
巻頭図版	5	1	2区第2面152号竪穴住居跡出土土器
		2	3区第1面196号竪穴住居跡出土土器
巻頭図版	6	1	2～5区出土磨製石器
		2	116号ピット出土青銅器
図版1	1	2区第1面全景（空中写真、西から）	2 2区第1面西側（空中写真、上が北）
	3	2区第1面中央（空中写真、上が南）	
図版2	1	2区第1面東側住居跡集中部分（空中写真、上が北）	
	2	2区第1面東端（空中写真、上が北）	
	3	2区第1面西側全景（西から）	
図版3	1	79・80・78号竪穴住居跡（南から）	2 78号竪穴住居跡カマド（南から）
	3	79号竪穴住居跡（南から）	
図版4	1	80号竪穴住居跡（西から）	
	2	81号竪穴住居跡、3号掘立柱建物跡・1号柵跡検出状況（東から）	
	3	82号竪穴住居跡（南から）	
図版5	1	82号竪穴住居跡カマド（南から）	2 83号竪穴住居跡（南から）
	3	87号竪穴住居跡（東から）	
図版6	1	87号竪穴住居跡カマド（東から）	2 88号竪穴住居跡（北東から）
	3	79・80・89号竪穴住居跡（西から）	
図版7	1	90号竪穴住居跡（南から）	2 90号竪穴住居跡カマド（南から）
	3	91号竪穴住居跡（南から）	
図版8	1	91号竪穴住居跡カマド（南から）	2 92号竪穴住居跡（南から）
	3	93号竪穴住居跡（南から）	
図版9	1	93号竪穴住居跡カマド（南から）	2 94号竪穴住居跡（南から）
	3	95号竪穴住居跡（南から）	
図版10	1	95号竪穴住居跡カマド（南から）	2 96号竪穴住居跡（南から）
	3	97号竪穴住居跡（南から）	
図版11	1	98号竪穴住居跡（南西から）	2 99号竪穴住居跡（南東から）
	3	101号竪穴住居跡（南から）	
図版12	1	102・138号竪穴住居跡（東から）	2 102号竪穴住居跡カマド（東から）
	3	103号竪穴住居跡（東から）	
図版13	1	103号竪穴住居跡カマド（東から）	2 104号竪穴住居跡（南から）
	3	104号竪穴住居跡カマド（南から）	
図版14	1	106号竪穴住居跡（西から）	2 106号竪穴住居跡カマド（西から）
	3	107号竪穴住居跡（西から）	
図版15	1	107号竪穴住居跡カマド（西から）	2 108・130・139号竪穴住居跡（南から）
	3	108号竪穴住居跡カマド（南から）	
図版16	1	109号竪穴住居跡（南から）	2 109号竪穴住居跡カマド（南から）
	3	109号竪穴住居跡カマド煙道部（北から）	
図版17	1	110・111・115号竪穴住居跡（南から）	2 110号竪穴住居跡カマド出土状況（西から）
	3	111号竪穴住居跡カマド完掘状況（西から）	
図版18	1	112号竪穴住居跡（西から）	2 112号竪穴住居跡カマド（西から）
	3	113号竪穴住居跡（南から）	

図版19　1　113号竪穴住居跡カマド出土状況（南から）　2　113号竪穴住居跡カマド完掘（南から）
3　113号竪穴住居跡カマド断ち割り状況（南から）
図版20　1　114号竪穴住居跡（南から）　2　114号竪穴住居跡カマド（南から）
3　115号竪穴住居跡カマド（南から）
図版21　1　116号竪穴住居跡（南から）　2　118号竪穴住居跡（北から）
3　120号竪穴住居跡（西から）
図版22　1　121号竪穴住居跡（北から）　2　122号竪穴住居跡（西から）
3　123号竪穴住居跡（北西から）
図版23　1　125・126号竪穴住居跡（南から）　2　125号竪穴住居跡カマド（南から）
3　128号竪穴住居跡（南から）
図版24　1　128号竪穴住居跡カマド（南から）　2　129号竪穴住居跡（東から）
3　129号竪穴住居跡カマド（東から）
図版25　1　130号竪穴住居跡カマド（西から）
2　131号竪穴住居跡、7号掘立柱建物跡完掘状況（東から）
3　131号竪穴住居跡カマド（東から）
図版26　1　132号竪穴住居跡、8号掘立柱建物跡（東から）
2　132号竪穴住居跡カマド（東から）
3　133・134号竪穴住居跡、36号土坑（南から）
図版27　1　133号竪穴住居跡カマド（南から）　2　134号竪穴住居跡カマド（南から）
3　135号竪穴住居跡、36号土坑（東から）
図版28　1　135号竪穴住居跡カマド出土状況（東から）2　135号竪穴住居跡カマド完掘（東から）
3　136号竪穴住居跡（東から）
図版29　1　137号竪穴住居跡（南から）
2　137号竪穴住居跡カマド天井石出土状況（南から）
3　137号竪穴住居跡カマド完掘状況（南から）
図版30　1　138号竪穴住居跡（東から）　2　138号竪穴住居跡カマド（東から）
3　139号竪穴住居跡（南から）
図版31　1　139号竪穴住居跡カマド（南から）　2　140号竪穴住居跡（西から）
3　140号竪穴住居跡土層（北西から）
図版32　1　3号掘立柱建物跡検出状況（南東から）　2　3号掘立柱建物跡完掘状況（南東から）
3　4号掘立柱建物跡検出状況（東から）
図版33　1　4号掘立柱建物跡完掘状況（東から）　2　6号掘立柱建物跡（南東から）
3　7号掘立柱建物検出状況、131号竪穴住居跡検出状況（東から）
図版34　1　1・2号櫂跡検出状況（南東から）　2　1・2号櫂跡完掘状況（南東から）
図版35　1　20号土坑（南から）　2　21号土坑（西から）
3　22号土坑（南から）
図版36　1　25号土坑（西から）　2　26号土坑（北から）
3　27号土坑（南東から）
図版37　1　29号土坑（西から）　2　30・31号土坑（北西から）
3　32号土坑（西から）
図版38　1　33号土坑（北西から）　2　34号土坑（北から）
3　37号土坑（北東から）
図版39　1　2区第2面全景（空中写真、東から）　2　2区第2面西側（空中写真、上が北）
3　2区第2面東側（空中写真、上が南）
図版40　1　152～155号竪穴住居跡（空中写真、上が北）
2　9・10号掘立柱建物跡（空中写真、上が北）
3　4・5号円形周溝状遺構（空中写真、上が北）
図版41　1　141号竪穴住居跡（南西から）
2　142号竪穴住居跡（南西から）
3　142号竪穴住居跡カマド（南西から）
図版42　1　142号竪穴住居跡出土状況（北から）
2　143・144・145号竪穴住居跡（南東から）
3　146号竪穴住居跡（北から）
図版43　1　147号竪穴住居跡（南から）　2　148号竪穴住居跡（南から）
3　148号竪穴住居跡出土状況（北東から）

図版44　1　148号竪穴住居跡階段状遺構（南から）　2　149号竪穴住居跡（南西から）
3　149号竪穴住居跡カマド（南西から）
図版45　1　150号竪穴住居跡（北西から）　2　151号竪穴住居跡、44・45号土坑（北西から）
3　152・153号竪穴住居跡（北から）
図版46　1　152号竪穴住居跡出土状況（北から）　2　152号竪穴住居跡カマド出土状況（北から）
3　152号竪穴住居跡カマド完掘状況（北から）
図版47　1　154号竪穴住居跡（南から）　2　154号竪穴住居跡カマド（南から）
3　155号竪穴住居跡（北東から）
図版48　1　156号竪穴住居跡（南から）　2　156号竪穴住居跡カマド（南から）
3　157号竪穴住居跡（南から）
図版49　1　157号竪穴住居跡カマド（南から）　2　158・159号竪穴住居跡（南から）
3　158号竪穴住居跡カマド（南から）
図版50　1　159号竪穴住居跡カマド（南から）　2　160号竪穴住居跡・11号掘立柱建物跡（南から）
3　160号竪穴住居跡カマド（南から）
図版51　1　161号竪穴住居跡（東から）　2　164号竪穴住居跡、10号掘立柱建物跡（西から）
3　166A・166B・167号竪穴住居跡、SX05（東から）
図版52　1　166A号竪穴住居跡カマド半截状況（東から）　2　166A号竪穴住居跡カマド完掘状況（東から）
3　166B号竪穴住居跡炉跡土層（西から）
図版53　1　167号竪穴住居跡カマド（南から）　2　9号掘立柱建物跡検出状況（東から）
3　9号掘立柱建物跡完掘状況（東から）
図版54　1　11号掘立柱建物跡（東から）　2　38号土坑（北から）
3　39号土坑土層（南から）
図版55　1　39号土坑（南から）　2　40号土坑（東から）
3　41号土坑（東から）
図版56　1　42号土坑（南から）　2　44号土坑（北から）
3　46号土坑土層（南から）
図版57　1　46号土坑（南から）　2　47号土坑土層（西から）
3　47号土坑（西から）
図版58　1　48号土坑（南から）　2　49号土坑（北から）
3　50号土坑（西から）
図版59　1　51号土坑（西から）　2　52号土坑（北から）
3　53号土坑（北から）
図版60　1　54号土坑（北から）　2　55号土坑（南東から）
3　15号溝（南から）
図版61　1　15号溝上層（南から）　2　20号溝B群出土状況（北から）
3　20号溝C群出土状況（南から）
図版62　1　20号溝A群出土状況（北から）　2　20号溝中央土層（東から）
3　24号溝出土状況（西から）
図版63　1　24号溝出土状況（東から）　2　24号溝土層（東から）
3　25号溝北土層（北から）　4　25号溝南土層（東から）
図版64　1　4・5号円形周溝状遺構（北から）　2　4号円形周溝状遺構北土層（西から）
3　365号ピット（東から）
図版65　1　3区第1面全景（空中写真、南東から）　2　3区第1面全景（空中写真、上が北）
3　3区第1面東（空中写真、上が北）
図版66　1　169号竪穴住居跡（南から）　2　169号竪穴住居跡カマド（南から）
3　171号竪穴住居跡（東から）
図版67　1　173・176号竪穴住居跡、60号土坑（東から）　2　173・176号竪穴住居跡カマド（東から）
3　176号竪穴住居跡カマド（東から）
図版68　1　174号竪穴住居跡（南から）　2　177号竪穴住居跡（南から）
3　177号竪穴住居跡カマド（南から）
図版69　1　178号竪穴住居跡・59号土坑（南から）　2　181・183・184号竪穴住居跡（南から）
3　181号竪穴住居跡カマド（南から）
図版70　1　182号竪穴住居跡（南から）　2　182号竪穴住居跡カマド（南から）
3　184号竪穴住居跡カマド（南から）

図版71　1　185号竪穴住居跡（南から）　2　185号竪穴住居跡カマド（南から）
3　187～189号竪穴住居跡（西から）
図版72　1　187号竪穴住居跡カマド（西から）
2　187号竪穴住居跡カマド１煙道部掘り込み完掘状況（西から）
3　187号竪穴住居跡カマド２煙道部掘り込み完掘状況（西から）
図版73　1　189号竪穴住居跡カマド（西から）　2　190号竪穴住居跡（西から）
3　190号竪穴住居跡カマド（西から）
図版74　1　193・194号竪穴住居跡（南から）　2　193号竪穴住居跡カマド（南から）
3　196号竪穴住居跡（東から）
図版75　1　196号竪穴住居跡カマド（東から）
2　196号竪穴住居跡カマド甑内出土石製紡錘車出土状況（東から）
3　197号竪穴住居跡（南から）
図版76　1　197号竪穴住居跡カマド（南から）　2　200・201号竪穴住居跡（東から）
3　200号竪穴住居跡カマド（東から）
図版77　1　201号竪穴住居跡カマド（南から）　2　202号竪穴住居跡（南から）
3　202号竪穴住居跡（南から）
図版78　1　203号竪穴住居跡（南から）　2　203号竪穴住居跡カマド（南から）
3　204号竪穴住居跡（東から）
図版79　1　205号竪穴住居跡（南から）　2　205号竪穴住居跡カマド（南から）
3　206号竪穴住居跡（東から）
図版80　1　206号竪穴住居跡カマド（東から）　2　207号竪穴住居跡（南から）
3　208号竪穴住居跡（南から）
図版81　1　208号竪穴住居跡カマド出土状況（南から）　2　208号竪穴住居跡カマド完掘状況（南から）
3　209号竪穴住居跡（南から）
図版82　1　209号竪穴住居跡カマド（南から）　2　210号竪穴住居跡（南から）
3　210号竪穴住居跡カマド（南から）
図版83　1　211号竪穴住居跡（南から）　2　211号竪穴住居跡カマド（南から）
3　213号竪穴住居跡（南から）
図版84　1　213号竪穴住居跡カマド（南から）　2　214号竪穴住居跡（西から）
3　214号竪穴住居跡カマド（西から）
図版85　1　12号掘立柱建物跡、59号土坑（南から）　2　56号土坑（南から）
3　62号土坑（東から）
図版86　1　66号土坑（北北西から）　2　28号溝北土層（北から）
3　28－１号溝南土層（北から）
図版87　1　29号溝北土層（南から）　2　29号溝中央土層（北から）
3　33号溝中央土層（北から）
図版88　1　３区第２面全景（空中写真、上が北）　2　３区第２面全景（西から）
3　226・227号竪穴住居跡（南から）
図版89　1　226号竪穴住居跡カマド（南から）　2　228号竪穴住居跡カマド（東から）
3　229号竪穴住居跡（南から）
図版90　1　230号竪穴住居跡（南から）　2　231号竪穴住居跡（東から）
3　231号竪穴住居跡カマド（東から）
図版91　1　232号竪穴住居跡（北から）　2　１号竪穴遺構（北から）
3　74号土坑（北から）
図版92　1　75号土坑（西から）　2　81号土坑（南西から）
3　37号溝土層（東から）
図版93　1　４区第１面全景（北から）　2　４区第１面北（南から）
3　216～219号竪穴住居跡（南東から）
図版94　1　217号竪穴住居跡カマド（南東から）　2　218号竪穴住居跡カマド（南東から）
3　68号土坑（北東から）　4　70号土坑（南から）
図版95　1　４区第２面全景（北から）　2　４区第２面全景（南から）
3　39号溝土層（東から）
図版96　1　５区第１面全景（東から）　2　41～44号溝土層（西から）
3　５区第２面全景（東から）

図版97　1　82号土坑（北から）　2　82号土坑土層（南から）
3　SX06土層（東から）
図版98　1　41～45号溝土層（第2面時、西から）　2　5区第3面全景（東から）
3　5区東壁土層（第3面時、西から）
図版99　1　47号溝完掘・土層（西から）　2　5区西トレンチ全景（西から）
3　5区西トレンチ北壁土層（南東から）
図版100　78～81号竪穴住居跡出土土器
図版101　90・93・95～97・106号竪穴住居跡出土土器
図版102　108・109・112～115・120号竪穴住居跡出土土器
図版103　120・121号竪穴住居跡出土土器
図版104　121・123・129・133・134号竪穴住居跡出土土器
図版105　134・135・137号竪穴住居跡出土土器
図版106　21・22・26号土坑出土土器
図版107　27・29・30号土坑出土土器
図版108　37号土坑出土土器
図版109　33号土坑、18号溝、2区第1面遺構面等出土土器
図版110　2区第1面遺構面等、117・142・145・147号竪穴住居跡出土土器
図版111　148号竪穴住居跡出土土器
図版112　148・151・152号竪穴住居跡出土土器
図版113　152号竪穴住居跡出土土器
図版114　152・157・162・164・166A・166B号竪穴住居跡出土土器
図版115　166B号竪穴住居跡、38・40・44号土坑出土土器
図版116　44・55号土坑、20号溝（1）出土土器
図版117　20号溝出土土器（2）
図版118　20号溝出土土器（3）
図版119　20号溝出土土器（4）
図版120　20号溝出土土器（5）
図版121　20号溝（6）、24号溝（1）出土土器
図版122　24号溝出土土器（2）
図版123　24号溝（3）、25号溝出土土器
図版124　25号溝、4号円形周溝状遺構、SX05出土土器
図版125　SX05、2区第2面ピット、365号ピット出土土器
図版126　2区第2面等、171号竪穴住居跡出土土器
図版127　185・187・196号竪穴住居跡出土土器
図版128　197・200・202・207号竪穴住居跡出土土器
図版129　215号竪穴住居跡、28・29・33号溝出土土器
図版130　3区第1面遺構面等、226・229号竪穴住居跡、3区第2遺構面等出土土器
図版131　3区第2面遺構面等、表採・側溝出土土器
図版132　石器・石製品（1）
図版133　石器・石製品（2）、土製品（1）
図版134　土製品（2）、製塩土器、鉄器（1）
図版135　鉄器（2）、耳環、鉄滓（1）
図版136　鉄滓（2）、青銅器

挿図目次

［上巻］

第1図　堂畑遺跡の位置……1
第2図　周辺地形分類・遺跡分布図（1／50,000）……6
第3図　周辺遺跡分布図（1／10,000）……7
第4図　調査区周辺地形図（1／2,000・1/100）……8
第5図　堂畑遺跡遺構配置図（1／600）……折込
第6図　2区第1・2面住居跡切り合い関係図……9

第 7 図 78号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 10
第 8 図 78・79（1）号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 11
第 9 図 79・80号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 12
第 10 図 79～81号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 13
第 11 図 81・82号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 15
第 12 図 82・83・87～93（1）号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 17
第 13 図 83・87・88号竪穴住居跡、87号住居跡カマド実測図（1／60・1／30）…… 19
第 14 図 89・92・94号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 20
第 15 図 90号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 21
第 16 図 91号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 23
第 17 図 93号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 25
第 18 図 93（2）・94号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 27
第 19 図 95・100号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 29
第 20 図 95・96号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 31
第 21 図 96・98号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 33
第 22 図 97号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 34
第 23 図 97～99・101号竪穴住居跡出上土器実測図（1／4・1／3）…… 35
第 24 図 99・101号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 36
第 25 図 102号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 37
第 26 図 102～104・106・107（1）号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 38
第 27 図 107（2）～111号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 39
第 28 図 103号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 41
第 29 図 104号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 43
第 30 図 106号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 45
第 31 図 107号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 47
第 32 図 108・130号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 49
第 33 図 109号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 51
第 34 図 110号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 53
第 35 図 111号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 55
第 36 図 112号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 56
第 37 図 112・113号竪穴住居跡出上土器実測図（1／3）…… 57
第 38 図 113号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 59
第 39 図 114号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 61
第 40 図 114～116号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 63
第 41 図 115号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 65
第 42 図 116・117・119号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 66
第 43 図 118号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 67
第 44 図 120号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 68
第 45 図 120号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 69
第 46 図 121・122号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 70
第 47 図 121号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4）…… 71
第 48 図 123・124号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 73
第 49 図 122・123・125・126・128号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3・1／4）…… 75
第 50 図 125・126号竪穴住居跡、125号住居跡カマド実測図（1／60・1／30）…… 76
第 51 図 128号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 77
第 52 図 129号竪穴住居跡・カマド、136号竪穴住居跡実測図（1／60・1／30）…… 78
第 53 図 129～133号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 79
第 54 図 131号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 81
第 55 図 132号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 83
第 56 図 133～135号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 85
第 57 図 133～135号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）…… 87
第 58 図 134・135・137号竪穴住居跡出上土器実測図（1／4・1／3）…… 89
第 59 図 137号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 91
第 60 図 138号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 92

第 61 図　138～140号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 93
第 62 図　139号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 95
第 63 図　140号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 97
第 64 図　3号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 98
第 65 図　3・4・8号掘立柱建物跡、1・2号柵跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 99
第 66 図　4号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 100
第 67 図　6・7号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 101
第 68 図　8号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 102
第 69 図　1・2号柵跡実測図（1／60）…… 103
第 70 図　20～24号土坑実測図（1／40・1／30）…… 105
第 71 図　20・21（1）号土坑出土土器実測図（1／4）…… 106
第 72 図　21（2）・22号土坑出土土器実測図（1／3・1／4）…… 107
第 73 図　23・26号土坑出土土器実測図（1／3・1／4）…… 109
第 74 図　25～27、29号土坑実測図（1／30）…… 111
第 75 図　27・29号土坑出土土器実測図（1／4）…… 113
第 76 図　30～33号土坑実測図（1／40・1／30）…… 115
第 77 図　30・31・33・35・37（1）号土坑出土土器実測図（1／3・1／4）…… 116
第 78 図　37号土坑出土土器実測図（2）（1／4）…… 117
第 79 図　37号土坑出土土器実測図（3）（1／3・1／4）…… 118
第 80 図　34～37号土坑実測図（1／30）…… 119
第 81 図　16・18号溝出土土器実測図（1／4・1／3）…… 121
第 82 図　2区第1面ピット出土土器実測図（1／3・1／6・1／4）…… 125
第 83 図　2区第1面遺構面等出土土器実測図（1）（1／4）…… 127
第 84 図　2区第1面遺構面等出土土器実測図（2）（1／4）…… 128
第 85 図　2区第1面遺構面等出土土器実測図（3）（1／4・1／3）…… 129
第 86 図　2区第1面遺構面等出土土器実測図（4）（1／3）…… 130
第 87 図　2区第1面遺構面等出土土器実測図（5）（1／3）…… 132
第 88 図　117・119号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4）…… 135
第 89 図　141号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 136
第 90 図　141～143・145号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 137
第 91 図　142号竪穴住居跡・土器出土状況・カマド実測図（1／60・1／30）…… 138
第 92 図　143・144号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 139
第 93 図　145・146号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 141
第 94 図　146・147号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3・1／4）…… 143
第 95 図　147・148号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 145
第 96 図　148号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）…… 146
第 97 図　148号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）…… 147
第 98 図　148（3）・149号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 148
第 99 図　149号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 151
第 100 図　150・151号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 153
第 101 図　150・151（1）号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 154
第 102 図　151号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／4）…… 155
第 103 図　152号竪穴住居跡・カマド東側土器出土状況・カマド実測図（1／60・1／40・1／30）…… 157
第 104 図　152号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）…… 158
第 105 図　152号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）…… 159
第 106 図　152（3）～154号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 160
第 107 図　153・155号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 162
第 108 図　154号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 163
第 109 図　156・161号竪穴住居跡、158号住居跡カマド実測図（1／60・1／30）…… 165
第 110 図　161号竪穴住居跡北壁土坑実測図（1／30）…… 166
第 111 図　156～159号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 167
第 112 図　157号竪穴住居跡・カマド・住居跡東壁遺状遺構実測図（1／60・1／30）…… 169
第 113 図　158号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 171
第 114 図　159号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 173

第115図　160・168号竪穴住居跡、160号住居跡カマド実測図（1／60・1／30）…… 175
第116図　160～164（1）号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3・1／4）…… 176
第117図　164号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／4）…… 177
第118図　162～165号竪穴住居跡・162号住居跡カマド実測図（1／60・1／30）…… 178
第119図　166A号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 179
第120図　166B号竪穴住居跡・炉跡実測図（1／60・1／30）…… 181
第121図　166A・B（1）号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3・1／4）…… 182
第122図　166B（2）・167号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3・1／4）…… 183
第123図　167号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 185
第124図　9号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 186
第125図　9号掘立柱建物跡柱穴断面実測図（1／30）…… 187
第126図　9・10号掘立柱建物跡出土土器実測図（1／3・1／4）…… 188
第127図　10・11号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 189
第128図　38～41号土坑実測図（1／30）…… 191
第129図　38号土坑出土土器実測図（1／4）…… 193
第130図　40・43・44（1）号土坑出土土器実測図（1／3・1／4）…… 194
第131図　44（2）・46～48号土坑出土土器実測図（1／3・1／4）…… 195
第132図　42～45号土坑実測図（1／30・1／40）…… 197
第133図　46・47号土坑実測図（1／40）…… 199
第134図　48～50号土坑実測図（1／40・1／30）…… 200
第135図　49～52・54・55号土坑出土土器実測図（1／4・1／3）…… 201
第136図　51～54号土坑実測図（1／30）…… 203
第137図　55号土坑実測図（1／30）…… 204
第138図　15・16・20・25号溝土層実測図（1／30）…… 206
第139図　15号溝出土土器実測図（1／4・1／3）…… 207
第140図　20・25号溝実測図（1／60・1／120）……折込
第141図　20号溝土器出土状況（A群）（1）（1／30）…… 209
第142図　20号溝土器出土状況（B群）（2）（1／30）…… 210
第143図　20号溝土器出土状況（C群）（3）（1／30）…… 211
第144図　20号溝出土土器実測図（1）（1／4）…… 213
第145図　20号溝出土土器実測図（2）（1／4）…… 215
第146図　20号溝出土土器実測図（3）（1／4）…… 216
第147図　20号溝出土土器実測図（4）（1／4）…… 217
第148図　20号溝出土土器実測図（5）（1／4）…… 219
第149図　20号溝出土土器実測図（6）（1／4）…… 220
第150図　20号溝出土土器実測図（7）（1／4）…… 221
第151図　20号溝出土土器実測図（8）（1／4）…… 223
第152図　20号溝出土土器実測図（9）（1／4）…… 224
第153図　20号溝出土土器実測図（10）（1／4）…… 225
第154図　20号溝出土土器実測図（11）（1／3・1／4）…… 226
第155図　20号溝出土土器実測図（12）（1／4）…… 227
第156図　20号溝出土土器実測図（13）（1／4）…… 228
第157図　24号溝・土層実測図（1／60・1／30）…… 231
第158図　22・23・24（1）号溝出土土器実測図（1／3・1／4）…… 233
第159図　24号溝出土土器実測図（2）（1／4）…… 234
第160図　24号溝出土土器実測図（3）（1／3・1／4）…… 235
第161図　24号溝出土土器実測図（4）（1／4）…… 237
第162図　24号溝出土土器実測図（5）（1／4）…… 238
第163図　24号溝出土土器実測図（6）（1／4）…… 239
第164図　24号溝出土土器実測図（7）（1／4）…… 240
第165図　25号溝出土土器実測図（1）（1／4）…… 242
第166図　25号溝出土土器実測図（2）（1／3・1／4）…… 243
第167図　4・5号円形周溝状遺構（1／60）…… 245
第168図　4・5号円形周溝状遺構出土土器実測図（1／4）…… 247

第169図　SX05出土土器実測図（1／4）…… 249
第170図　365号ピット実測図（1／30）…… 250
第171図　2区第2面ピット・365号ピット出土土器実測図（1／3・1／4）…… 251
第172図　2区第2面遺構面等出土土器実測図（1）（1／6・1／4）…… 252
第173図　2区第2面遺構面等出土土器実測図（2）（1／3）…… 253
第174図　3区第1・2面住居跡切り合い関係図…… 254
第175図　169・170・179号竪穴住居跡、169号住居跡カマド実測図（1／60・1／30）…… 255
第176図　168～172号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 257
第177図　171・172号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 259
第178図　171号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／4）…… 260
第179図　173・176号竪穴住居跡、176号住居跡カマド実測図（1／60・1／30）…… 261
第180図　173～179号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 263
第181図　174・175・178号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 265
第182図　177号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 267
第183図　181・183・186号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 268
第184図　181・182・184・185号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 269
第185図　182号竪穴住居跡、181・182号住居跡カマド実測図（1／60・1／30）…… 271
第186図　184号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 273
第187図　185号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 275
第188図　187号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 277
第189図　187～190・192～195号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 278
第190図　188号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 279
第191図　189号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 281
第192図　190・192号竪穴住居跡、190号住居跡カマド実測図（1／60・1／30）…… 283
第193図　193・194号竪穴住居跡、193号住居跡カマド実測図（1／60・1／30）…… 285
第194図　195・196号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 287
第195図　196号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）…… 288
第196図　197号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 289
第197図　196号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）…… 290
第198図　196（2）・197号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 291
第199図　200号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 293
第200図　200～202（1）号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 294
第201図　202（2）～206号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 295
第202図　201号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 297
第203図　202号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 299
第204図　203号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 301
第205図　204号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 302
第206図　205号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 303
第207図　206号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 304
第208図　207号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 305
第209図　207～210・213号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 307
第210図　208号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 309
第211図　209号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 310
第212図　210号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 311
第213図　211号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 312
第214図　213号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 313
第215図　214号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 314
第216図　214・215号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 315
第217図　215号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 316
第218図　12号掘立柱建物跡実測図（1／60）…… 317
第219図　12号掘立柱建物跡出土土器実測図（1／3）…… 318
第220図　56・58～61号土坑実測図（1／60・1／30）…… 319
第221図　58・60・62・63・67号土坑出土土器実測図（1／3）…… 320

第 222 図　62～64・66・67号土坑実測図（1／30）…… 321
第 223 図　28・29・32～34号溝土層実測図（1／30）…… 323
第 224 図　28号溝出土土器実測図（1／4・1／3）…… 325
第 225 図　29・32・33（1）号溝出土土器実測図（1／4・1／3）…… 326
第 226 図　1・33（2）・34号溝出土土器実測図（1／4・1／3）…… 327
第 227 図　3区第1面ピット・遺構面等（1）出土土器実測図（1／6・1／4・1／3）…… 331
第 228 図　3区第1面遺構面等出土土器実測図（2）（1／3）…… 332
第 229 図　226・227号竪穴住居跡、226号住居跡カマド実測図（1／60・1／30）…… 335
第 230 図　226・227・229・230号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 336
第 231 図　228・230号竪穴住居跡、228号住居跡カマド実測図（1／60・1／30）…… 337
第 232 図　229号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 338
第 233 図　231号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 339
第 234 図　232・233号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 341
第 235 図　231～233号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 342
第 236 図　1号竪穴遺構実測図（1／60）…… 343
第 237 図　72～75号土坑実測図（1／30）…… 345
第 238 図　72・74・76・79～81号土坑出土土器実測図（1／4・1／3）…… 346
第 239 図　76～80号土坑実測図（1／30）…… 347
第 240 図　81号土坑実測図（1／30）…… 348
第 241 図　37・38号溝土層実測図（1／30）…… 349
第 242 図　37・38号溝出土土器実測図（1／4・1／3）…… 349
第 243 図　3区第2面ピット・遺構面等出土土器実測図（1）（1／4・1／3）…… 351
第 244 図　3区第2面遺構面等出土土器実測図（2）（1／3）…… 352
第 245 図　4区第1・2面遺構切り合い関係図…… 353
第 246 図　216・219号竪穴住居跡、217号住居跡カマド実測図（1／60・1／30）…… 355
第 247 図　216～220号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 357
第 248 図　217・218号竪穴住居跡、218号住居跡カマド実測図（1／60・1／30）…… 359
第 249 図　221・222号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 360
第 250 図　223号竪穴住居跡実測図（1／40）…… 361
第 251 図　221・223号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4・1／3）…… 361
第 252 図　68～71号土坑実測図（1／30）…… 363
第 253 図　69～71号土坑出土土器実測図（1／3）…… 364
第 254 図　4区第1面ピット・遺構面等出土土器実測図（1／3）…… 364
第 255 図　236号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 365
第 256 図　39号溝土層実測図（1／30）…… 366
第 257 図　5区遺構配置図（1／200）…… 367
第 258 図　82号土坑実測図、41・42・45・46・47号溝土層実測図（1／60）…… 368
第 259 図　82号土坑、41～45号溝、SX06（1）出土土器実測図（1／3）…… 371
第 260 図　SX06（2）・遺構面等出土土器実測図（1／3）…… 372
第 261 図　表採・側溝等出土土器実測図（1）（1／4・1／3）…… 375
第 262 図　表採・側溝等出土土器実測図（2）（1／3）…… 376
第 263 図　石器・石製品実測図（1）（1／2・2／3）…… 379
第 264 図　石器・石製品実測図（2）（2／3・1／2）…… 381
第 265 図　石器・石製品実測図（3）（実大・1／2）…… 383
第 266 図　石器・石製品実測図（4）（1／2）…… 385
第 267 図　石器・石製品実測図（5）（1／3）…… 387
第 268 図　土製品実測図（1／2）…… 388
第 269 図　製塩土器実測図（1／3）…… 389
第 270 図　鉄製品実測図（1／2）…… 392
第 271 図　116号ピット実測図（再録）（1／4）…… 393
第 272 図　青銅器実測図（実大）…… 394

［下巻］

第273図　炭化材断面顕微鏡写真…… 399
第274図　イネ炭化果実写真…… 402
第275図　青銅器X線分析図（1）…… 404
第276図　青銅器X線分析図（2）…… 405
第277図　鉛同位対比の比較図…… 408
第278図　堂畑遺跡出土の須恵Ⅱ式土器（1／6）…… 411
第279図　カマド分類図（1／60）…… 415
第280図　堂畑遺跡周辺における土師器変遷図（1／12・1／6）…… 419
第281図　堂畑遺跡遺構変遷図（1）（1／600）……折込
第282図　堂畑遺跡遺構変遷図（2）（1／600）……折込
第283図　三牟田出土石剣実測図（2／3）…… 426

付図

第284図　堂畑遺跡遺構配置図（1）（3・4区）（1／200）
第285図　堂畑遺跡遺構配置図（2）（1区）（1／200）
第286図　堂畑遺跡遺構配置図（3）（2区）（1／200）

表目次

第1表　浮羽バイパス調査遺跡一覧…… 1
第2表　日玉計測表…… 383
第3表　石器・石製品・土製品・金属器一覧表（1）…… 395
第4表　石器・石製品・土製品・金属器一覧表（2）…… 396
第5表　樹種同定結果…… 398
第6表　イネ炭化果実計測値…… 401
第7表　種実同定結果…… 402
第8表　堂畑遺跡出土青銅片（堂畑遺跡3次1区P116出土）の鉛同位体比値 …… 406
第9表　口縁部各位形態の出現頻度…… 410
第10表　口縁部形態の時期別出現頻度…… 412
第11表　堂畑遺跡カマド一覧表（1）…… 415
第12表　堂畑遺跡カマド一覧表（2）…… 416

Ⅳ　自然化学分析

1. 樹種同定

株式会社　古環境研究所

（1）はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

（2）試料

試料は、堂畑遺跡3次調査より出土した炭化材4点である。

（3）方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（4）結果

結果を第5表に、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

シイ属　*Castanopsis*　ブナ科　　第273図1

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

なおシイ属には、スダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は保存状態が悪く、広範囲の観察が困難であったので、シイ属の同定にとどまる。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　　第273図2

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

アカメガシワ　*Mallotus japonicus* Muell. Arg.　トウダイグサ科

横断面：やや小型の道管が、年輪のはじめに単独あるいは2～数個放射方向に複合して散在し、晩材部では小型の厚壁で丸い道管が、放射方向に数個つらなって散在する環孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりアカメガシワに同定される。アカメガシワは本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ10m、径30cm に達する。

ウツギ属　Deutzia　ユキノシタ科　第273図3

横断面：小型で多角形の道管が、ほぼ単独で均一に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は50本前後である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、2～5細胞幅の細長い紡錘形であり、鞘細胞のあるものが多い。

以上の形質よりウツギ属に同定される。ウツギ属は、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉低木である。

（5）所見

同定の結果、堂畑遺跡の炭化材は、シイ属1点、コナラ属アカガシ亜属1点、アカメガシワ1点、ウツギ属1点であった。いずれも温帯域に分布する樹木であり、シイ属とコナラ属アカガシ亜属は暖温帯である西南日本に分布する照葉樹林の主要構成要素である。アカメガシワは二次林要素であり、ウツギ属は水沿いに生育する低木である。

参考文献

佐伯　浩・原田　浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 20－48.
佐伯　浩・原田　浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 49－100.

試　料	結果（学名／和名）	
2区113竪穴住居跡カマド内	*Deutzia*	ウツギ属
2区114竪穴住居跡カマド煙道	*Mallotus japonicus Muell. Arg.*	アカメガシワ
2区152竪穴住居跡内	*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
2区155竪穴住居跡内	*Castanopsis*	シイ属

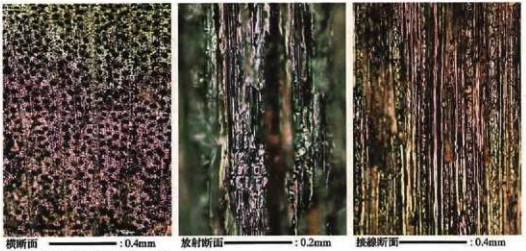
第5表　樹種同定結果

横断面 ―――― : 0.4mm　放射断面 ―――― : 0.2mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

1．2区155号竪穴住居跡内　シイ属

横断面 ―――― : 0.4mm　放射断面 ―――― : 0.2mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

2．2区152号竪穴住居跡内　コナラ属アカガシ亜属



横断面 ―――― : 0.4mm　放射断面 ―――― : 0.2mm　接線断面 ―――― : 0.4mm

3．2区113号竪穴住居跡カマド内　ウツギ属

第273図　炭化材断面顕微鏡写真

2. 種実同定

株式会社　古環境研究所

（1）はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

（2）試料

試料は、堂畑遺跡2区第2面で検出された39号土坑の堆積物1点である。

（3）方法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

1）試料500cmlに水を加え放置し、泥化を行う。

2）攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別を行う。

3）残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

（4）結果

①分類群

草本1が同定された。学名、和名および粒数を第7表に示し、主要な分類群を写真（第274図）に示す。以下に形態的特徴を記す。

イネ　*Oryza sativa* L.　果実（炭化）イネ科

炭化して黒色であり、楕円形を呈す。表面には縦方向に浅い稜と溝が走る。一端の片側に胚の欠落したくぼみがある。なお、任意に100個の大きさを計測し、計測値を第6表に示した。

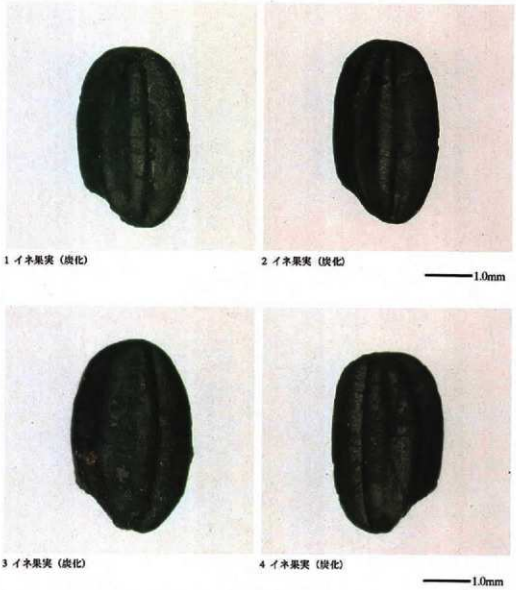
同定の結果、多量の炭化したイネ果実（炭化米）が同定された。胚は欠落しているが、表面は剥落しておらず、玄米の状態である。なお、保存過程において穎が分解した可能性もある。

参考文献

南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実．月刊考古学ジャーナル No. 355，ニューサイエンス社，p. 18－22.
南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p. 276－283.
吉崎昌一（1992）古代籾殻の検出．月刊考古学ジャーナル No. 355，ニューサイエンス社，p.2-14.
佐藤敏也（1971）日本の古代米，雄山閣出版株式会社.
佐藤敏也（1988）弥生のイネ．弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣出版株式会社，p. 97－111.

試料	長さ (mm)	幅 (mm)	試料	長さ (mm)	幅 (mm)
1	4.9	2.5	51	4.6	2.6
2	4.2	2.6	52	4.1	2.9
3	4.4	2.8	53	4.0	2.5
4	4.8	2.7	54	4.5	2.6
5	4.6	2.9	55	4.0	2.5
6	4.1	2.8	56	4.0	2.8
7	4.8	3.0	57	4.1	2.2
8	4.7	2.9	58	3.9	2.3
9	4.9	3.0	59	4.5	2.0
10	4.5	2.6	60	4.9	2.9
11	5.0	2.7	61	4.0	2.8
12	4.8	2.7	62	4.0	2.5
13	4.0	2.9	63	4.8	2.6
14	4.5	2.0	64	4.1	2.5
15	4.8	2.9	65	4.5	2.8
16	4.4	2.2	66	4.6	2.7
17	5.0	3.0	67	4.5	2.6
18	4.3	2.5	68	4.2	2.0
19	4.4	2.8	69	4.9	2.7
20	4.9	3.1	70	4.2	2.9
21	4.2	2.5	71	4.0	2.2
22	4.5	3.0	72	4.8	2.9
23	3.2	2.4	73	4.8	3.7
24	4.8	2.9	74	5.0	2.5
25	4.1	2.6	75	4.1	2.5
26	4.2	2.8	76	4.4	2.6
27	4.9	2.9	77	4.2	3.0
28	4.6	2.6	78	4.3	2.5
29	4.9	2.6	79	4.8	2.8
30	4.5	2.9	80	4.0	2.4
31	5.0	3.0	81	4.9	2.8
32	4.5	2.5	82	4.9	2.4
33	4.7	2.6	83	4.1	2.5
34	4.8	2.8	84	4.5	2.3
35	4.0	2.6	85	4.6	2.7
36	4.5	2.8	86	5.0	2.6
37	4.4	3.0	87	4.9	2.3
38	4.6	2.6	88	4.2	2.5
39	4.5	2.5	89	0.1	2.5
40	4.5	2.8	90	4.0	3.0
41	4.1	2.5	91	4.1	2.6
42	3.8	2.2	92	4.8	2.9
43	4.0	2.8	93	4.4	2.8
44	4.0	2.3	94	5.0	2.9
45	4.6	3.0	95	4.1	2.8
46	4.5	3.1	96	5.0	2.7
47	3.8	2.1	97	4.7	2.9
48	3.9	2.6	98	4.1	2.8
49	3.8	2.3	99	4.9	2.8
50	3.6	2.4	100	5.1	2.4

第 6 表　イネ炭化果実計測値



第274図　イネ炭化果実写真

遺構名	分類群		部位	個数
	学名	和名		
2区39号土坑	*Oryza sativa* L.	イネ	果実（炭化）	*350

*炭化米片多数あり

第7表　種実同定結果

3. 鉛同位対比分析

財団法人　元興寺文化財研究所

（1）分析対象

堂畑遺跡3次調査1区116号ピット出土　青銅器片

（2）分析内容

含まれる成分の調査及び鉛同位体比測定に必要な鉛の有無の確認のため、蛍光X線分析（以下XRF）による表面からの非破壊分析を行った。次いで青銅器片全量を鉛同位体比測定用試料とした。鉛同位体比測定は別府大学文学部平尾良光教授らによる。

（3）XRFによる分析

① 使用機器及び測定条件

・エネルギー分散型蛍光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ㈱製 SEA5230）

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。

モリブデン管球使用、大気条件下、管電圧45kV（コリメータφ1.8㎜）、測定時間300秒

ここではカリウム（K）よりも重い元素を検出することのできる条件に設定している。

② 分析結果

遺物片の数箇所を分析したところ、どの部分もほぼ同様の分析結果を示し、この遺物は銅、スズ、鉛を主成分とする青銅製で、微量元素として砒素、銀、アンチモンを含むことがわかった。以下に2箇所の分析結果を示す。

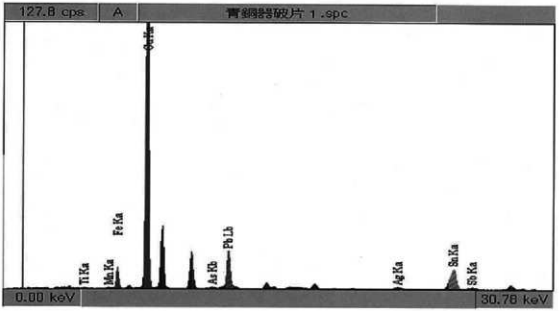
［結果1，2］

	元素	元素名	ライン	測定箇所1 (cps)	測定箇所2 (cps)	ROI (keV)
22	Ti	チタン	Kα	5.793	7.882	4.35－ 4.66
25	Mn	マンガン	Kα	5.399	7.037	5.73－ 6.06
26	Fe	鉄	Kα	83.473	89.177	6.23－ 6.57
29	Cu	銅	Kα	1724.978	1394.669	7.86－ 8.22
33	As	ヒ素	Kβ	10.985	23.294	11.52－11.93
47	Ag	銀	Kα	16.205	21.364	21.84－22.36
50	Sn	スズ	Kα	177.310	149.080	24.92－25.47
51	Sb	アンチモン	Kα	16.465	19.369	25.99－26.55
82	Pb	鉛	Lβ	203.594	187.935	12.42－12.84

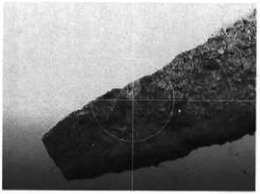
［測定箇所１］

視野：[XY] 6.60　4.95（mm）

［スペクトル１］



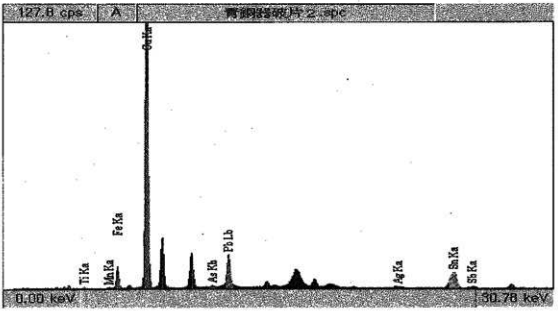
［測定箇所２］



視野：[XY] 6.60　4.95（mm）

第275図　青銅器X線分析図（１）

［スペクトル２］



第276図　青銅器X線分析図（２）

（４）鉛同位体比測定

青銅器片全量を鉛同位体比測定用試料とし、別府大学文学部平尾良光教授に調査を依頼した。以下にその報告を示す。

福岡県堂畑遺跡から出土した青銅片の鉛同位体比

別府大学文学部　淀川奈緒子、谷水雅治（海洋研究開発機構）、平尾良光

①　はじめに

福岡県うきは市吉井町新治に所在する堂畑遺跡から出土した青銅片に関して、元興寺文化財研究所を通して、鉛同位体比測定の依頼があった。本調査は当研究室における「弥生時代青銅器の産地推定」という研究の一環として、研究協力する価値が充分あった。そこで、鉛同位体比法で遺物の材料となった青銅に含まれる鉛の産地推定を行った。

②　資料

測定に供された試料の青銅片は堂畑遺跡第３次調査で出土した。堂畑遺跡は弥生時代中期後半～奈良時代まで集落が営まれており、弥生時代においては中期後半の竪穴住居跡・環濠などが検出されている。今回の青銅片試料は３次調査１区第116号ピットから出土した。資料の大きさは約７ cm×４cm、厚さは１mm程度である。このピットは青銅片を入れるために掘られたように見え、ピット

には共伴物がないとの報告である。ただし、ピットのすぐ北側で弥生時代後期甕体部片が出土しており、青銅片の時代としてはこの甕と同時期の弥生時代後期と推定されている。

③ 鉛同位体比法

3－1 鉛同位体比法による青銅材料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した（*1）。一般的に、鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が違えばそれぞれの鉱山毎に異なった値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことが今までの研究でわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の産地を示すと推定される。古代の青銅には鉛が微量成分として0.01%程度、あるいは主成分の一つとして5～20%含まれている。鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器の感度が非常に良いため、1 μgの鉛があれば十分である。また試料は青銅の金属部分でも錆部分でも、同位体比は原則的に変わらないと示されている。今回の試料は錆試料ではあるが、かなり内面の錆であるように見受けられた。この試料に関して蛍光X線測定法で鉛量を大まかに調べた後、電気分解法で鉛を化学的に単離した。その後、同位体比を二重収斂形ICP 質量分析計で測定した。

3－2 鉛分離と鉛同位体比測定

採取した用錆試料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を白金電極を用いて2 Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解し、試料溶液として保存した。

ICP 質量分析計による測定では、測定機器の安定性のために鉛濃度が「0.2 μg鉛／1 g」である溶液が必要なので、まず電気分解して鉛を集めた源試料溶液濃度を測定した。その後、源溶液を希釈し、同位体比測定用の溶液を用意した。同位体比測定にはこの0.2 μg鉛／1 gの溶液が2 g以上必要なので、3～10 gの溶液が得られるように適宜希釈した。利用したICP 質量分析計は高知大学海洋コア総合研究センターに所属しているサーモエレクトロン社製二重収斂型多重検出器型誘導結合プラズマ（ICP）質量分析計（ネプチューン）である。なおこの機器の精度や再現性に関する詳細な記載は省略する。実験に先立ち、鉛同位体比を測定するに足るだけの充分安定した状態であることを確認した。また随時、NBS－981 標準鉛溶液を測定し、機器の安定性を確かめた。

3－3 鉛同位体比の結果と考察

a. 鉛同位体比測定値

測定した鉛同位体比を第8表で示した。

測定番号	$^{208}Pb/^{206}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{206}Pb/^{204}Pb$
BP0014	17.744	15.545	38.415	0.8761	2.1650
誤差（σ）	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006

表8 堂畑遺跡出土青銅片（堂畑遺跡3次1区 P116 出土）の鉛同位体比値

この値を今までに得られている資料と比較するために鉛同位体比を第277図で示した。1は縦軸が $^{208}Pb/^{206}Pb$ の値、横軸が $^{207}Pb/^{206}Pb$ の値として示す。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこのなかにプロットした（*2～6）。日本の弥生時代に相当する頃の東アジア地域において、Aは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると中国華北産の鉛のグループである。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛のグループである。Cは現代日本産の鉛鉱石が示す領域である。またDは朝鮮半島産の多鈕細文鏡が分布する領域として示される。2には縦軸が $^{207}Pb/^{206}Pb$ の値、横軸が $^{206}Pb/^{204}Pb$ の値として測定値などをプロットした。この中でA'、B'、C'、D'はそれぞれ中国華北、華南、日本、朝鮮半島の領域を意味する。これらの図の中に、測定値を（○）で示した。

b. 結果と考察

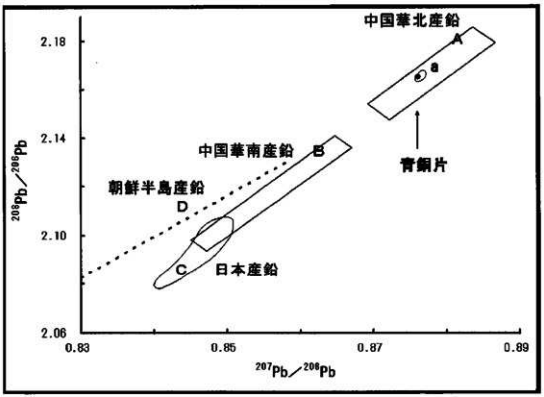
第8表、第277図1・2から理解できることをまとめる。

青銅片は第277図1・2で華北産材料領域（A、A'）に位置した。それ故、この材料は直接的には華北産材料である可能性が高い。しかも両図で（a）、（a'）領域に含まれている。この領域に含まれる資料は弥生時代後期になって、突線鈕（第IV期、新段階）銅鐸や広形銅矛に利用された材料と類似している。今までにかなりの数の弥生時代を初めとする資料を測定しているが、弥生時代後期ではない資料がa，a'領域に位置する場合は極めて少なかった。それ故、この資料が何に利用されたかはわからないにせよ、弥生時代後期から末期にかけての資料である可能性を強く示唆する。

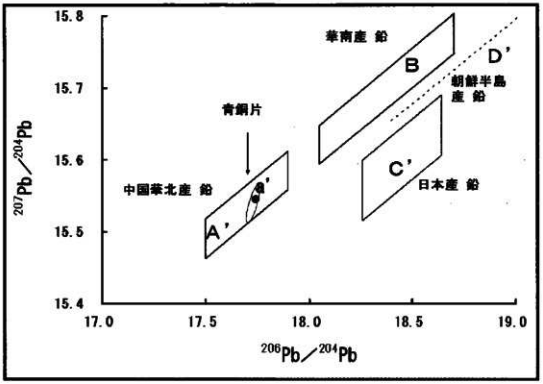
資料の近くから出土した土器などから、本青銅片の利用された年代が弥生時代後期と推定されていることと、青銅片の鉛同位体比から推定される年代とが一致していると判断される。

引用文献

（1）平尾良光:鉛同位体比の測定と分析,『考古資料大観』, 森田稔・井上洋一編, 小学館（東京）, p345-368（2003）
（2）馬淵久夫, 平尾良光：福岡県出土青銅器の鉛同位体比；考古学雑誌 75, 385-404（1990）
（3）平尾良光編：古代青銅の流通と鋳造；鶴山堂（1999）
（4）馬淵久夫, 平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究；MUSEUM No. 370, 4-10（1982a）
（5）馬淵久夫, 平尾良光：鉛同位体比から見た銅鐸の原料；考古学雑誌 68, 42-62（1982b）
（6）馬淵久夫,平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究（二）；MUSEUM No. 382, 16-26（1983）
（7）平尾良光：『古墳時代青銅器の鉛同位体比』, 学術振興会科学研究費成果報告書（2004）



1　福岡県堂畑遺跡出土青銅片の鉛同位体比（$^{207}Pb/^{204}Pb$—$^{208}Pb/^{206}Pb$）



2　福岡県堂畑遺跡出土青銅片の鉛同位体比（$^{207}Pb/^{204}Pb$—$^{206}Pb/^{204}Pb$）

第277図　鉛同位対比の比較図

V. ま と め

1. 堂畑遺跡出土の須玖Ⅱ式土器群について

(1) はじめに

堂畑遺跡から出土した弥生時代の遺構群は、総数から見れば多くはないが、出土した土器の総量は多量である。これらの弥生土器は、一部に後期前葉高三潴式新段階～後期中葉下大隈式古段階の資料が認められるものの、その大半は中期後半須玖Ⅱ式土器に位置付けられる。旧浮羽郡内でこれほどの須玖Ⅱ式土器が出土した事例は稀である。ここでは、この多量の須玖Ⅱ式土器の時間的位置付けとその特色について若干言及したい。

(2) 編年的位置付け

須玖式土器の編年については、小田富士雄氏によるⅠ式・Ⅱ式の細分（小田1973）以来、その基本的枠組みの中で細分が行われてきた（cf. 田崎1985、武末1987）。近年、従来須玖Ⅱ式土器の指標とされてきた丹塗器種の盛行が、田崎氏によって設定された須玖Ⅱ式新段階の土器群に後続し、「(中期末～) 後期初頭」に位置づけられるとされる土器群にも認められることなどを根拠として、この土器群を須玖Ⅱ式の範疇に含めて考える研究者が多くなってきた（cf. 平2004）。このように従来中期末～後期初頭（の一部）と考えられてきた時期を中期の枠組みでとらえ直そうとする考えは、集落動態などとはよく対応する可能性が高く、注目される。しかし、この土器群が単独で良好な一括資料を構成する事例は未だ見つかっていないこと、従来の甕棺編年との整合性がまだ十分とれていないことなどから、その位置付けにはやや慎重な態度をとらざるを得ない。従って、ここでは本遺跡出土の須玖Ⅱ式土器について、田崎氏により提示された「古段階」・「新段階」の二細分に従って編年的な位置付けを概述すると、おおよそ次のようになろう。

須玖Ⅱ式古段階：117・121・146号住居跡、21・44号土坑、4号円形周溝状遺構出土土器群。甕型土器は口縁部が比較的短く、胴の張りが小さい。壺型土器は素口縁壺・鋤先口縁壺とも頸部の締まりが強く、口縁部の広がりが小さい。甕・壺・鉢ともに底部は厚みがあり、径が小さい。器台は脚部がやや狭い。その他の器種は良好な資料が認められなかったが、甕蓋、高坏、椀などが見られる。

須玖Ⅱ式新段階：164号住居跡、21・26・27号土坑、20号溝底面・A群・C群出土土器群。甕型土器は口縁部が伸び、胴部が膨らむ。壺型土器は頸部の締まりがやや弱まり、口縁部がやや強く開く。甕・壺・鉢ともに底部が薄くなり、径が大きくなる。器台の脚がやや張る。胴部最大径が20cm程度の小型壺が出現する。このほかに高坏、甕蓋、樽型甕、鉢、椀等が認められる。

なお、20号溝のうちB群・ド・上層出土資料、24・25号溝、151号住居跡出土の土器群などは時期的にやや幅が認められ、上述二段階の資料を含むものと考えられる。

本地域における編年の際の留意事項として、甕型土器の口縁部の角度が時期差の指標としてやや使いにくいことを指摘したい。後述するように本地域の甕型土器の口縁部形態にはいくつかの系統が認められ、これらの系列ごとに時期的変化の形式組列を作る必要があるが、相互の折衷的資料も多いため、その作業は簡単ではないからである。壺型土器のうち鋤先口縁を持つもの、高坏などの口縁部形態も、長く伸びて下方に垂れ下がるものが新しいという一般的な図式からはややはずれる可能性が高く、注意が必要であろう。

（3）地域性

堂畑遺跡は、両筑平野でも最も西部に位置するが、この地域は一般に須玖式土器の以東系・以西系の境界域とされる地域である。須玖式土器における以東系・以西系の大地域色は武末純一氏によって早くから整理されており（武末1987）、さらにこの内部にも小地域色が認められることは井上裕弘氏、武末氏などにより指摘されているところである（cf. 井上1985、武末先掲）。本遺跡出土の弥生時代中期土器群は、この中でも大地域色の境界部付近に位置することから、この立地を反映して興味深い地域性を持つ。以下、この点について器種ごとに気づいた点を列挙していきたい。

まず、甕型土器について若干の分析を試みたい。上述のように、口縁部形態にいくつかの系列が認められる。ここでは、口縁部を鋤先状に仕上げるいわゆる鋤先口縁（第278図4）と、「く」字または逆「L」字状に折り曲げるいわゆる屈折口縁に分類し、屈折口縁はさらに口縁端部を丸く収めるもの（3）と、四角く収め、しばしば口唇部にナデを施して断面が「M」字状を呈するもの（2）、以東系の影響を受けて口縁端部上面に強いナデを施して端部をわずかに上方につまみ上げる、弱い「跳ね上げ口縁」状を呈するもの（1）に細分した。これらについて、出現頻度を計算すると、第9表のようになる。なお、比較のために、同じ須玖Ⅱ式期（古～新）の遺跡である、筑後川流域南岸の旧田主丸町船越高原A遺跡、宝満川流域の旧北野町下高橋馬屋元遺跡について同様のカウントを行っている。

これを見ると、口縁端部の形態は地域性を強く示す属性であることが分かる。下高橋馬屋元遺跡遺跡では、隣接する小郡・鳥栖丘陵や西側からの強い影響を受けたものであろう、鋤先口縁甕が圧倒的に多い。一方、平野東側に位置する船越高原A遺跡や堂畑遺跡では極めて少ない。おそらく搬入されたものと考えたいが、積極的にこれを認める材料はなく、出現頻度からの推測にとどまる。一方、屈折口縁で端部を丸く収める甕は船越高原A遺跡で多く過半数を占めるが、これは久留米市域を介して筑後南西地域からの影響であろう。また、屈折口縁のうち跳ね上げ状口縁は以東系の要素と考えられるが、これが堂畑遺跡で最も多いことはこれが日田地域を介して豊前・京筑地域からの影響下で成立したことを示すものであろう。ただし、本地域の跳ね上げ（系）口縁は日田地域やさらに東の豊前地域の資料と口縁部の特徴的な調整方法が共通するものの、これらよりも跳ね上げの程度が小さく、「跳ね上げ状」と表現したい。

この跳ね上げ状口縁に示される以東地域からの影響は、堂畑遺跡、船越高原A遺跡ではほかにも甕型土器の底部形態（端部がやや張る。5）、素口縁壺の口縁部形態（口縁部上面を強くなでて凹ませ、端部を上方につまみ出す。6）、無頸壺の形状（胴部上半が直線的に内傾する。7）、壺等への多条突帯の付与（8）、甕の口縁部下への沈線の付与等に現れている。一方、いわゆる精製の甕型土器については、通常の甕型土器が様々な口縁部形態を有するのとは対照的に、ほぼ全てが鋤先口縁を有しており、本器種における口縁部形態の選択には強い制約があることが分かる。ただこの場合にも、口縁端部の形状に

		遺　跡	船越高原A遺跡	堂畑遺跡
屈折口縁	端部跳ね上げ状	5個体　(4.6%)	52個体　(14%)	106個体 (49.5%)
	端部四角 or 肥厚	12個体　(11%)	92個体 (24.8%)	56個体 (26.2%)
	端　部　丸	0個体　(0%)	218個体 (58.8%)	37個体 (17.3%)
鋤先口縁		92個体 (84.4%)	9個体　(2.4%)	15個体　(7%)
計		109個体　(100%)	371個体 (100%)	214個体 (100%)

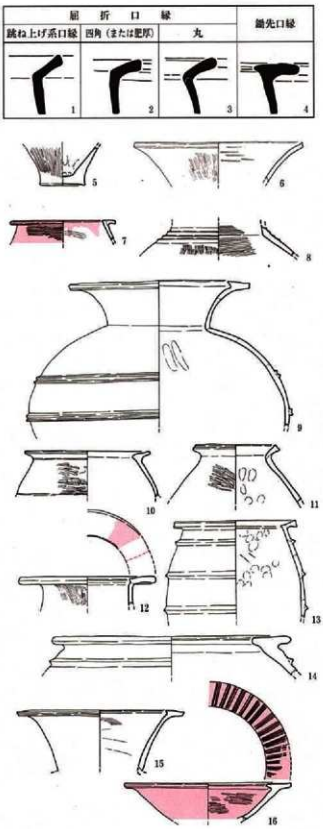
第9表　口縁部各位形態の出現頻度

跳ね上げ技法の影響と考えられる属性、すなわち口縁部上面の強いナデや端部上端の引き上げなどが認められることは特記しておきたい。

以上に列挙したような以東系からの影響を示す諸属性の出現頻度については、甕型土器の口縁部以外は正確にカウントしていないが、その本拠地・影響元（日田盆地か）から離れるほどに減少しており、おそらく距離に応じて頻度が減少すると考えられる。また、完形品が少ないため断言はできないが、多くの場合これらの属性は以西系の諸属性から構成される土器の一部分に現れるようである。このことは、地域性が土器そのものではなく属性を単位として移動していることを示しており、土器そのものの移動というよりは土器の製作情報の移動によって地域的な属性が分散していることを表すものと評価できよう。

一方、これとは異なり、器種自体が以東系に特徴的とされるものも、わずかではあるが出土した。今次調査では174号住居跡から大型の鋤先口縁壷（長胴）が（9）、20号溝（上層）から長胴の無頸壷が（10・11）、また150号住居跡から鋤先口縁の長頸壷が（12）出土した。既刊報告書でも多条の突帯を付す大型の無頸壷が報告されている(13)(大庭編2004)。これらは、器形自体が本地域においては安定的に認められるものではないことから、土器そのものの移動である可能性が高いと考えられる。ただし搬入と積極的に評価できる証拠は現在のところ指摘できず、断言はできない。

さて、堂畑遺跡出土土器群には、以東系の影響による以外の地域性を持つ資料も認められた。ここでは、成人用甕棺の全体形状と高坏・鋤先口縁壷の鋤先状口縁部の形態を挙げたい。成人用甕棺の破片がいくつか出土しているが、すべて胴部上半が強く丸みを帯びた甕棺であった（14）。これは井上氏が甘木・朝倉地域の地域性（栗山タイプ）と指摘した（井上1985）



第278図　堂畑遺跡出土の須玖Ⅱ式土器（1/6）

属性に類似する。この属性を持つ甕棺は橋口達也氏が指摘するように（「丸みを帯びた甕棺」）他地域にも一般に認められるが、マイナーな存在である。本地域では、これが主体となるのであろう。また、高坏や鋤先口縁壺の鋤先口縁部は、須玖Ⅱ式では長く伸びて下方に垂れ下がるとされるが、本地域ではそのようなものは少なく、ほぼ水平で比較的短い鋤先口縁を有するものが多い（15・16）。ただし、これらの中には、精製甕と同様に口縁部上面に強いナデを施して端部を上方に向ける形態のものが見られた（先述）。従って、この属性は跳ね上げ口縁の調整法に影響を受けて成立している可能性もあり、注意が必要であろう。

最後に、これらの地域的な属性の発現過程について若干触れておきたい。今回報告した資料のうち、形式的に比較的時間幅が少ないと考えられる資料（先掲分）について遺構ごとに須玖Ⅱ式の古段階と新段階に分け、先述した甕の口縁部形態の諸属性について、その出現頻度を比較した（第10表）。古段階から新段階にかけて、鋤先口縁甕と屈折口縁（端部四角）が減少し、屈折口縁（端部丸・端部跳ね上げ状）が増加していることが分かる。特に、屈折口縁（端部跳ね上げ状）の増加は顕著である。この傾向を確認するため、周辺の資料について須玖Ⅰ式期の動向を見たい。

本遺跡の周辺では中期前半～中葉の資料はあまり多くないが、隣接する仁右衛門畑遺跡では須玖Ⅰ式の古段階の資料がわずかに認められる。甕型土器の口縁部形態を検討すると、この段階では未だ鋤先口縁と屈折口縁が未分化でありやや明瞭さを欠くが、鋤先口縁と判断される資料が大半を占めると判断できる。また、田主丸町船越高原A遺跡に比較的近い大的遺跡でも須玖Ⅰ式期の資料が少量出土しているが、やはりほぼ全てが鋤先口縁と判断される。これらの資料では須玖Ⅰ式古段階の資料であって、船越高原A遺跡・堂畑遺跡の資料群との間に一型式間隔が開くが、先述した須玖Ⅱ式古～新段階にかけての傾向と併せると、鋤先口縁の減少、屈折口縁（跳ね上げ）の増加の動きははっきりと読み取れよう。また、須玖Ⅰ式の段階には未だ十分に分化が進んでいなかった屈折口縁（端部丸・端部四角）と鋤先口縁との分化が進み、異なる属性として成立する動きも指摘できる。

		須玖Ⅱ式古段階	須玖Ⅱ式新段階
屈折口縁	端部跳ね上げ状	16個体（31.4%）	34個体（60.7%）
	端部四角 or 肥厚	21個体（41.2%）	7個体（12.5%）
	端部丸	9個体（17.6%）	14個体（25%）
鋤先口縁		5個体（9.8%）	1個体（1.8%）
計		51個体（100%）	56個体（100%）

第10表　口縁部形態の時期別出現頻度

これらの動態は、中期後半にかけて須玖式土器分布圏内での小地域性の発現が進行するとともに、以東系分布域から以西系分布域への土器の形態的属性の浸透圧の高まり（武末1987）を示すものとして理解できよう。また、こうした動きの中で、本遺跡における土器相を理解することが、今後の本地域における編年体系の整備において重要と考えられよう。

参考文献

井上裕弘　1985「甕棺製作技術と工人集団」『論集日本原史」　吉川弘文館
大庭孝夫編　2004「堂畑遺跡Ⅱ」浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第20集　福岡県教育委員会
小田富士雄　1972～1973「入門講座　弥生土器　九州」『考古学ジャーナル』76－84　ニューサイエンス社
武末純一　1987「須玖式土器」金関恕・佐原真編『弥生文化の研究』4（弥生土器Ⅱ）　雄山閣出版
田崎博之　1985「須玖式土器の再検討」『史淵』122
平　美典　2004「北部九州における中期～後期前半の土器と併行関係」『第53回埋蔵文化財研究集会—弥生中期土器の併行関係』　埋蔵文化財研究会第53回研究集会実行委員会

2. 堂畑遺跡におけるカマドの在り方について

堂畑遺跡1～4次調査で検出した、古墳時代中期後半～奈良時代に属すると考えられる住居跡計154棟中、88%がカマドを付設する。当遺跡カマドは住居北・西壁に付設されたものがほとんどであり、東壁に付設されたカマドは3次調査2区東の住居群と4次調査3区中央～東の住居群の計10棟、南壁に付設されたものは3次調査2区152号住居跡1棟のみ検出した。この配置から同一集落内においてもカマドを設置する方向を違える基礎単位（北・西カマドと東カマド）が存在する様相が見て取れる。

当遺跡のカマド構造を見てみると、平面形態からはおおよそ3型式に分類できるものの、各個々の属性レベルでは時期・機能等によると考えられる差が大きい。ここでは当遺跡カマドを分類・計測し、簡単ながらも当遺跡におけるカマドの在り方を検討してみたい。

北部九州のカマドについては、小田和利氏がカマド平面形と煙道部形態、支脚・袖石の有無という属性から型式分類し、分析を行っている（小田1994）。今回の分析においても小田の型式分類を参考に検討を行う。

型式分類

平面形態（小田分類Ⅰ～Ⅲ類と同じもの）

Ⅰ類　住居壁にカマド袖を直接貼り付けるもの（造り付け型）。

Ⅱ類　壁を凸型に掘り込んだ突出型で、壁本体からの突出が50cm以下とⅢ類に比べやや突出の弱いもの。

Ⅲ類　Ⅱ類よりも突出度が大きいもの（突出が50cm以上）。

Ⅰ～Ⅲ類は煙道部が有るものをA、無いものをBとした。ちなみに竪穴住居跡の削平がひどい場合にはすべてAとなるため、第11・12表では燃焼部壁の残存高も計測した。また煙道部の長さについては30cm以下はa、30～50cmまではb、50～100cmまではc、100cm以上はdと分類した。さらに支脚の有無では、掘り込みピット・支脚の有るものをイ、無いものをロとした。

当遺跡カマドを上記の型式分類とともに、時期、方位、壁からの突出する長さ、燃焼部幅・奥行・高さ、煙道部長・幅、煙道部床面（燃焼部側）と燃焼部床面の高低差を計測したのが、第11・12表である。

まずカマド型式の時期的変遷を見てみると、古墳時代後期後半までⅠA類が最も多いが、同時にⅡ・Ⅲ類も並存する。煙道部は後期後半ではa・b類が主体であるが、出土土器と切り合い関係から7世紀前半に近い時期の住居群では（103・137・176・187・200号住居跡）、d類が存在する。しかし、煙道部d類住居群の住居面積は同時期のa・b類住居跡とほぼ同じであり、カマド煙道部の長大化が住居跡の縮小と結び付くと一概には言えないことを示している。

6世紀後半～7世紀初頭の住居群が集中して検出された4次調査3区第1面の切り合いから各型式の前後関係を見てみると、206号（ⅠA類）→201号（ⅡA類）→200号（ⅡBd類）、184号（ⅠA類）→181号（ⅡBc類）→177号（ⅡA類）、188号（ⅡA類）→189号（ⅡBa類）→187号（ⅡBd類）、また3次調査2区第1面においても158号（ⅠA類）→159号（ⅠBa類）と切り合う。以上の事例から、各基礎単位内ではⅠ→Ⅱ類、煙道部a→d類へという変遷が基本的には見られるⅡ類とⅢ類との良好な切り合い関係はないものの、後の集落変遷の検討結果（V-4）と出土土器から205号住居跡（Ⅲ

Ba類）は7世紀前半に近い時期と思われ、Ⅲ類はⅡ類よりは後出する要素であると考えられる。しかし、205号住居跡カマド煙道部はa類であることはカマドの変遷が複雑なものであったことを指し示していると言えよう。また200号住居跡カマド幅が82cmを測ることは、Ⅲ類と同様の燃焼部の面積を確保しようとした結果、広くなったとも考えられる。

7世紀後半～末段階では、3・4次調査40・91・125・196号住居跡においてはⅠ類が存在するが、この段階で当遺跡ではⅠ類はなくなる。この段階の主体となるものはⅡ・Ⅲ類であり、Ⅱ類の割合が高い。煙道部はb・c・d類がそれぞれ存在し、8世紀になるとc・d類のみになる。また支脚掘り込みピット（イ）は7世紀末まで半分近く見られるが、8世紀に入ると土器等を転用した支脚（ロ）が主体となる。7世紀末～8世紀前半の3次調査2区110・111号住居跡では、中央に円形の支脚を据えたと考えられる環状の硬化面や、土器を固定したと考えられる粘土を確認したことも、石製支脚から土器（甕主体）支脚へと変化した裏付けとなろう。

また煙道部断面が四角形で、煙道部がトンネル状を呈する3次調査2区109号住居跡カマドは、古墳時代後期後半の朝倉町・杷木町外之隈遺跡Ⅴ区3号住居跡カマドで確認された（小田1996）、煙道部壁に土留め板を当てて壁を構築し、その後天井板を被せ、上部を土で被覆した煙道部構築方法と同様のものである。当遺跡においては、外之隈遺跡例とほぼ同時期のトンネル煙道部を持つ住居跡カマド煙道部断面は楕円形を呈し（131・187号住居跡）、また8世紀中頃～後半の90・102・104・138号住居跡カマドの煙道部断面は90・102号住居跡が楕円形・円形、他は四角形を呈する。煙道部断面が楕円形・円形のものは最初に掘り方を大きく掘って、壁・天井部を構築する。どのようにして断面を円形に保ったかは調査で確認することができなかったが、丸い束にした草や稲束などを掘り方長軸に置き、その周囲を被覆することで壁・天井部構築する。その最後に燃やすことで空洞になるという馬田弘稔氏の現場における指摘は、納得できる意見である。今後の調査において明らかになることを期待したい。またこのトンネル状煙道部カマドでは燃焼部と煙道部との段差が少ないものが多いことは、トンネル状煙道部を持つカマドの機能・用途を表している可能性がある。

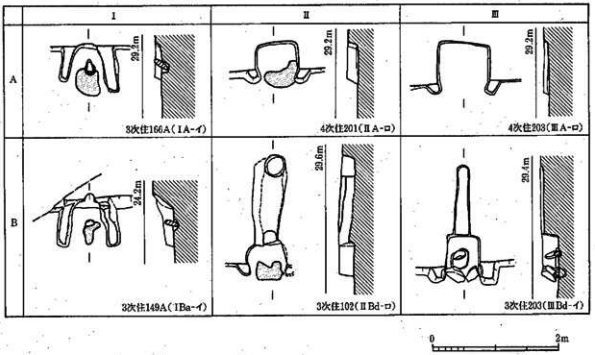
8世紀前半以降は先述したとおり、Ⅱ・Ⅲ類、煙道部c・d類のみでカマドは構成され、この在り方は8世紀末の1次調査1区1号住居跡まで続く。7世紀末～8世紀後半に煙道部床面と燃焼部床面との差が大きいカマドが多く認められることは、竪穴部の縮小化に伴い、竪穴部壁とカマド煙道部先端との間の竪穴部外も住居空間となる（小田1994）という住居構造の変化と関係すると考えられる。

当遺跡では8世紀末の1号住居跡（ⅢBc類）を最後に集落の形成を終了することとなる。

以上の検討結果は、小田氏が筑紫平野東部地域の在り方として検討した結果と同じであり、住居規模の縮小化と主柱穴配置が壁寄り→無主柱穴住居の流れと同時に、カマド煙道部が長大化する様相を当遺跡でも確認することができた。本来なら他遺跡との比較を行い、当遺跡の在り方を最後に整理する必要があるが、筆者の力不足のため、当遺跡内での在り方を整理するのみにとどまってしまった。今後機会があれば改めて検討したい。

参考文献

小田和利　1994「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』 文化財学論集刊行会
小田和利編　1996『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告40（外之隈遺跡Ⅱ）』 福岡県教育委員会



第279図　カマド分類図（1／60）

調査次数	区	地点	住居番号	遺構名	時期	方位	開口部	幅(cm)	奥行(cm)	袖部長	袖部高	煙出部長	煙出部幅	焼面部長(cm)/焼面幅(cm)/焼面厚(cm)	備考
1	1	2	住1	IIBd-イ	8世紀末	北	52	22	62	30	60	14		0	礫石・焼面あり
1	1	2	住2	IIA-ロ	後期後半か	北	24	32	62						
1	1	2	住4	IA-ロ	後期後半	北	0	48	46	30					
1	1	2	住6	IIA-イ	後期後半	北	20	60	72	25					
1	1	2	住10	IA-ロ	後期後半	西	0	42	48	24					
1	1	2	住11	IA-ロ	後期後半か	北	4	38	42	22					
1	1	2	住17	IBc-イ	8世紀後半	北			24	30	55	52		6	焼面あり・袖壊す
1	1	2	住18	IIBa-ロ	後期後半	北	59	70	68	24	22	22		17	焼面あり
1	1	2	住19	IBc-イ	後期後半	北西									火熱・焼面・平瓦
1	1	2	住23	IBc-ロ	8世紀後半	北	9	22	30	16	48	22		23	焼面
1	1	2	住24	IIBb-イ	後期後半	北	50	52	66	39	42	33		23	焼面・袖石
1	1	2	住26	IIBb-イ	後期後半	北	58	62		34	72	23		20	袖壊す
2	1	2	住31		後期後半	西									不明
2	1	2	住32	IIA-ロ	後期後半	北	8	38	48	18					焼面あり
3	1	1	住3	IIA-ロ	後期後半	北西	16	32	69	5					
3	1	1	住4		後期後半	北									削平のため不明
3	1	1	住6	IIIA-ロ	8世紀後半か	北西	56	50	90	6					袖石ピットあり
3	1	1	住6	IIIA-ロ	後期後半	北西	62	36	70	3					袖石ピットあり
3	1	1	住7	IIA-ロ	8世紀後半か	北	35	60	5						削平のため不明・袖壊す
3	1	1	住8	IIA-ロ	8世紀後半	北	46	75	3						削平のため不明・袖壊す
3	1	1	住10			北	76								削平のため不明
3	1	1	住14	IBc-ロ	8世紀後半	北		32		14	74	32		10	
3	1	1	住15		後期後半	北西									削平のため不明
3	1	1	住18	IIIBc-ロ	8世紀後半～中頃	北	50	82		15	63	24		4	袖不明
3	1	1	住19	IBa-ロ	後期後半	北西		38	74	16	24	31		10	焼過切り込み
3	1	1	住20	IIIA-ロ		西	秋に見た	80		2					削平のため不明
3	1	1	住21												削平のため不明
3	1	1	住24	IIA-ロ		北	6	36	70	8					
3	1	1	住32	IBb-ロ	後期後半	北		74	70	6	52	28		4	
3	1	1	住34	IIA-ロ	8世紀前半	西	43	84	115	14					
3	1	1	住35	IIA-ロ	7世紀末	北	28	80	98	8					
3	1	1	住38	IIA-ロ	7世紀末	北	40	65		24	94	23		17	袖壊す・焼面あり
3	1	1	住40	IA-ロ	7世紀末	北西		53	90	20					
3	1	1	住43	IIIA-ロ	8世紀後半	北	82	48	110	20				26	砧機
3	1	1	住44	IIIA-ロ	8世紀中頃	北	32	70	142	25				16	砧座・焼面あり
3	1	2	住54												削平のため不明
3	1	2	住59	IIA-イ	7世紀末	北	12	30	64	19					焼壊ける
3	1	2	住60		後期後半	北東									削平のため不明
3	1	2	住63		7世紀末	北									削平のため不明
3	1	2	住70	IIA-ロ	7世紀後半か	北	10	38	65	8					
3	2	1	住78	IAイ-イ	後期後半	北		62	80	13					
3	2	1	住82	IIA-イ	後期後半	北	10			8					壊したため、詳細不明

第11表　堂畑遺跡カマド一覧表（1）

遺跡番号	区	面	遺構番号	遺構名	型式	時期	方位	規模(m) 長	規模(m) 幅	規模(m) 深さ	規模(m) 底長	規模(m) 底幅	遺物出土点数	備考
3	2	1	E187		IIA－ロ		西	48	40	67	10			
3	2	1	E190		IIB－イ	3世紀後半	北	20	40	56	14	129	38	0	焼土ドンスル(張)(焼成面)、(焼成面)、(焼成面)ピット有
3	2	1	E192		IIC－イ	7世紀末	北		30	60	7	87	20	1	柱穴あり、柱穴基礎有
3	2	1	E203		IIB－ロ	後期後半	北	58	40	94	25		14	23	焼成面先端が欠けた
3	2	1	E205		I－ロ		北		53	51	53	53		0	
3	2	1	E206		IIC－イ		北		35	56	6	61	27	1	焼面あり
3	2	1	E103		IIBd－イ	8世紀中頃	西	28	38	46	22	131	47	8	焼成ドンスル(張)(焼成面)、(焼成面)ピット有、柱穴に配置
3	2	1	E105		IIBd－ロ	後期後半	西	42	38	48	16	123	22		焼成面先端ピット、焼成面あり、地覆有
3	2	1	E104		IIBd－ハ	8世紀前半	北	40	36	48	11	91	23	10	焼成ドンスル(張)(焼成面)、(焼成面)ピット有、柱穴に配置
3	2	1	E106		IIBd－ニ	8世紀前半	東	30	62	40	16	137	29	5	炭面・焼成部先端50%ある
3	2	1	E107		IIBd－ホ	8世紀後半	東	36	53		21	167	37	15	焼成面先端ピット・焼成面あり、平面形丸い
3	2	1	E108		IIA－ロ	8世紀前半	北	37	48	46	14				焼成面あり
3	2	1	E109		IIBd－ロ	7世紀末	北	44	55	72	22	137	36	6	焼土ドンスル・炭(一部)(焼成面)、先端部ピット(広がる)、焼成面あり、地覆、ピットあり
3	2	1	E110		IIBd－ハ	7世紀末	北	40	93	64	19	158		19	焼成面あり
3	2	1	E111		IIBd－ニ	8世紀後半	東	20	51	60	6	102			焼成あり、平面丸、焼成面一部残る
3	2	1	E112		IIA－ロ	8世紀前半	東	33	54	53	10				
3	2	1	E113		IIBd－ロ	8世紀後半	北	47	94	95	20	193	23	13	炭面・焼成面先端ピット
3	2	1	E113カマド2		IIC－ロ	8世紀後半	北	50	86	79	10	129	32	3	カマド左右袖ス、北壁変形、焼成面あり
3	2	1	E113カマド2				北					149		91	カマド焼成有効
3	2	1	E114		IIB－ロ	8世紀中頃	北	35	48	53	13		26	10	焼成面先端又鉛、前面に炭広がる
3	2	1	E125		IA－イ	7世紀末	北		47	55	3				焼成あり
3	2	1	E126				東(南東)								削平されて不明
3	2	1	E128		IIBd－ロ	後期後半	北	28	36	30	18	130	24	5	焼面あり
3	2	1	E129		IIBb－ロ	7世紀末	西	35	50	44	17	45	30	8	炭面
3	2	1	E130		IIBa－ロ	8世紀前半	東	30	50		19	77	14	5	焼面、先端部が削平されたか
3	2	1	E131		IIBc－ロ	後期後半	東		30	30	15	55	49	0	焼土(炭)ドンスル(張)(焼成面)(粘面)(張)、他はあり
3	2	1	E132		IIBc－ロ	後期後半	北	37	64		12	97	25	8	焼面、地覆有
3	2	1	E133		IIBd－ロ	7世紀末	北東	30	67	58	17	112	37	3	焼土・焼面
3	2	1	E134		IIBa－ロ	7世紀末	北東		33	50	11	4	13	7	炭は切りあろ、下部上端
3	2	1	E135		IIA－ロ	後期後半	西	53	52	53	13				焼面あり
3	2	1	E137		IIBd－イ	後期後半	北(北東)	30	52	74	21	107	53	22	焼土・炭(北)・焼面・炭部を粘土で補足
3	2	1	E138		IIBb－ロ	8世紀中頃	西	51	48		23	88	18	12	地覆出てきず、焼成部前西内(東)(炭)有
3	2	1	E139		IIA－イ	8世紀前半	北	28	37	45					焼面あり
3	2	1	E140		IIBd－イ	7世紀末	東	60	60	75	25	110	25	15	焼土ドンスル・炭(炭)(焼成面)、(焼成面)ピット有、地覆有
3	2	2	E142		IA－イ	後期後半	北東		44	58	5				焼面あり
3	2	2	E143		IA－イ	後期後半	北東		35	65	2				焼面あり
3	2	2	E144				北東								削平のため遺構不明
3	2	2	E145				北東								削平のため遺構不明
3	2	2	E146		IIBa－イ	後期後半	北(北東)		53	71	25	8	15	24	炭面はりあり、地覆あり
3	2	2	E152		IA－イ	後期中葉	西		50	82	25				焼面あり、石は安一粘土層
3	2	2	E154			後期後半	北		57		15				粘土分離・変形あり
3	2	2	E156		IB－イ	後期後半	北		74	62	8	18	13	7	焼面あり
3	2	2	E157		IIBa－イ	後期後半	北西	54	32	33	12	26	18	11	焼面あり
3	2	2	E158		IA－ロ	後期後半	北		68	81	10				粘土部
3	2	2	E159		IBa－ロ	後期後半	北	30	67	71	11	28	42	8	
3	2	2	E163		IA－ロ	後期中葉	北		47	58	12				先端部抜きされる
3	2	2	E164		IA－ロ	後期後半	北	29	47	58	12				
3	2	2	E165A		IA－イ	後期後半	西		50	73	10				焼面・焼成部が粘土で覆う
3	2	2	E166		IA－ロ	後期後半	北		63	90	20				焼面あり
3	2	2	E167		IA－ロ	7世紀初頭～前半	北東		40	72	16				
4	3	1	E172				西								削平されて不明
4	3	1	E173		IIA－ロ	7世紀初頭～前半	西	58	79		6				地覆す、地覆あり
4	3	1	E174				北								削平されて不明
4	3	1	E175			後期後半	北西								削平されて不明
4	3	1	E176		IIBd－ロ	後期後半	西	42	73	60		164	55		
4	3	1	E177		IIA－ロ	後期後半	北	37	56	64	14				
4	3	1	E178		IIA－ロ	後期後半	北(東)	47	62	67	8				
4	3	1	E179				北								削平されて不明
4	3	1	E181		IIBc－ロ	後期後半	北	38	47	57	6	87	23	4	焼面あり
4	3	1	E182		IIA－ロ	後期後半	北東	42	52	60	10				焼面あり
4	3	1	E184		IA－ロ	後期後半	北		42	58	6				
4	3	1	E185				北東		35	72	6				柱ス配置される
4	3	1	E186				北東								削平されて不明
4	3	1	E187カマド1		IIBd－イ	7世紀初頭～後半	東	22	38	40	26	185	27 (他)	9	粘ち込み式トンネル焚口、脇面消失
4	3	1	E187カマド2			7世紀初頭～前半	北				29	202	39		粘ち込み式トンネル焚口、脇面消失
4	3	1	E188		IIA－ロ	後期後半	北	33	76	53	12				
4	3	1	E189		IIBa－ロ	後期後半	西	30	53	53	25	70	34	4	切り込み埋設・貯蔵
4	3	1	E190		IBa－イ	後期後半	北	56	71	53	4				
4	3	1	E191				北東								削平されて不明
4	3	1	E193		IIA－イ	後期後半	西	31	65	50	8				焼面あり
4	3	1	E195			後期後半	北北東								削平されて不明
4	3	1	E196		IIBc－イ	後期後半	西		66	81	10	36	16	10	東は・太は石・焼面・炭材を一部土器・粘土 焼
4	3	1	E197		IIA－イ	後期後半	北東	35	63	77	7				地覆あり
4	3	1	E200		IIBd－ロ	7世紀初頭～後半	西	42	82	81	5	126	32	4	焼面先端ない
4	3	1	E201		IA－ロ	7世紀初頭～前半	北	40	68	62	10				焼面あり
4	3	1	E202		IA－ロ	後期後半	北(西)	34	68	62	10				焼面あり
4	3	1	E203		IIA－ロ	後期後半	北	48	74	67	7				
4	3	1	E204		IIA－ロ	後期後半	西	50	50		10				削平されたもの
4	3	1	E205		IIBa－ロ	7世紀初頭～後半	北	55	58	75	13	117	14	8	炭焼面消失、地覆部切込
4	3	1	E206		IA－ロ	後期後半	西		52	64	10				
4	3	1	E208		IA－イ	7世紀初頭～前半	北西		50	64	12				
4	3	1	E209		IA－イ	後期後半	北		50	63	16				
4	3	1	E210		IA－ロ	後期後半	北	28	50	53	15				
4	3	1	E211		IA－ロ	後期後半	西		30	50	8				右部消失用に焼面あり
4	3	1	E212		IA－ロ	後期後半	北								半分以上焼ける
4	3	1	E214		IA－ロ	7世紀初頭～前半	北		37	56	18				
4	4	1	E216			7世紀初頭～前半	南								削平されて不明
4	4	1	E217		IIA－ロ	7世紀初頭～前半	北西	37	65		13				地覆される、地覆ピットが切られる、焼あり
4	4	1	E218		IA－ロ	後期後半	北西		48	68	11				
4	4	1	E221			後期後半	北								削平されて不明
4	4	1	E222												削平されて不明
4	3	2	E275		IA－イ	後期後半	北		50	54	4				地覆削平されて
4	3	2	E277			後期後半	北								削平されて
4	3	2	E278		IA－イ	後期後半	西		42		4				地覆消失
4	3	2	E281		IA－ロ	後期後半	西	38	50	72	11				石敷設

第12表　堂畑遺跡カマド一覧表（2）

3. 堂畑遺跡周辺における7世紀後半～8世紀末の土師器の変遷

（1）はじめに

集落変遷や構造を理解する上では、その前提作業として第281・282図のような時期別変遷図を作成する必要がある。その図を作成する上ではまず出土土器・遺構切り合い関係などから遺構ごとの時期を決めなければならないが、中でも遺構出土土器は最有力の時期決定手段であり、飛鳥時代以降は北部九州では大宰府・牛頸窯跡群出土資料によって編まれた須恵器編年を基準にすることがほとんどである。しかし、旧浮羽郡においては7・8世紀の出土土器の主体は土師器であり、堂畑遺跡では総出土量における須恵器の割合が土師器の2割に満たない量しかないという、須恵器の出土割合は低い地域となる。そのため、混入の可能性もある1片の須恵器でも、遺構の時期を決めるといったことが行われている状況である。

旧浮羽郡内の古墳時代土師器の編年については、小池史哲氏・重藤輝行氏が行っているが（小池1983・重藤2000）、7世紀前半以降の編年については同郡内では当該期の調査された遺跡も多くなく、住居跡出土土器量も古墳時代と比べると格段に少ないため整理されていない現状である。

7・8世紀の旧浮羽郡内の土師器を見てみると、同郡内での基本的な変化の流れは同じであるが、個々の属性を検討するとかなり限定された地域しか共通性が見られない状況である。旧吉井町・旧田主丸町に所在する船越高原遺跡出土資料と当遺跡のものを比較しても、個々の属性を分析すると異なる様相を示すものが少なくない。このため、ここでは当該期の良好な資料が出土した堂畑遺跡とその西に接する仁石衛門畑遺跡の出土土師器を中心に検討を行いたい。先述したように、かなり限定された地域の検討であることを断っておきたい。

（2）土師器の変遷について

筑後地域の歴史時代土器研究は、松村一良氏が筑後国府周辺の資料を中心に、概略的な編年を行っている（松村1983）。また大宰府編年を土台に、小郡市干潟遺跡の一括性の高い土坑出土土器を用いて、土師器甕を中心とした分析を行った田崎博之氏の研究（田崎1983）がある（筑後川右岸の干潟編年より、筑後国府編年の方が当遺跡の変遷過程と一致する点が多い）。

以下では堂畑遺跡・仁石衛門畑遺跡出土資料を中心に、山本信夫氏による大宰府編年（1992）に、両遺跡で出土した須恵器・土師器を組み合わせることで作成した図が第280図である。田崎氏は土師器甕の属性分析を中心に分析を行っているが、ここでは筑後地域に特徴的な土師器低平杯は細かい変遷を追うことができるため検討の中心に据え、土師器甕は全形が分かる出土資料が少ないことから参考程度に扱うこととしたい。

なお、この低平杯については中島恒次郎氏による分類の土師器皿Ⅰ・Ⅱにあたる（中島1997）。

6世紀末～7世紀初頭（重藤編年9期・TK43～209）

78・120・187号住居跡出土土器が良好な資料となる（以降遺跡名を明示しないものは堂畑遺跡3・4次調査の遺構）。この段階に属する当遺跡の竪穴住居跡は群を抜いて多い。

杯は椀形杯（1）、須恵器杯蓋身を模倣した模倣杯蓋身（3・4）が存在する。椀形杯は前段階（152号住居跡）と比べ、口縁部はやや内湾し、さらに丸みを帯びた器形となる。模倣杯は以降見られなくなるが、この段階まで内外面に黒色処理（本文中では黒塗りと表現）のものが認められる（4）。

甕は胴が張り、頸部内面には明確な稜を持つもので、底部は明確な丸底を呈する。

7世紀前半～中頃

杯Gの単独期とされる段階で、杯は法量が10cm前後と非常に小さいものとなる。この期については旧浮羽郡内では集落出土の良好な資料がない。しかし出土丸古墳群などの古墳石室内、鷹取五反田遺跡1号土壙墓からは当該期の須恵器が出土していることから、今後調査の進展により当該期の集落が発見される可能性が高いが、当遺跡で行った集落の検討（V-4）から旧浮羽郡では大宰府に比べ杯G単独期が遅れる可能性がある。

7世紀後半（大宰府ⅠA期）

196号住居跡で一括性の高い資料が出土した。当遺跡・仁右衛門畑遺跡出土土器では一括性のある杯の良好な資料が少なく、大碇遺跡12号土坑出土土器で補完した（7・10）。

椀形杯は前段階より底部は平たく、器高は低くなると考えられる。椀形杯はこの段階でなくなる。この段階から口径が15～20cmと広く、器高が3・4cmと低い低平杯が出現する。低平杯はこの段階では2タイプ存在し、口縁部と底部との稜が明確でなく、そのまま外傾するもの（8・9）と、底部が弱く突出し、口縁部は直立気味に短く立ち上がるもの（10）の2者が存在する。甕は胴の張りが弱い長胴となり、胴部と口縁部の境の屈曲部は丸みを帯び、口縁部はやや強めに外反する。甕の重心が下がることから、底部の面積は広くなる。胴部頸部付近内面調整はこの段階から縦ケズリが多くなる。甑もやや長胴の直線的な器形となり、口縁部の外反は強くなる。

7世紀末（大宰府ⅠB期）

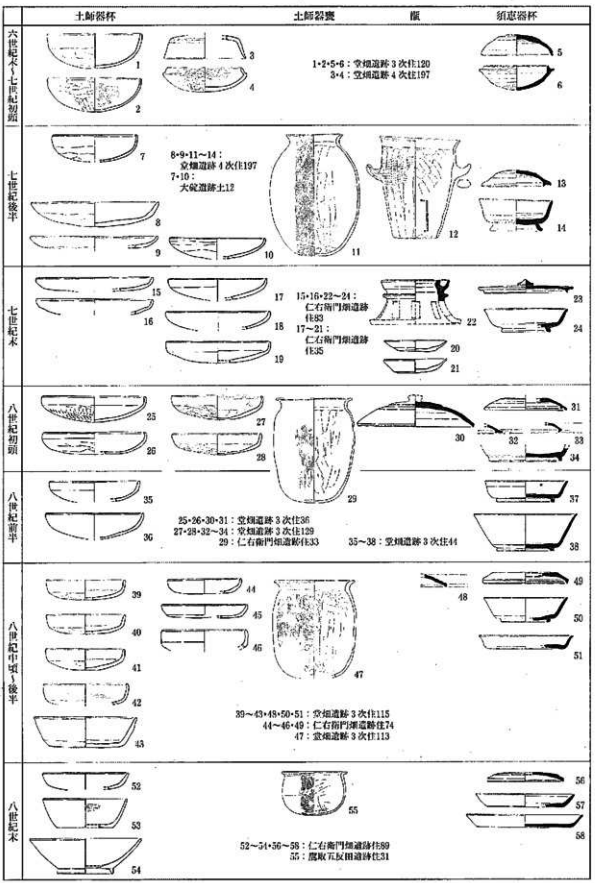
38号住居跡、仁右衛門畑遺跡35・83号住居跡で良好な資料が認められ、仁右衛門畑遺跡83号住居跡からは円面硯（22）が出土した。

椀形杯は消滅し、低平杯は15・16、17～19という前段階の2タイプの系譜を引くものが存在するが、口縁部形態は両者とも直立し、口縁部と底部との稜は明確になり、立ち上がりは長くなる傾向を示す。この2タイプの相違点は底部の突出の強弱のみとなる。前者の底部の突出度が弱いタイプ（15・16）はこの段階でなくなる。また小形の杯（20・21）も存在するが、このタイプの形態変化は低平杯と同一ではなく、椀形杯から口縁部が開き、丸底→平底に変化し、最終的には土師器皿となる形態変化を示すと考えられる。この小形杯は全段階を通じて一定割合存在する。

8世紀初頭（大宰府Ⅱ期）

退化した須恵器杯蓋かえりが消滅し、嘴状口縁部に変わる段階で、36・129号住居跡から良好な資料が出土。

低平杯の口縁立ち上がりは長くなるものの、口縁部と底部との稜が弱く丸みを帯び、底部の突出は強くなる。口縁端部が強く内湾するものはこの段階に属する(25～28)。土師器甕は胴部と口縁部との境はさらに丸み帯び、口縁部は強く外反する。胴は長く、締まりがない形態となり、底部の面積は広くなる。



第280図　堂畑遺跡周辺における土師器変遷図（甕・甑は1/12、他は1/6）

8世紀前半（大宰府Ⅲ期）

8世紀前半でも中葉に近い資料を提示した（44号住居跡出土資料）。杯底部の突出はこの段階がピークとなる（36）。口縁部は内湾からやや外傾気味に大きく変化し、立ち上がりはさらに長くなり、口縁部と底部との稜はかなり鈍いものとなる。口径はやや小さくなる（35）。

8世紀中頃～後半（大宰府Ⅳ期）

杯は底部が突出するものから緩やかな丸底に変化する。口縁部の立ち上がりはさらに長くなり、やや直立気味になるもの（39～42・46）が多い。この段階から底部がほぼ平底のもの（43・48）が出現するが、平底のものは口縁部が外傾する。43のように須恵器杯と器形・口径がほぼ同じになるものもある。土師器甕は底部の面積がさらに広くなり、器高は低くなる（47）。なお、113号住居跡からはこの段階の須恵器蓋杯転用硯（第37図12）が出土。

8世紀末（大宰府Ⅴ期）

須恵器と土師器との器形的な差がなくなる段階である。杯底部はまだ丸みを帯びるが、口縁部が外傾するもの（52）、口縁部の立ち上がりが長く、平底のもの（53）、椀状の杯（54）も出現する。甕は鷹取五反田遺跡31号住居跡出土資料であるが、器高はさらに低くなり、寸胴状のもの（55）になる。当遺跡では1次調査1号住居跡などが当段階であり、仁右衛門畑遺跡と同様、集落の形成を一端終える。

9世紀以降の土器変遷は旧浮羽郡内では、良好な資料が少なく（日詰遺跡1次調査3号土坑等で少量出土）不明である。以上のように当遺跡周辺の土師器杯の形態変化についてはおおまかに把握することができた。この結果を参考に次節で集落の変遷を検討する。

引用・参考文献

小池史哲　1983「第8章第3節　1. 土器」『塚堂遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集　福岡県教育委員会

松村一良　1983「筑後国府の調査」『古代文化』第35巻第7号　財団法人古代学協会

田崎博之　1980「干潟遺跡出土土器の編年－特に土師器を中心として－」『干潟遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集　福岡県文化財調査報告書第59集　福岡県教育委員会

山本信夫　1992「北部九州の7～9世紀中頃の土器」『古代の土器研究－律令的土器様式の西東－』古代の土器研究会第1回シンポジウム資料　古代の土器研究会

舟山良一　1993「牛頸窯跡と大宰府」『古代の土器研究－律令的土器様式の西東－2　須恵器』古代の土器研究会第2回シンポジウム資料　古代の土器研究会

水ノ江和同　1994「大礒遺跡」『堺町・大礒遺跡』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集　福岡県教育委員会

中島恒次郎　1997「7世紀の食器－九州消費地－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西東－5　7世紀の土器』古代の土器研究会第5回シンポジウム資料　古代の土器研究会

吉田東明編　2000『仁右衛門畑遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集　福岡県教育委員会

重藤輝行　2000「仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年」『仁右衛門畑遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集　福岡県教育委員会

4. 堂畑遺跡における集落の変遷について

堂畑遺跡1～4次調査の成果としては、弥生時代中期後半～8世紀末・中世の多数の遺構・遺物を確認した。道路建設に起因する調査であるため、遺跡の東西に幅20mほどのトレンチを入れた状況であり、当遺跡の集落構造は一部判明したにとどまる。しかし、1～4次調査最終冊にあたる本報告のまとめとして、調査区という限られた範囲での集落の変遷を追ってみることとしたい。

まず、最初に時期別に色・トーンを変えて、主要遺構の変遷を表したのが第281・282図である。この図を参照して、弥生～奈良時代にかけての集落の動態を検討してみる。

弥生時代

堂畑遺跡が位置する美津留川右岸の自然堤防上に集落が形成されたのは弥生時代中期後半からである。一方当遺跡西300m、美津留川左岸の自然堤防上に位置する仁右衛門畑遺跡では中期初頭～前半の竪穴住居跡・土坑などが検出されている状況は（吉田編2001）、当遺跡よりも標高2mほど高く、地山がより安定した粘質土系（当遺跡の大半は砂質土シルト系）であることと関係する可能性がある。船越高原遺跡、鷹取五反田遺跡においても中期後半から集落が形成され始めており、旧浮羽郡において中期後半に集落（規模）が大きく増加する一端を当遺跡でも表していると考えられる。

仁右衛門畑遺跡の中期前半における竪穴住居跡は円形～楕円形を呈するのに対し、堂畑遺跡西（1次調査）において検出された中期後半の竪穴住居跡には円形～楕円形と方形を呈するものの2者があり、切り合いから方形の27号住居跡が円形の30号住居跡を切るという新古関係があり、円形→方形への住居形態の変遷を確認した。筑後川を挟んで対岸の朝倉町上の原遺跡（井上編1993）では、中期初頭～中頃にかけて住居形態が円形（中期初頭）→小判形（中期前半）→方形（中期中葉）へ変遷することが指摘されており、旧浮羽郡内でも同様の変遷を示す可能性が高い。しかし、前期～中期前半の三国丘陵の住居形態を分析した速水信也氏は、円形住居は方形住居より面積が広く、立地からも円形住居の構成員の方が階層的にも勝っていた可能性があると指摘しており（速水1994）、当遺跡の中期後半の大形円形住居である3次調査1区62号竪穴住居跡（床面積56㎡）の集落内での在り方を含めて、今後の検討課題となろう。また3次調査2区146号住居跡は突出部とベッド状遺構、2本柱の主柱穴を持つ中期後半の竪穴住居跡を確認した。同様の例は鷹取五反田遺跡3・106号住居跡でも検出しており、中期後半に長方形ベッド付2本柱竪穴住居が出現したことを表している。

当遺跡の中期後半の遺構は1次調査1区、3次調査1区西側、2区中央、2区東に遺構が集中する（第281図）。1次調査1区の住居群は、3・4次調査で検出した住居群西端とは800mほど離れており（4次調査3・4区では1棟のみ検出）、円形住居が多い点などから、3次調査住居群とは別単位の一群になると考えたい。

3次調査で特質されるのは、20・24・25号溝という集落を囲む環濠を検出したことである。1区8号溝も20号溝と同様の壁の傾斜であり、集落東端の環濠としても規模・位置的にも良いが、南環濠の24号溝は南西に折れ曲がり、8号溝とは繋がらないこと、また途切れた部分には中期後半の住居群が存在することから、環濠はこの部分は掘削されなかったと考えられる。中期後半の環濠集落の検出例は北部九州では少ないため、今後の調査で類例が出てくることを期待したい。

8号溝を東側の環濠とすると、25号溝～8号溝間は200mを越す規模になる。環濠内からは須玖Ⅱ式の範疇に収まる土器群が多量に出土しており、掘削から埋没も中期後半に収まる。環濠内の2区中央北側には削平された中期後半の遺構が集中し、集落の中心は調査区北に存在すると考えられるが、遺構の遺存状況は悪いと思われる。同時期の船越高原遺跡の住居群が方位を揃え、規則性が見られるのに対し、当遺跡では同様の規則性はほとんど確認できない。

また2・3号円形周溝状遺構が環濠内に位置し、1・4・5号円形周溝状遺構が環濠外に位置するという当遺跡の在り方は、鷹取五反田遺跡においては集落東端に同遺構が集中して存在するという後者と同様の在り方を示しており、遺跡内における2つの在り方は特殊な例となるであろうか。円形周溝状遺構の用途や機能の問題と合わせ、今後の検討課題となろう。

土器についてはⅤ－1でまとめているため、ここでは詳細に述べないが、1次調査26号住居跡で中期後半の伊予系壺頸部、3次調査25号溝で後期初頭の吉備系高坏口縁部が出土している。いずれも混入品であることは残念であるが、当遺跡の在り方を指し示している出土品となる。

弥生時代後期初頭～前半の遺構は、1次調査12号土坑があるのみである。12号土坑からは豊前系の壺が出土する。

後期中葉には1区中央、2区中央、2区東端に遺構が少数存在する。竪穴住居跡は長方形・2本柱である。2区中央では土坑しか確認できなかったため、住居跡は削平された可能性が高い。

1～4次調査では後期後半の遺構は検出できなかったが、後期中葉・古墳時代前期の集落の在り方から推察すると、後期後半の遺構はバイパス路線外に存在し、後期後半も集落は細々ながら続いていると考えられる。

古墳時代

古墳～奈良時代の浮羽郡内における集落の在り方については、仁右衛門畑遺跡を中心に吉田東明氏がまとめている（吉田2000）。当遺跡における集落動態は古墳時代前・中期については吉田氏が指摘したものとほぼ同じであるため、前・中期については簡単に触れたい。前期前半には3次調査1・81・148号住居跡、2次調査4・5号竪穴状遺構は個々が独立して存在しており、竪穴住居跡1棟が基礎単位となり集落が構成される。平面プランでは81号住居跡が長方形4本柱、148号住居跡が正方形4本柱（？）となる。一段階後の前期中葉～後半の207号住居跡も長方形4本柱、ベッド無しの平面形態となる。仁右衛門畑遺跡・塚堂遺跡では長方形2本柱・正方形4本柱を基本とし、両者が並存する在り方を示すが、堂畑遺跡では長方形4本柱プラン住居が存在し、注目される。また塚堂遺跡においては長方形2本柱住居は在地系土器が主体となるのに対して、正方形4本柱住居は外来系土器が主体となる傾向を示す。当遺跡においては正方形4本柱住居になると考えられる148号住居跡出土土器は畿内系・瀬戸内系・山陰系土器の外来系土器のみで構成されるが、一方長方形4本柱プランの81号住居跡でも外来系土器のみの出土であり、吉田氏が指摘した状況とは異なる。このことは、148号住居跡出土土器は仁右衛門畑遺跡・塚堂遺跡出土土器と比べ、造りがシャープで精製されたものであり、胎土から見ても搬入土器の可能性が高いと考えられることなど、集落の位置づけが両遺跡とはやや異なった可能性がある。

古墳時代前期後半では148号住居跡を意図的に切ったと考えられる40号土坑・365号ピットが存在する。40号土坑では口縁部を打ち欠き、甕胴部を半分に割って蓋とし、365号ピットは小形器台を3

個ピット内に埋納しており、両者とも住居コーナー部に切り込む特殊な遺構である。両者が切り込む時期は住居跡と比べやや下るものの、148号住居跡の特殊な在り方を指し示していると言えよう。

古墳時代中期前半には3次調査1区12・26・28・74号住居跡が存在するが、26・28・74号住居跡は出土土器から平面プランを間違えて掘ってしまった可能性が高く、元々は12号住居跡のような正方形大形住居跡であった可能性が高い。この大形住居の類例としては仁右衛門畑遺跡86号住居跡にも見られ、カマドの設置前の住居の一形態を示すものである。

浮羽郡においては中期中葉頃から竪穴住居内にカマドを設置する遺跡が存在するが、当遺跡においても中期後半の1次調査1区17・23号住居跡がカマドを設置する住居となる。17号住居跡は前段階の住居形態の影響を受けた横長平面長方形プラン、23号住居跡は塚堂遺跡V区6号住居跡などに代表される縦長長方形プランを採用している。特に23号住居跡カマドは90cmを測る長い煙道部を持つことは注目される。17・23号住居跡が位置する1・2次調査区は弥生時代後期中葉以降は集落が確認されなかった箇所であり、この段階から再び住居が営まれる。この17・23号住居跡は、仁右衛門畑遺跡と同様2棟1単位でグループを構成するが、3・4次調査区では当該期の遺構は確認されておらず、仁右衛門畑遺跡と比較すると古墳時代後期後半以降の両遺跡の状況は対照的な在り方を示す。

古墳時代後期中葉になると1・2次西端の32・33号住居跡、14号溝、2区西側152・160号住居跡で再び竪穴住居跡が形成される。TK10段階の152号住居跡は床面直上から上師器の良好な一括資料が出土しており、編年の指標となるものである。この段階までは中期後半の2棟1単位を基礎単位とする集落構造が認められる。

しかし、後期後半になると竪穴住居跡が一挙に集落全域に拡大・増加し、3・4区まで集落域が広がるが、3区南西、4区南ではほとんど遺構が認められないことから、後期後半ではこの箇所が集落の南端となる。1・2次調査区ではほぼ全域に後期後半の遺構が存在することから、両区の間には20mほどの空白地が存在することになる。下記で検討しているが、土地・方位の規制が両区で一致することから同一集落と考えられ、この空白地は北から南に傾斜する谷状の地形であったため、住居跡などが存在しなかったと考えられる。

この段階に属する竪穴住居跡は103棟と検出した竪穴住居跡総数の40%にあたる。特に後期後半の住居群が多く検出された4次調査3区を見て見ると、この段階には袖が長く壁から住居内に向かって突出するタイプと燃焼部が壁から突出するタイプの2者のカマドが確認でき、住居跡平面形態も基本的に前者は縦長長方形、後者は横長長方形となる。前者のタイプは袖が突出することで、住居形態も縦長になるものであり、中期の塚堂遺跡からの系譜を引く住居形態である。両者の時期的な前後関係は、切り合い関係から後者の方が前者よりも新しくなるが、土器型式における差はわずかであり、短期間で建て替えを行い、後者へ変化したものと考えられる。

住居跡カマドの方位にはかなりの規則性があり、主軸が北東一南西方向のやや東に振れたものと真北を向くもの、北西一南東と西に主軸が振れたもの、カマドが東に向くものの、西に向くものの大きくは5タイプに分かれる。3区の住居群で最も古い段階の住居タイプは第2面で検出された①北東一南西タイプと西タイプの2者である。169・170・178・179号住居跡は真北タイプの170・179号住居跡を切り、やや場所は離れるが、後期中葉の32・152号住居跡はほぼ真北・真南であり、北東一南西・西タイプ以前は真北タイプの住居跡であったと考えたい。この北東一南西・西タイプより後出するものとして切り合い関係から②真北タイプの住居跡になる。3区12号掘立柱建物跡は真

北を向くためこの段階に属するであろう。出土土器から後期末（7世紀前半に近い時期）に出現するタイプが、③北西一南東タイプ・東タイプの2者である。2区10号掘立柱建物跡は西に軸が振れることからこの段階からさほど離れた時期ではないであろう。

このように3区の6世紀中頃～7世紀初頭までの方位による変遷は把握できたが、住居規模は各タイプ間で大きく変わるものではなく、後続する7世紀代いっぱいは住居跡床面積の変化は少ない。6世紀後半～7世紀初頭頃の住居跡の変遷を須恵器編年に置きなおすと、TK43－TK209という2型式に収まることから、この変遷は須恵器編年に置き換えることができず、住居跡出土土器からは大まかな傾向が把握できるのみである。

船越高原遺跡における古墳時代後期後半～奈良時代の住居跡は各時期にわたって住居主軸は北西方向と規則が強くかかっており、鷹取五反田遺跡でも方位による集落の変遷についての傾向は看取できるが、規制はそこまで見られない状況（出土土器が少なく、時期決定できないものが多い）である。また仁右衛門畑遺跡では後期後半の住居跡が非常に少ないことは、後期後半の当遺跡の住居群を形成した集団を考える上でも非常に示唆的である。

これらの結果から①～③期までの住居数の変遷は、後期中葉5棟→①期39棟→②期18棟→③期13棟と次第に減少する。7世紀前半～中頃までは集落が一端途絶えることもこの減少に影響しているのであろうか。この変遷から掘立柱建物跡の時期を検討すると、2次調査4・5号建物跡は①期、3・6号建物跡、1・2号柵跡は③期の時期になると思われる。

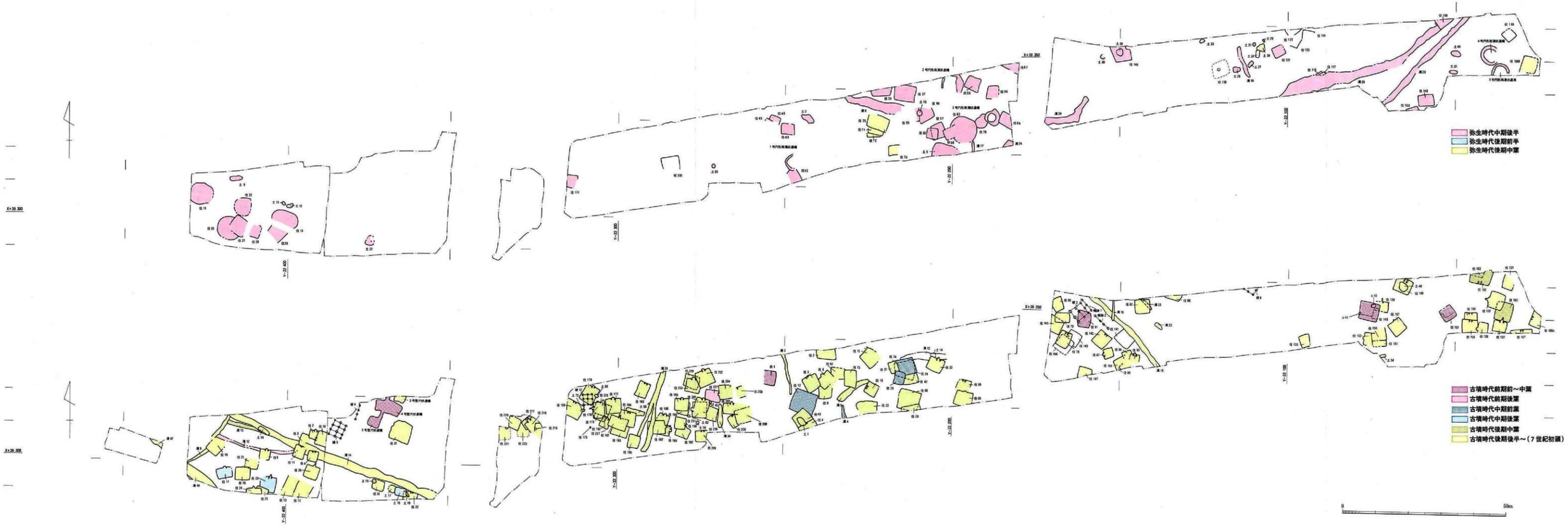
また集落規模の急激な拡大に伴い、集落構造も大きく変化し、1次調査1区、3次調査2区東・西端、4次調査3区では住居跡の重複が激しく、少なくとも同一場所で3・4回の建て替えを行っていることが確認できる（第281図）。このことは、古墳時代後期後半段階でも構成員が集落内の限定された空間内での竪穴住居跡の造営を行っていたことと同時に、上記で検討した方位の規制も認められることから、律令期以前でも土地規制が行われていた例となるであろう。

飛鳥・奈良時代

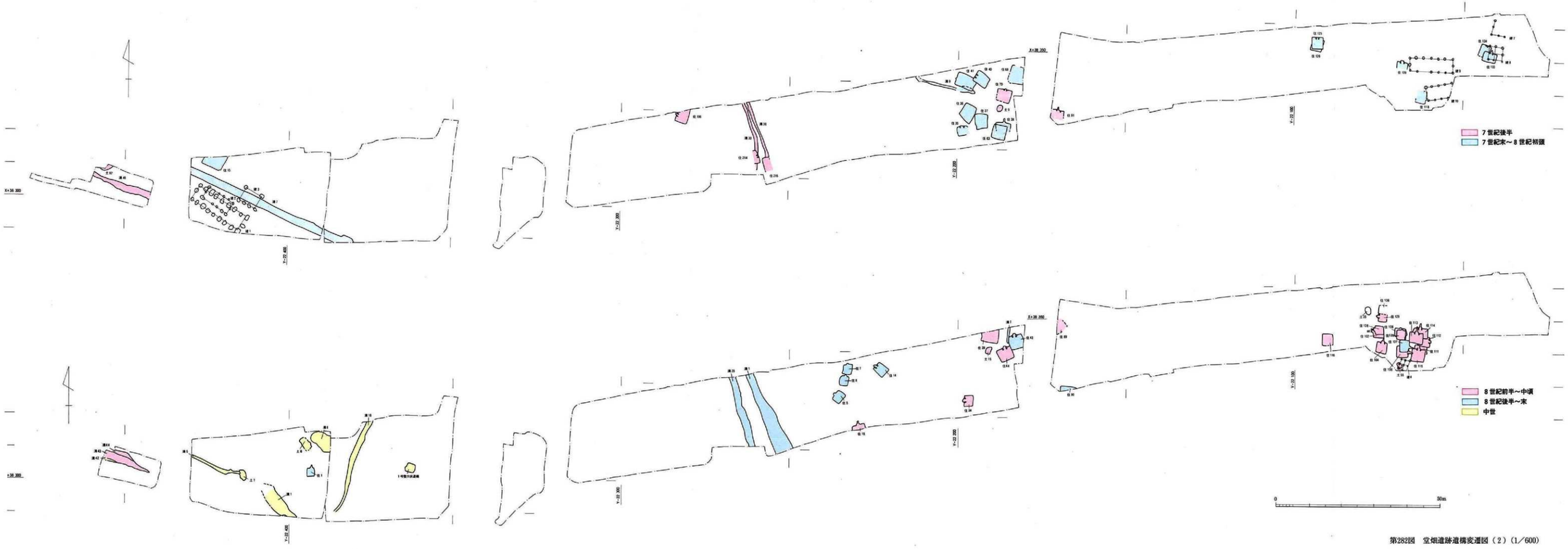
先述したように7世紀前半～中頃まで集落は途切れる。このことは仁右衛門畑遺跡・船越高原遺跡でも同様である。古墳の追葬に伴う当該期の須恵器は認められるが、浮羽郡内では当該期の集落は切り合い関係などから類推できる住居跡などが少数存在するのみである。

7世紀後半では91・196・214号住居跡、7世紀末でも13棟と7世紀初頭の状況と比べ、集落規模がかなり縮小し、8世紀末まで同様の状況が続く。196・214号住居跡はそれぞれ単独で存在し、3区では以降集落の形成を終了する。7世紀後半～末の91・109号住居跡は8世紀後半までの約1世紀間、激しい建て替えが認められる住居群の中では切り合い関係・出土土器から最も古い住居跡に位置付けられる。この住居跡が重複する状況は律令期集落では多く認められ、土地管理者による集落内の土地規制によるものと考えられている（小田1996）。一方、3次調査1区東では方位・配置も規則性がない住居群と、2区東の7世紀末の可能性が高い7・8号掘立柱建物跡を伴う133・134号住居跡がほぼ単独で存在する状況は同一集落内でも対照的であり、集落構造の複雑さを表しているといえよう。

また掘立柱建物跡については、196・214号住居跡以外の7世紀後半～末の住居跡主軸がほぼ真北であり、9号掘立柱建物跡もほぼ真北を向くことと切り合い関係から7世紀後半直前の建物跡にな



第281図　堂畑遺跡遺構変遷図（1）（1／600）



第282図　堂畑遺跡遺構変遷図（2）（1／600）

ると考えられる。1次調査1号掘立柱建物跡の時期について、重藤氏は切り合い関係から1号建物跡を7世紀後半、2号建物跡を7世紀末とする。1次調査1・2号建物跡と9号建物跡とは主軸・規模・柱穴平面形など大きく異なるが、同じ7世紀後半に位置づけられることは、建物跡の機能・用途によるものの可能性もあるが、1号建物跡周辺の状況が不明な点が多いため、現段階では判断できない。

8世紀前半になると1区東、2区西、東の3ヶ所に住居跡が集中する。切り合い関係から住居並存状況を検討すると、1区東は調査区北に居住域が続くことから少なくとも1棟、2区西でも南に居住域が続くことから少なくとも1棟、2区東では2・3棟程度並存して集落を構成することが類推できる。2区東では出土土器から約1世紀間という住居群時間幅が判明しており、最も早く見積もって十数年で建て替えを行った可能性がある。

113号住居跡からは8世紀中葉の転用硯が出土し、3次調査1区遺構面出土ではあるが、円面硯・転用硯が各1点確認されたことは当遺跡にも識字層が存在していたことを表す。また仁右衛門畑遺跡においても当遺跡よりもやや古い型式の円面硯が出土し、さらに両遺跡からは製塩土器（焼塩土器）が出土していることは、8世紀代における両遺跡の関係や浮羽郡内での位置づけに重要な意味を持つ資料となる。

8世紀後半になると3次調査43・44・90・107・138・139号住居跡のように住居規模は急激に縮小し、主柱穴は壁に近くなり、カマド煙道部はより長大化する。3次調査1区中央では5・7・8号住居跡の極小タイプの住居跡がこの段階のみ存在する。これに対し、1区東の43・44号住居跡、2区南西の90号住居跡では一辺が4mを越す、この段階にしては大形方形住居跡となる。この大形住居跡は住居規模とともにカマドも大きく、古田氏が仁右衛門畑遺跡の集落構造を分析する中でDグループとした、大形建物跡を伴う大形竪穴住居跡グループの在り方と比較すべきであろう。とすれば、調査区北・南側にも大形掘立柱建物跡の存在が予想されることとなるが、あくまでも仁右衛門畑遺跡のみの事例であり、今後調査が進展することで竪穴住居跡と大形住居跡との位置づけができることを期待したい。3次調査4号建物跡は切り合い関係と主軸方位からから139号住居跡に伴う建物跡と考えられる。さらに7世紀後半頃に掘削されたと考えられる3区と1区の境の1・29号溝という大溝がこの段階で埋没する。

8世紀末には1次調査1区1号住居跡のみ当遺跡では確認した。極小・無主柱穴住居であり、この住居を持って仁右衛門畑遺跡と同様、集落の形成を一端終える。遺跡西側のみ中世の遺構・遺物が確認されるが、東側ではその後田畑として利用され、今日に至ると考えられる。

以上、報告書のまとめとして集落の変遷を検討したが、今後当遺跡周辺の調査が進展することで今回の検討結果の誤りや新たな知見が現れることを期待し、筆をおきたい。

主要参考文献（浮羽バイパス関係報告書は参考文献からは省く）

吉田東明　2000｜Ⅳおわりに　2. 集落の変遷について」『仁右衛門畑遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集　福岡県教育委員会

井上裕弘編　1993『上の原遺跡Ⅱ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告第27集　福岡県教育委員会

速水信也　1994「Ⅳ　一ノ口遺跡Ⅰ地点の弥生時代集落　1. 住居跡」『一ノ口遺跡Ⅰ地点』小郡市文化財調査報告書第86集　小郡市教育委員会

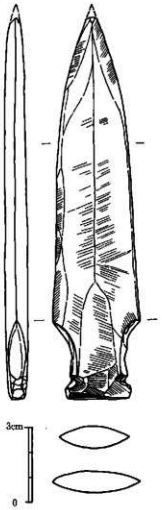
小田和利　1996「製塩土器から見た律令期集落の様相」『九州歴史資料館研究論集21』　九州歴史資料館

付編　浮羽高校所蔵三牟田出土石剣について

うきは市吉井町生葉に所在する福岡県立浮羽高校には、同校で教鞭をとられていた金子文夫氏を中心とした考古学部が存在し、浮羽郡内の古墳・遺跡などの調査を積極的に行っていた。現在、その収集した資料はうきは市立吉井歴史民俗資料館にて展示されている。

本編で紹介するのは、当遺跡が所在するうきは市吉井町三牟田出土石剣である。当資料には出土地点が三牟田出土と記録されているのみであり、堂畑遺跡を同校が調査したという記録もないことからおそらく表採品であろう。

当資料は切先部の一部のみ欠けるほぼ完形品で、全長15.2cm、関部3.5cm、厚さ0.9cmを測る鉄剣形磨製石剣である。身と茎が明確に区分され、身の長さ（12.5cm）に比べ、茎の長さ（3.2cm）が短く、茎両側縁には抉りを施し、茎の断面は長方形を呈する。身の中央には弱い鎬を有し、身断面は鎬部分が丸い菱形となる。切先部は身両側縁の角度に比べ、急に狭くなることから研ぎ直しされており、身左側縁も再研磨痕が認められる。石材は粘板岩製である。



第283図　三牟田出土石剣
実測図（2/3）

当資料は長沼孝氏による鉄剣形磨製石剣の分類（長沼1986）によれば、Ⅰb式にあたる。Ⅰb式は福岡平野と遠賀川流域に多く分布し、時期は弥生時代早期～中期後半の各時期に見られ、特に前期末～中期前半に多いということである。堂畑遺跡は弥生時代中期後半以降に集落が形成されることから時期的には合致するが、石剣の形態的には中期後半より古い印象を受けることから、中期初頭～前半の遺構が検出された仁右衛門畑遺跡を含めた当遺跡周辺出土とやや広い範囲の出土品として捉えておきたい。

なお、出土品の実測・観察は同校体育館予定地の発掘調査を担当した当教育庁文化財保護課森井啓次が、執筆は大庭が行った。出土品の実測・観察に関しては、同校事務長である川嶌通隆氏（平成11年当時）にご配慮いただいた。

参考文献

長沼　孝　1986「磨製石剣・石戈」『弥生文化の研究』9　雄山閣出版

図　　版

1　2区第1面全景
（空中写真、
西から）

2　2区第1面西側
（空中写真、上
が北）

3　2区第1面中央
（空中写真、上
が南）

図版 2

1　2区第1面東側
住居跡集中部分
（空中写真、
上が北）

2　2区第1面東端
（空中写真、
上が北）

3　2区第1面西側
全景
（西から）

1　78号竪穴住居跡
（南から）

2　78号竪穴住居跡
カマド
（南から）

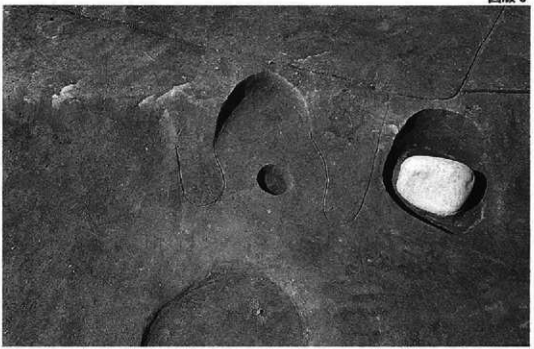
3　79号竪穴住居跡
（南から）

図版 4

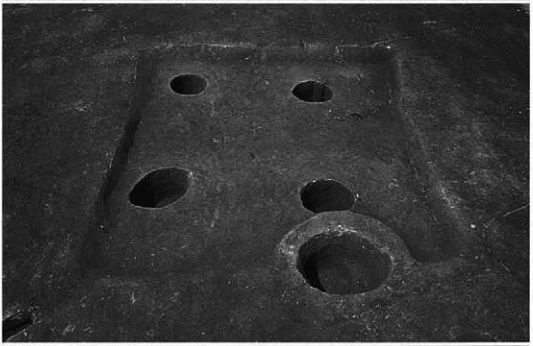
1　80号竪穴住居跡
（西から）

2　81号竪穴住居跡、
3号掘立柱建物跡、
1号柵跡検出状況
（東から）

3　82号竪穴住居跡
（南から）



1　82号竪穴住居跡
カマド
（南から）



2　83号竪穴住居跡
（南から）

3　87号竪穴住居跡
（東から）

図版 6

1　87号竪穴住居跡
カマド
（東から）

2　88号竪穴住居跡
（北東から）

3　79・80・89号竪穴
住居跡
（西から）

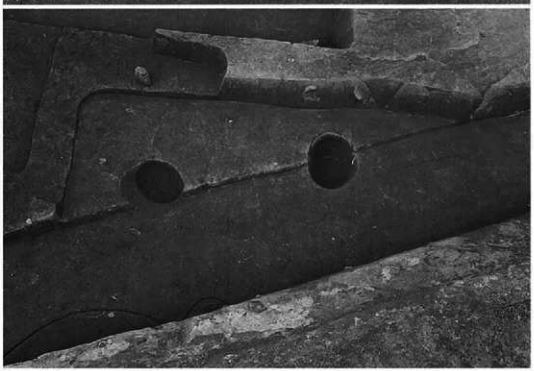
1　90号竪穴住居跡
（南から）

2　90号竪穴住居跡
カマド
（南から）

3　91号竪穴住居跡
（南から）

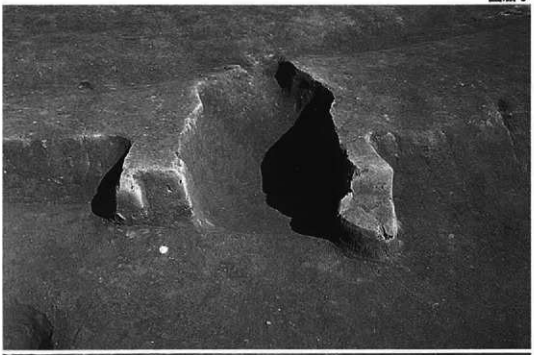
図版 8

1　91号竪穴住居跡
カマド
（南から）



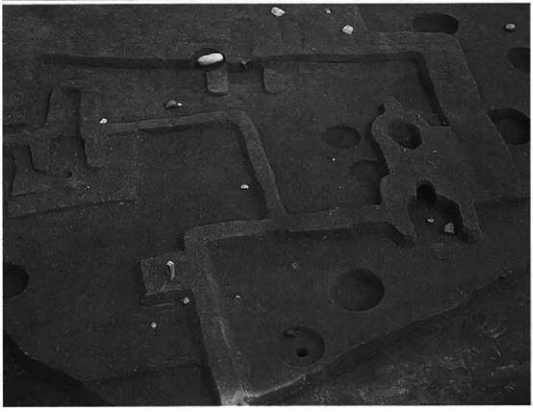
2　92号竪穴住居跡
（南から）

3　93号竪穴住居跡
（南から）



1　93号竪穴住居跡
カマド
（南から）

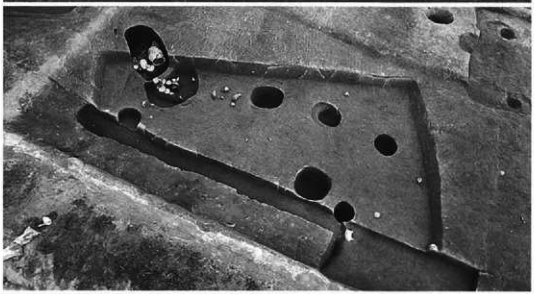
2　94号竪穴住居跡
（南から）



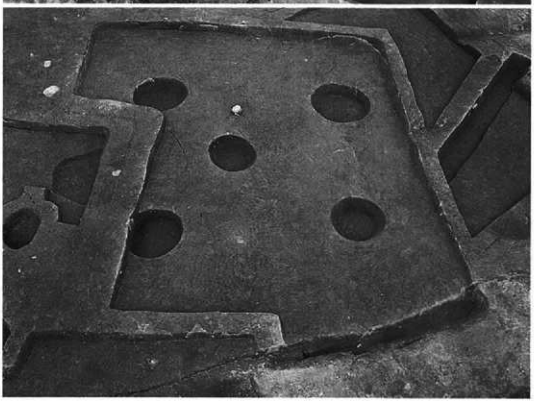
3　95号竪穴住居跡
（南から）

図版10

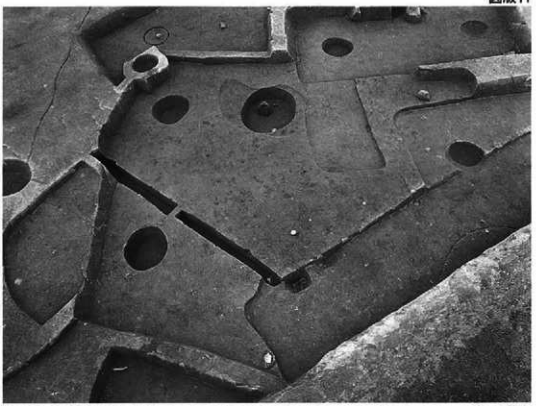
1　95号竪穴住居跡
カマド
（南から）



2　96号竪穴住居跡
（南から）



3　97号竪穴住居跡
（南から）

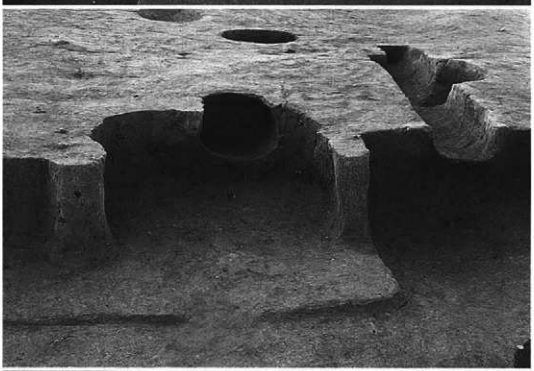


1　98号竪穴住居跡
（南西から）

2　99号竪穴住居跡
（南東から）

3　101号竪穴住居跡
（南から）

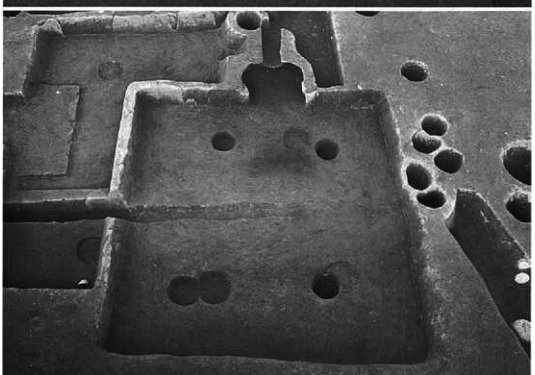
1　102・138号竪穴住居跡（東から）



2　102号竪穴住居跡カマド（東から）

3　103号竪穴住居跡（東から）

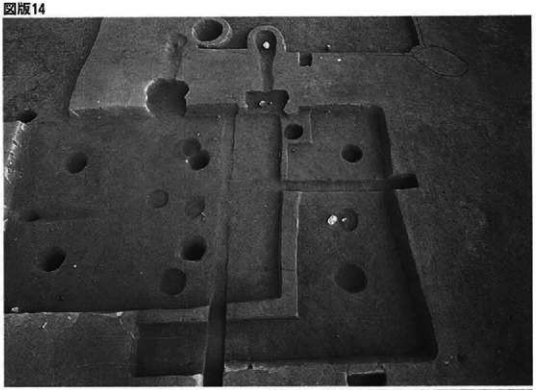
1　103号竪穴住居跡
カマド
（東から）



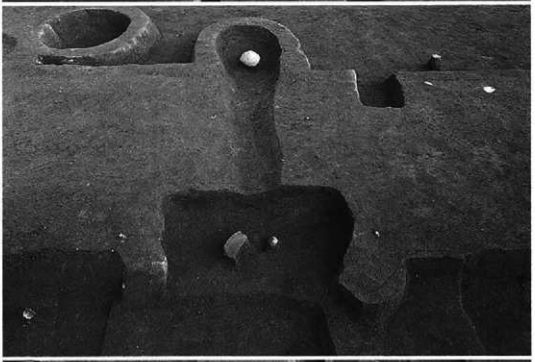
2　104号竪穴住居跡
（南から）

3　104号竪穴住居跡
カマド
（南から）

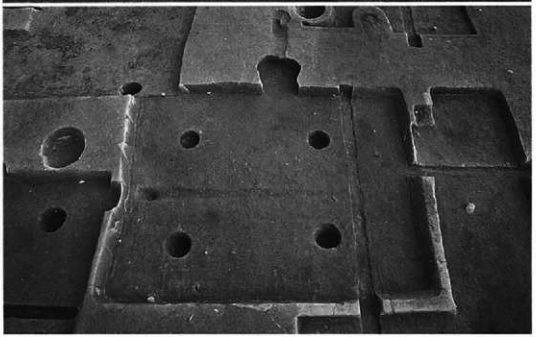
図版14



1　106号竪穴住居跡
（西から）



2　106号竪穴住居跡
カマド
（西から）



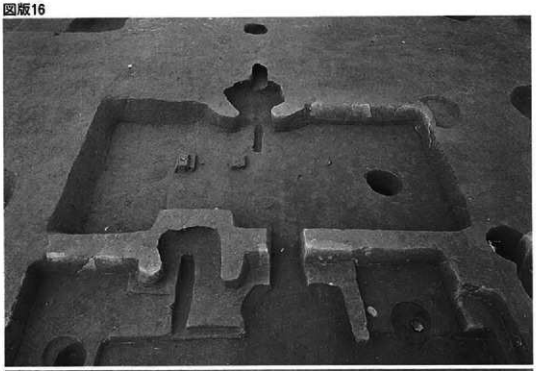
3　107号竪穴住居跡
（西から）

1　107号竪穴住居跡
カマド
（西から）

2　108・130・139号
竪穴住居跡
（南から）

3　108号竪穴住居跡
カマド
（南から）

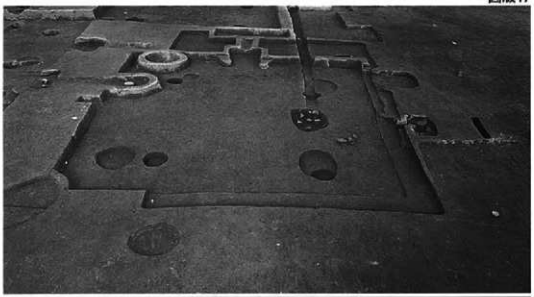
図版16



1　109号竪穴住居跡
（南から）

2　109号竪穴住居跡
カマド
（南から）

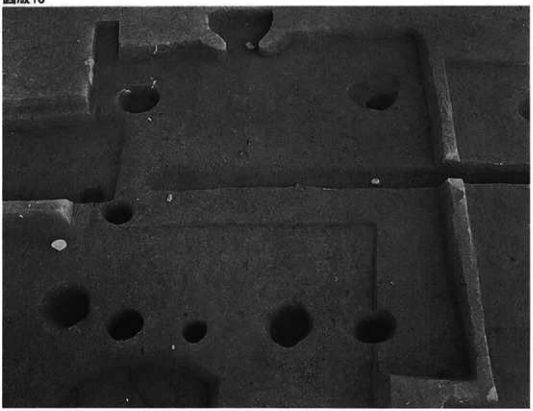
3　109号竪穴住居跡
カマド煙道部
（北から）



1　110・111・115号
竪穴住居跡
（南から）

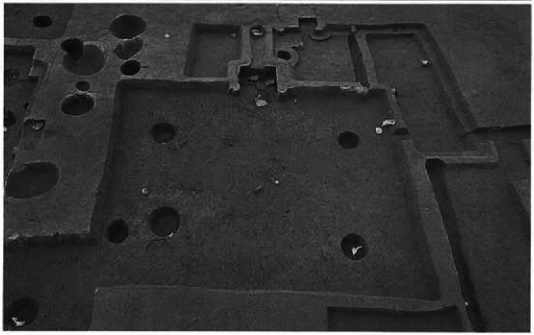
2　110号竪穴住居跡
カマド出土状況
（西から）

3　111号竪穴住居跡
カマド完掘状況
（西から）



1　112号竪穴住居跡
（西から）

2　112号竪穴住居跡
カマド
（西から）



3　113号竪穴住居跡
（南から）

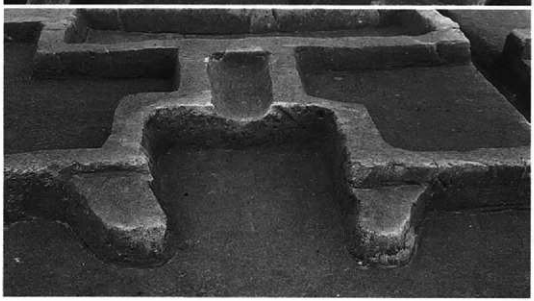
1　113号竪穴住居跡
カマド出土状況
（南から）

2　113号竪穴住居跡
カマド完掘状況
（南から）

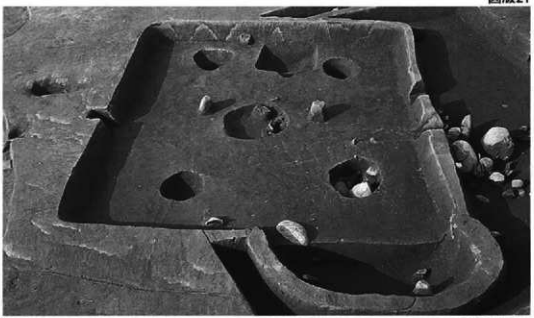
3　113号竪穴住居跡
カマド断ち割り
状況
（南から）

1　114号竪穴住居跡
（南から）

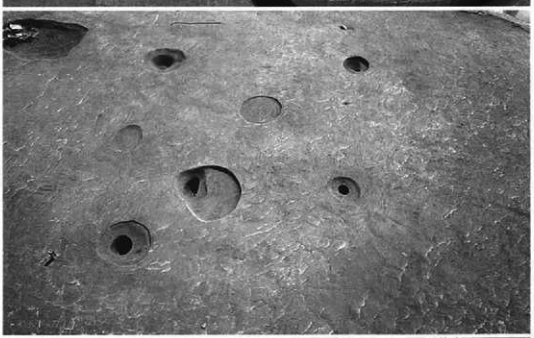
2　114号竪穴住居跡
カマド
（南から）



3　115号竪穴住居跡
カマド
（南から）



1　116号竪穴住居跡
（南から）

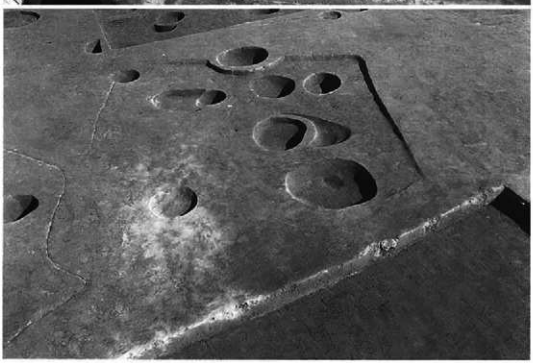


2　118号竪穴住居跡
（北から）

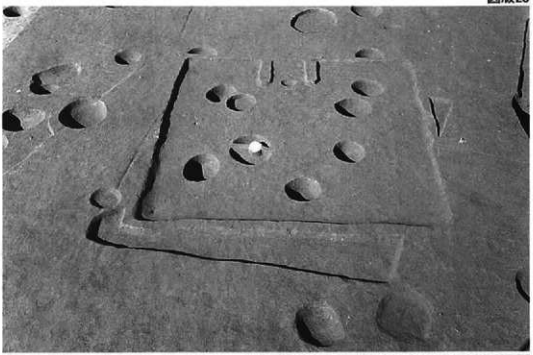
3　120号竪穴住居跡
（西から）

1　121号竪穴住居跡
（北から）

2　122号竪穴住居跡
（西から）

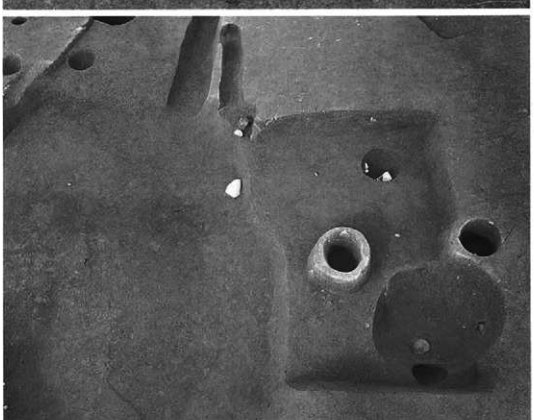


3　123号竪穴住居跡
（北西から）



1　125・126号竪穴住居跡
（南から）

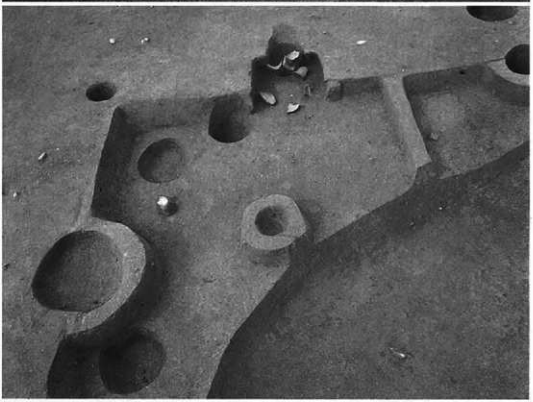
2　125号竪穴住居跡
カマド
（南から）



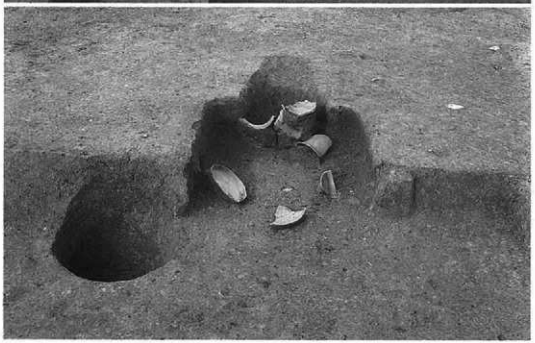
3　128号竪穴住居跡
（南から）

図版24

1　128号竪穴住居跡
カマド
（南から）

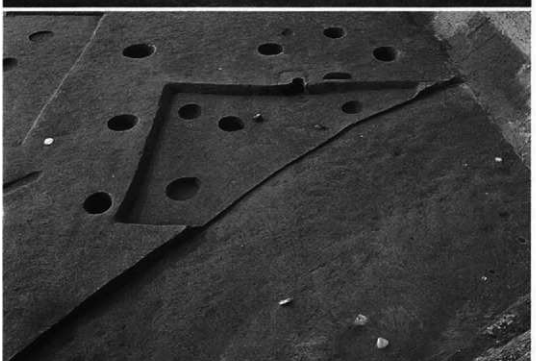


2　129号竪穴住居跡
（東から）



3　129号竪穴住居跡
カマド
（東から）

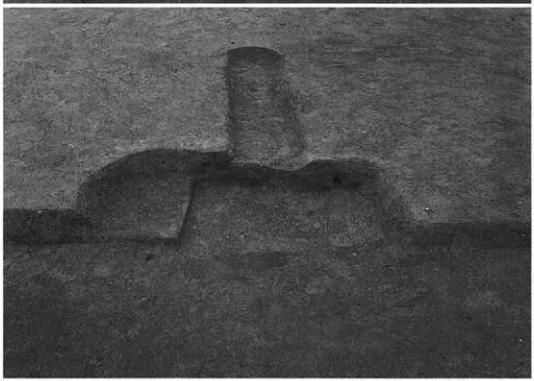
1　130号竪穴住居跡
カマド
（西から）



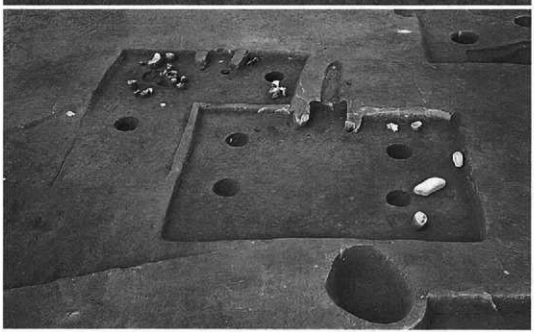
2　131号竪穴住居跡、
7号掘立柱建物跡
完掘状況
（東から）

3　131号竪穴住居跡
カマド
（東から）

1　132号竪穴住居跡、8号掘立柱建物跡（東から）



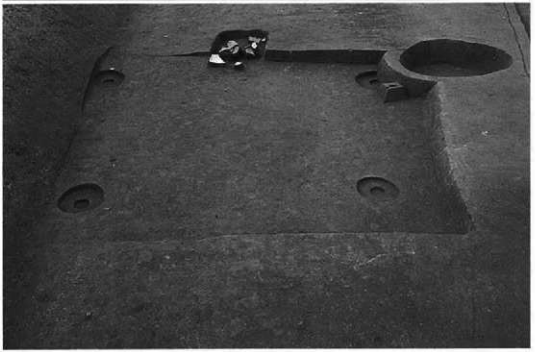
2　132号竪穴住居跡カマド（東から）



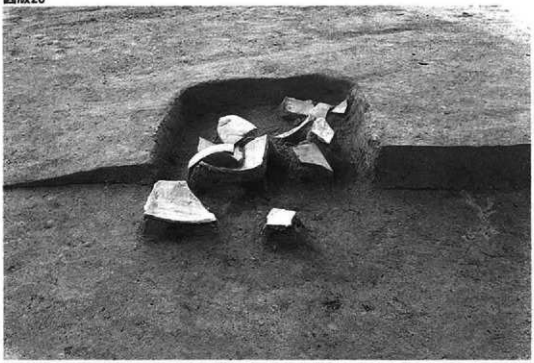
3　133・134号竪穴住居跡、36号土坑（南から）

1　133号竪穴住居跡
カマド
（南から）

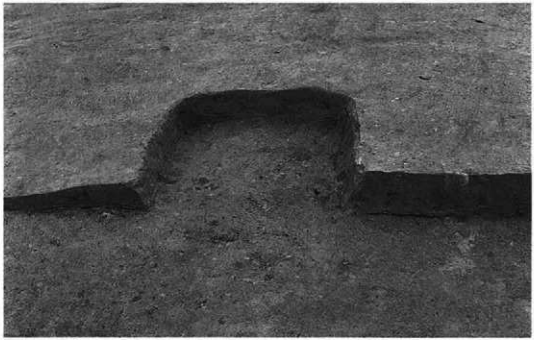
2　134号竪穴住居跡
カマド
（南から）



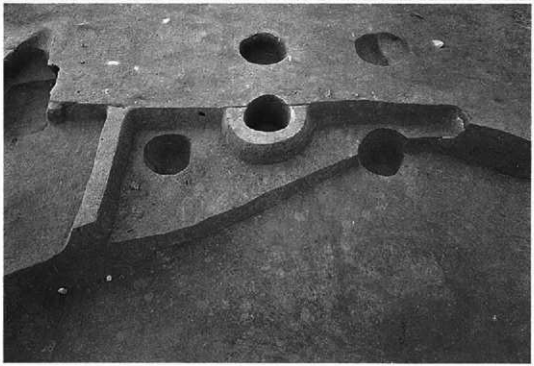
3　135号竪穴住居跡、
36号土坑
（東から）



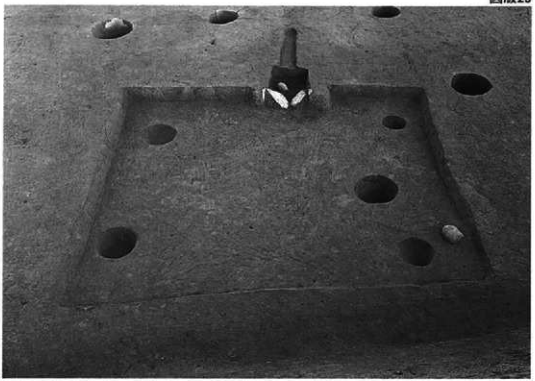
1　135号竪穴住居跡
カマド出土状況
（東から）



2　135号竪穴住居跡
カマド完掘状況
（東から）



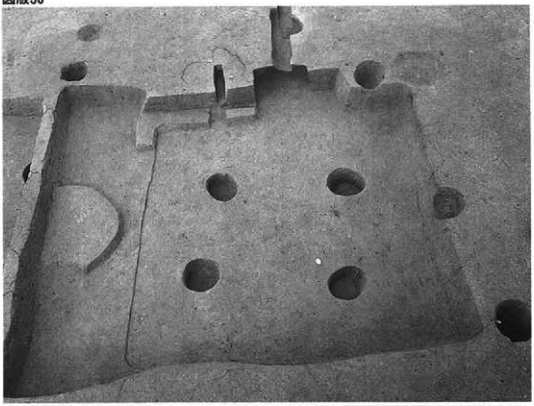
3　136号竪穴住居跡
（東から）



1　137号竪穴住居跡
（南から）

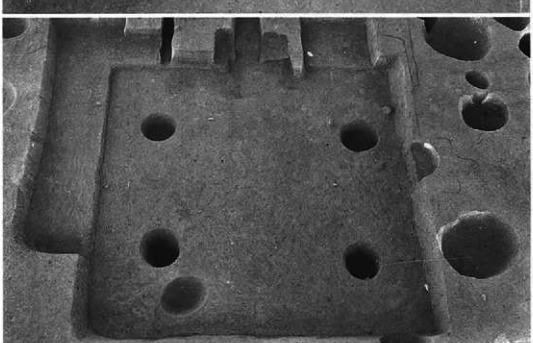
2　137号竪穴住居跡
カマド天井石出土
状況
（南から）

3　137号竪穴住居跡
カマド完掘状況
（南から）

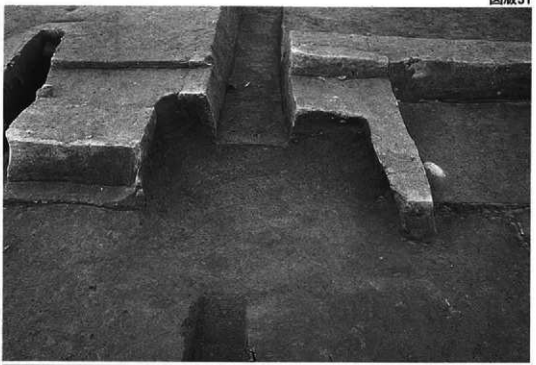


1　138号竪穴住居跡
（東から）

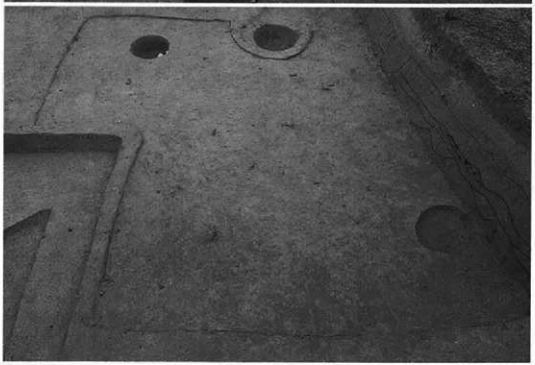
2　138号竪穴住居跡
カマド
（東から）



3　139号竪穴住居跡
（南から）



1　139号竪穴住居跡
カマド
（南から）



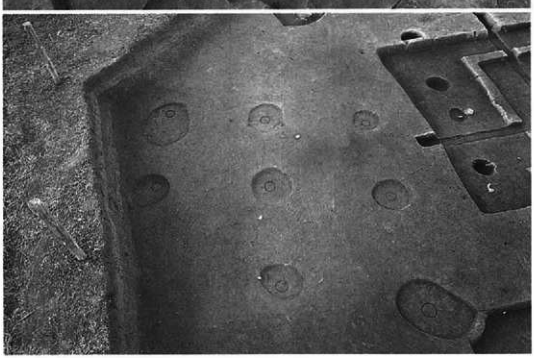
2　140号竪穴住居跡
（西から）

3　140号竪穴住居跡
土層
（北西から）

図版32

1　3号掘立柱建物跡
検出状況
（南東から）

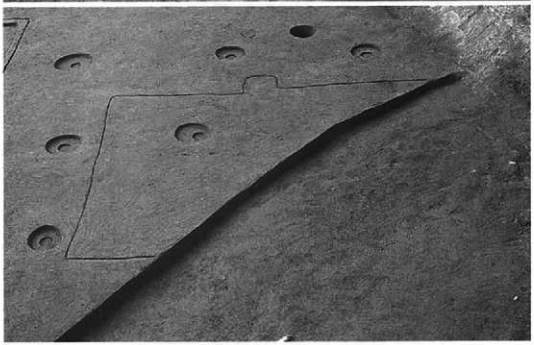
2　3号掘立柱建物跡
完掘状況
（南東から）



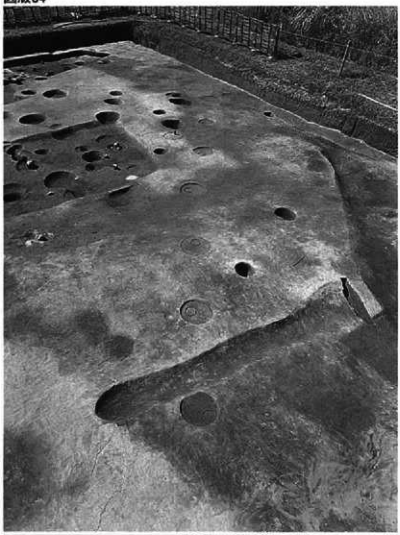
3　4号掘立柱建物跡
検出状況
（東から）

1　4号掘立柱建物跡
完掘状況
（東から）

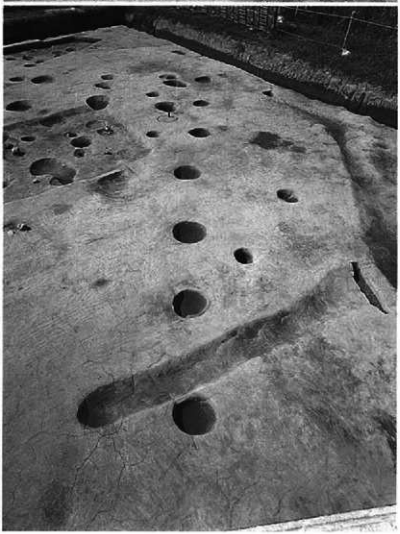
2　6号掘立柱建物跡
（南東から）



3　7号掘立柱建物、
131号竪穴住居跡
検出状況
（東から）



1　1・2号柵跡検出状況（南東から）

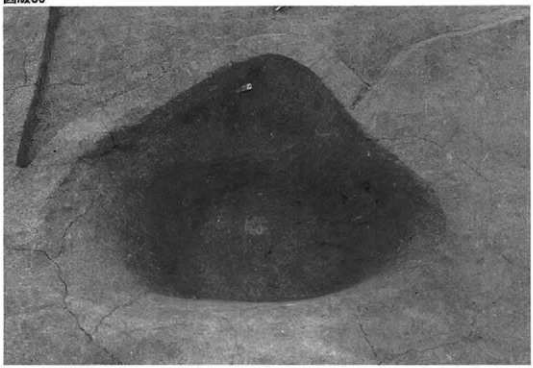


2　1・2号柵跡完掘状況（南東から）

1　20号土坑
（南から）

2　21号土坑
（西から）

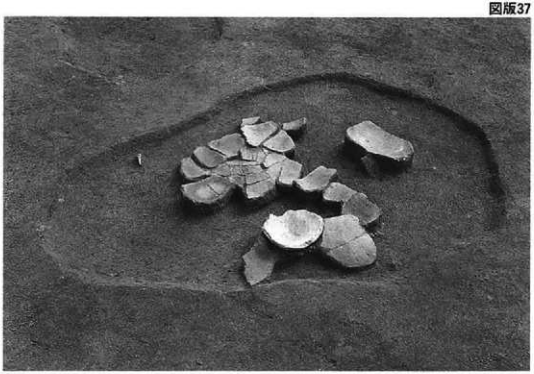
3　22号土坑
（南から）



1　25号土坑
（西から）

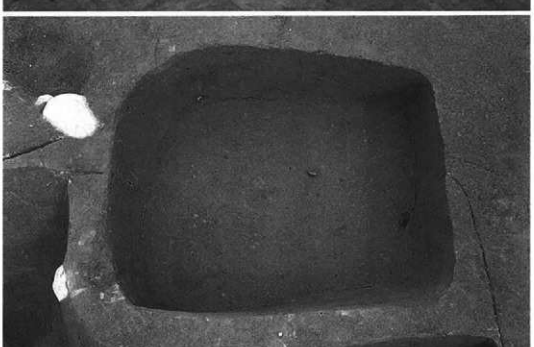
2　26号土坑
（北から）

3　27号土坑
（南東から）

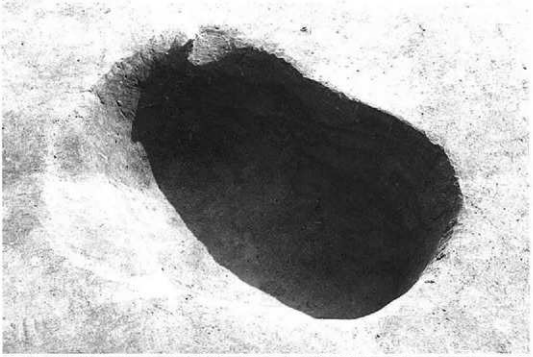


1　29号土坑
（西から）

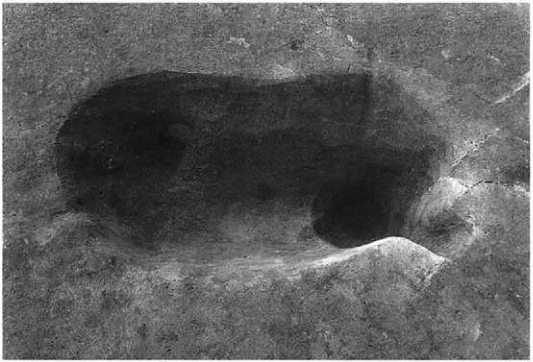
2　30・31号土坑
（北西から）



3　32号土坑
（西から）



1　33号土坑
（北西から）



2　34号土坑
（北から）

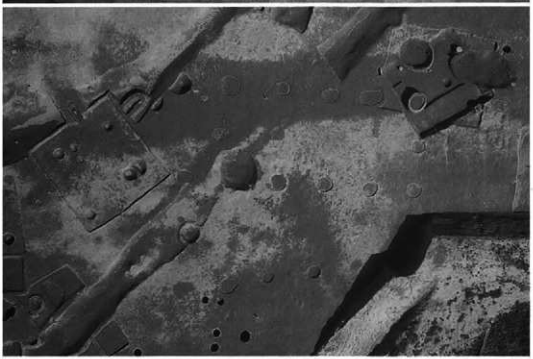
3　37号土坑
（北東から）

1　2区第2面全景
（空中写真、
東から）

2　2区第2面西側
（空中写真、
上が北）

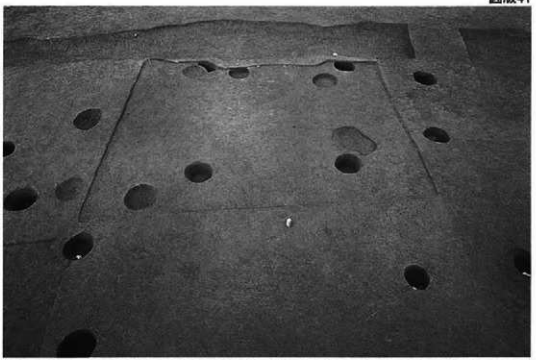
3　2区第2面東側
（空中写真、
上が南）

1　152～155号竪穴住居跡
（空中写真、上が北）



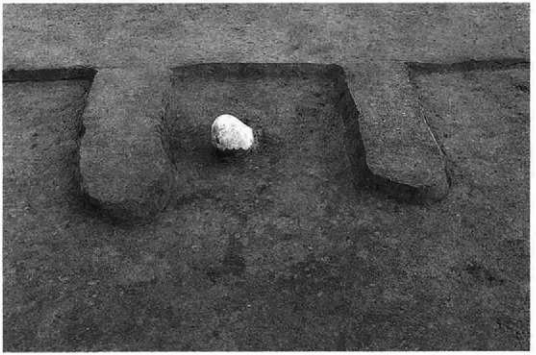
2　9・10号掘立柱建物跡
（空中写真、上が北）

3　4・5号円形周溝状遺構
（空中写真、上が北）



1　141号竪穴住居跡
（南西から）

2　142号竪穴住居跡
（南西から）

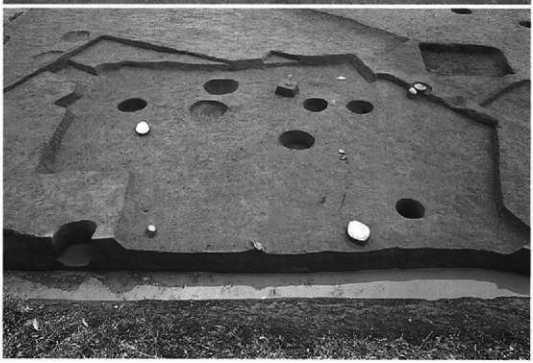


3　142号竪穴住居跡
カマド
（南西から）

図版42

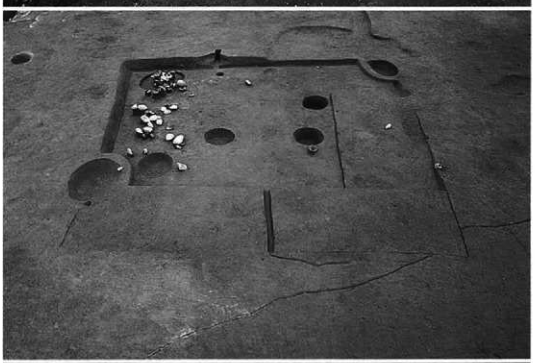
1　142号竪穴住居跡
出土状況
（北から）

2　143・144・145号
竪穴住居跡
（南東から）



3　146号竪穴住居跡
（北から）

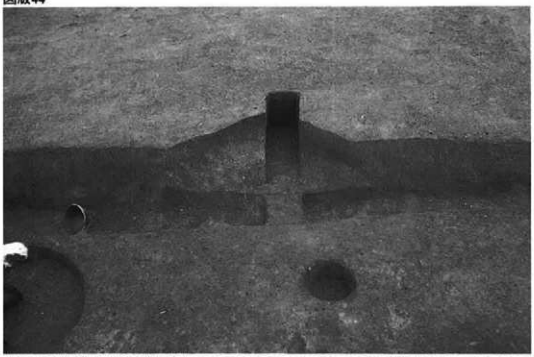
1　147号竪穴住居跡
（南から）



2　148号竪穴住居跡
（南から）

3　148号竪穴住居跡
出土状況
（北東から）

図版44



1　148号竪穴住居跡
階段状遺構
（南から）

2　149号竪穴住居跡
（南西から）

3　149号竪穴住居跡
カマド
（南西から）

1　150号竪穴住居跡
（北西から）

2　151号竪穴住居跡、
44・45号土坑
（北西から）

3　152・153号竪穴住
居跡
（北から）

1　152号竪穴住居跡
出土状況
（北から）

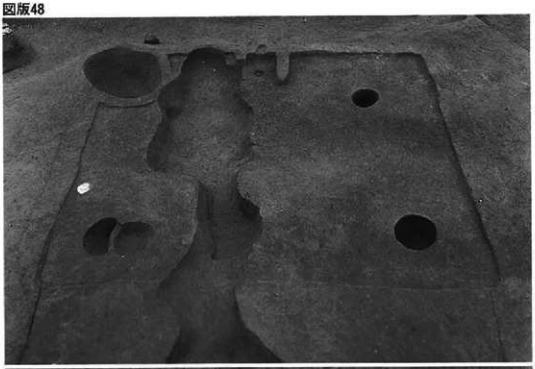
2　152号竪穴住居跡
カマド出土状況
（北から）

3　152号竪穴住居跡
カマド完掘状況
（北から）

1　154号竪穴住居跡
（南から）

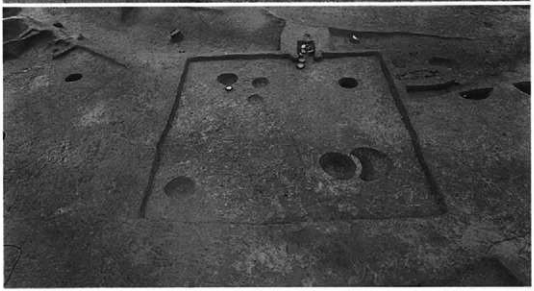
2　154号竪穴住居跡
カマド
（南から）

3　155号竪穴住居跡
（北東から）



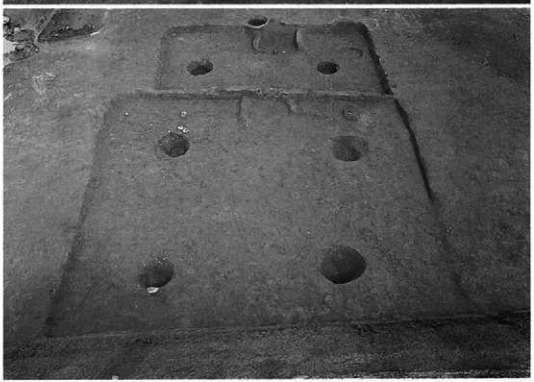
1　156号竪穴住居跡
（南から）

2　156号竪穴住居跡
カマド
（南から）



3　157号竪穴住居跡
（南から）

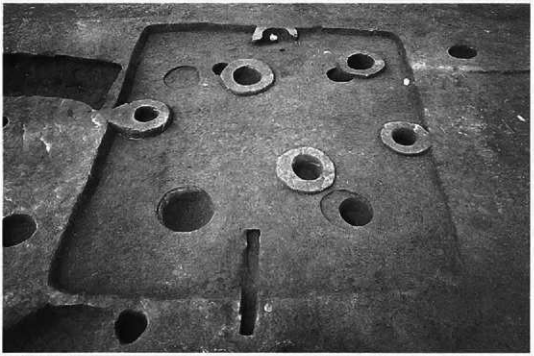
1　157号竪穴住居跡
カマド
（南から）



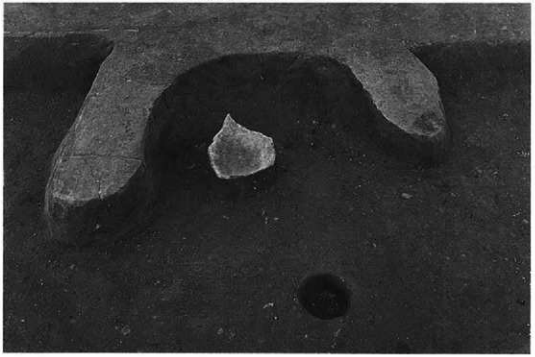
2　158・159号竪穴住
居跡
（南から）

3　158号竪穴住居跡
カマド
（南から）

1　159号竪穴住居跡
カマド
（南から）



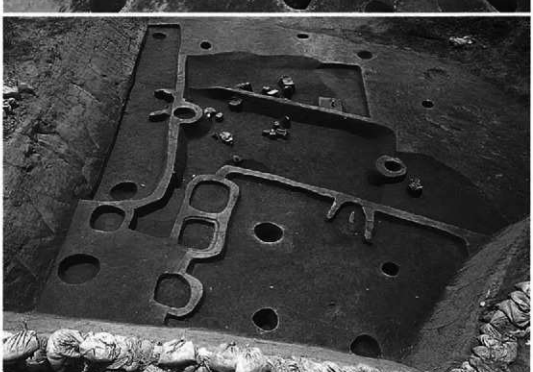
2　160号竪穴住居跡、
11号掘立柱建物跡
（南から）



3　160号竪穴住居跡
カマド
（南から）

1　161号竪穴住居跡
（東から）

2　164号竪穴住居跡、
10号掘立柱建物跡
（西から）



3　166A・166B・
167号竪穴住居跡、
SX05
（東から）

1　166A号竪穴住居跡カマド半截状況（東から）

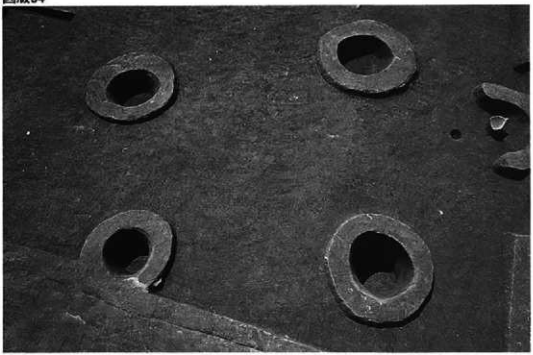
2　166A号竪穴住居跡カマド完掘状況（東から）

3　166B号竪穴住居跡炉跡土層（西から）

1　167号竪穴住居跡
カマド
（南から）

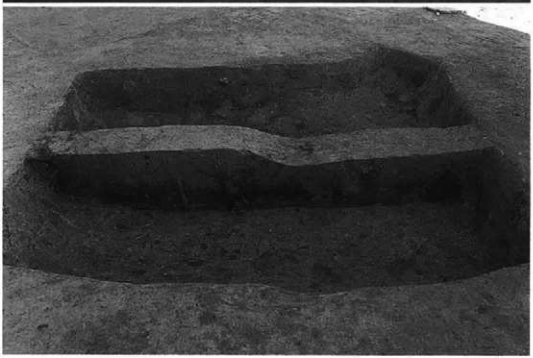
2　9号掘立柱建物跡
検出状況
（東から）

3　9号掘立柱建物跡
完掘状況
（東から）

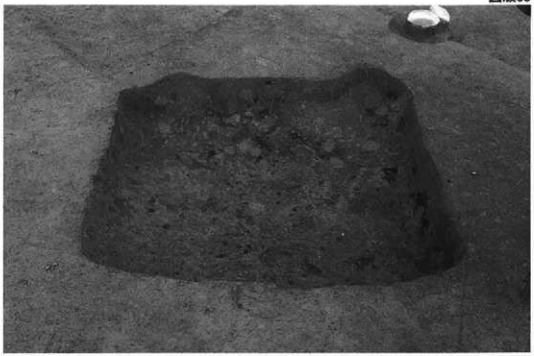


1　11号掘立柱建物跡
（東から）

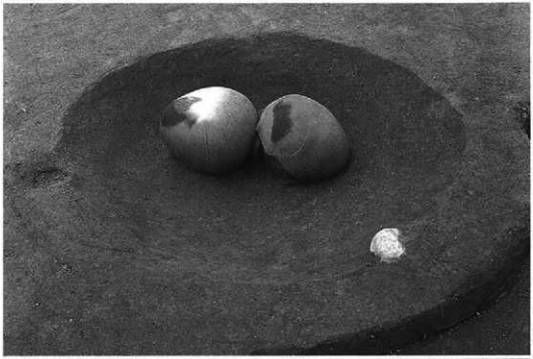
2　38号土坑
（北から）



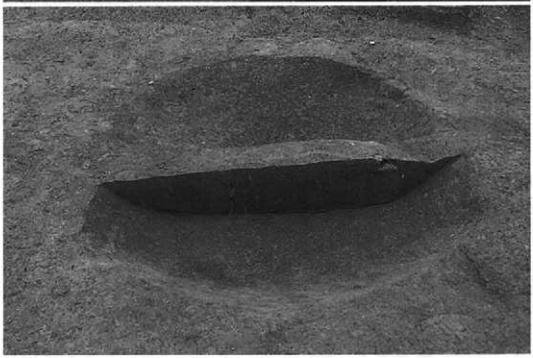
3　39号土坑土層
（南から）



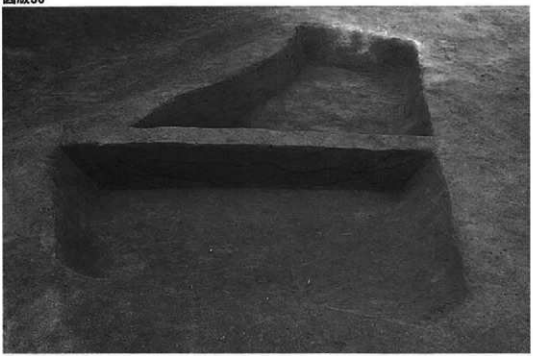
1　39号土坑
（南から）



2　40号土坑
（東から）

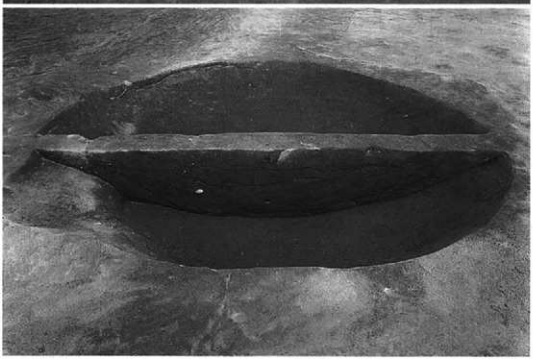


3　41号土坑
（東から）

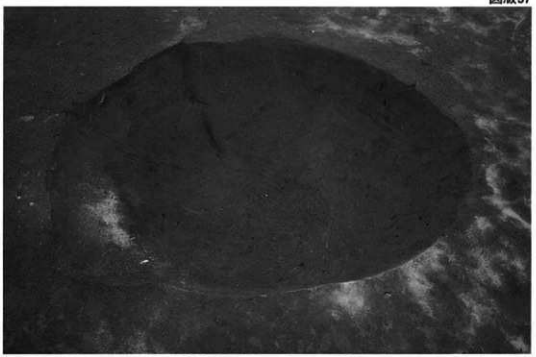


1　42号土坑
（南から）

2　44号土坑
（北から）



3　46号土坑土層
（南から）

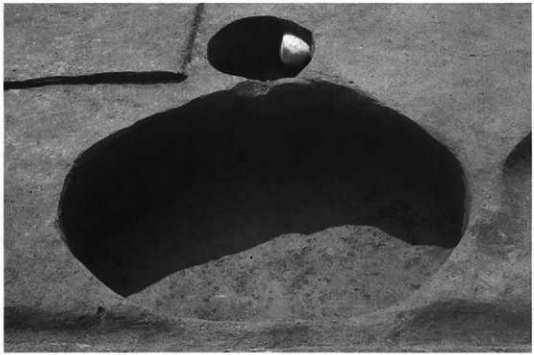


1　46号土坑
（南から）

2　47号土坑土層
（西から）

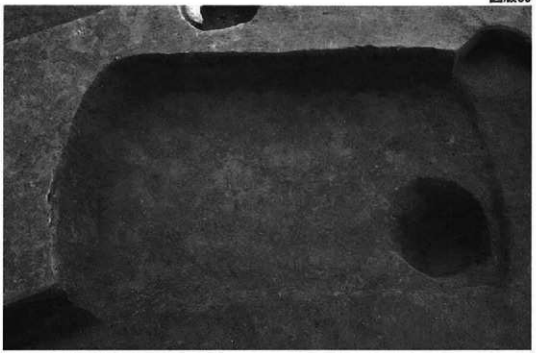
3　47号土坑
（西から）

1　48号土坑
（南から）



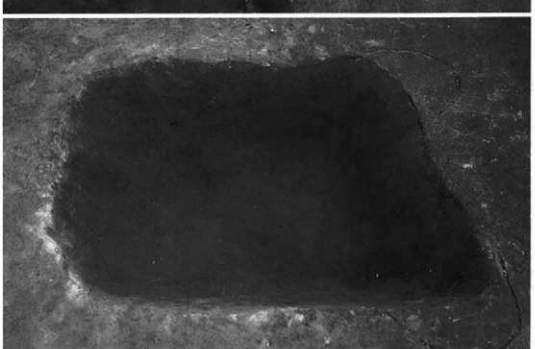
2　49号土坑
（北から）

3　50号土坑
（西から）



1　51号土坑
（西から）

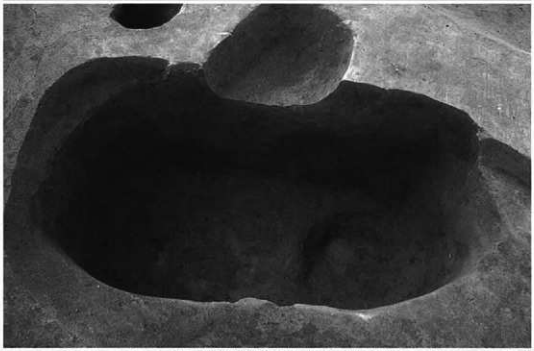
2　52号土坑
（北から）



3　53号土坑
（北から）

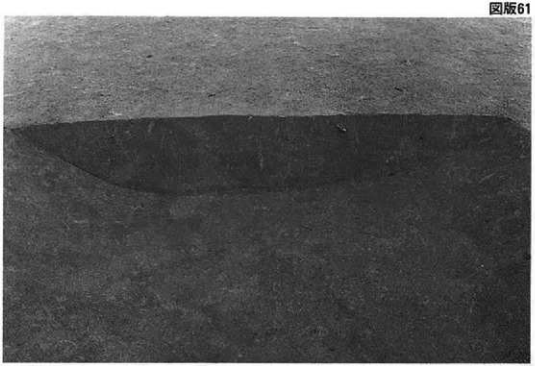
図版60

1　54号土坑
（北から）



2　55号土坑
（南東から）

3　15号溝
（南から）

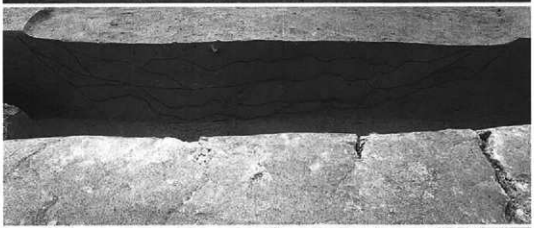


1　15号溝土層
（南から）

2　20号溝B群出土状況
（北から）

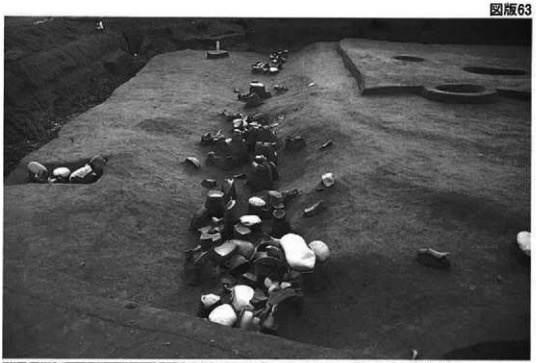
3　20号溝C群出土状況
（南から）

1　20号溝A群出土状況（北から）



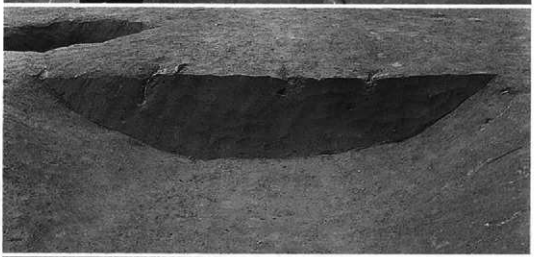
2　20号溝中央土層（東から）

3　24号溝出土状況（西から）



1　24号溝出土状況
（東から）

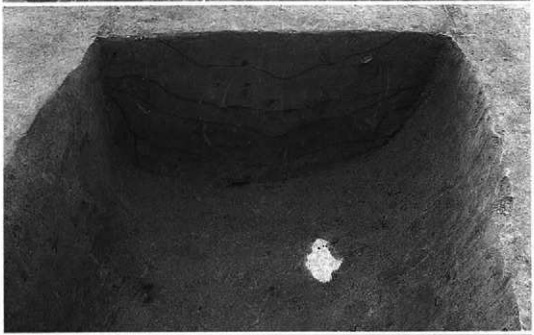
2　24号溝土層
（東から）



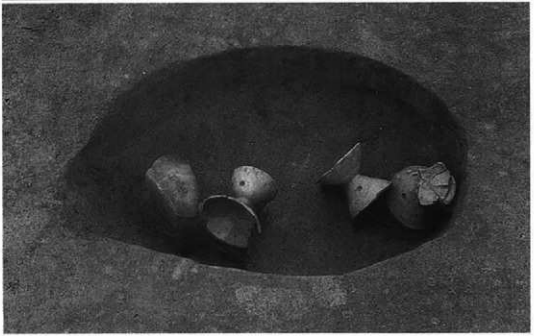
3　25号溝北土層
（北から）

4　25号溝南土層
（東から）

1　4・5号円形周溝状遺構（北から）



2　4号円形周溝状遺構北土層（西から）



3　365号ピット（東から）

1　3区第1面全景
（空中写真、
南東から）

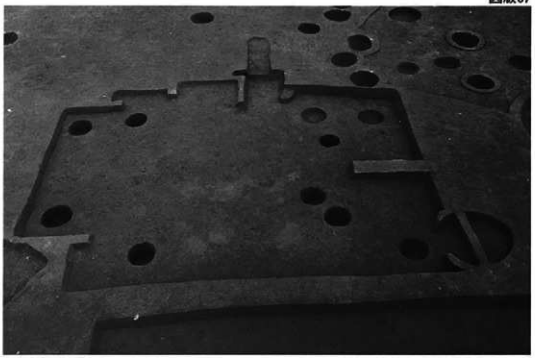
2　3区第1面全景
（空中写真、
上が北）

3　3区第1面東（空
中写真、上が北）

1　169号竪穴住居跡
（南から）

2　169号竪穴住居跡
カマド
（南から）

3　171号竪穴住居跡
（東から）



1　173・176号竪穴住居跡、60号土坑（東から）

2　173・176号竪穴住居跡カマド（東から）

3　176号竪穴住居跡カマド（東から）

1　174号竪穴住居跡
（南から）

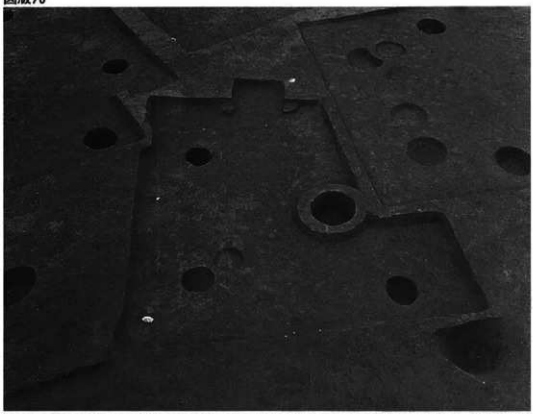
2　177号竪穴住居跡
（南から）

3　177号竪穴住居跡
カマド
（南から）

1　178号竪穴住居跡・59号土坑（南から）

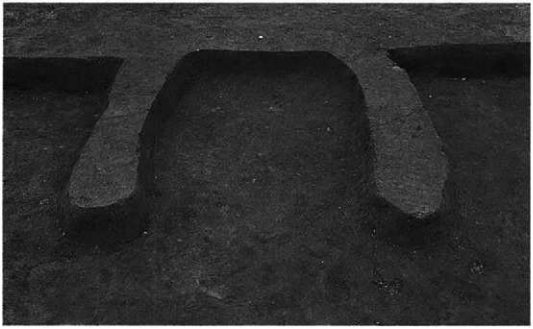
2　181・183・184号竪穴住居跡（南から）

3　181号竪穴住居跡カマド（南から）

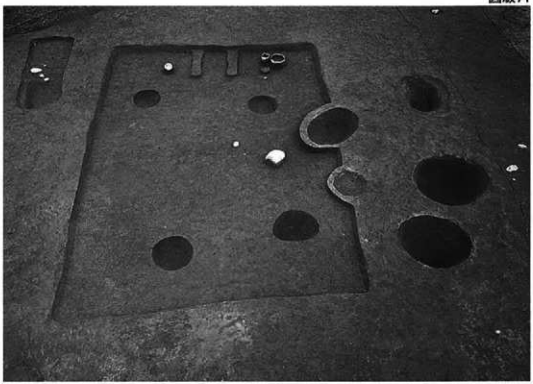


1　182号竪穴住居跡
（南から）

2　182号竪穴住居跡
カマド
（南から）



3　184号竪穴住居跡
カマド
（南から）

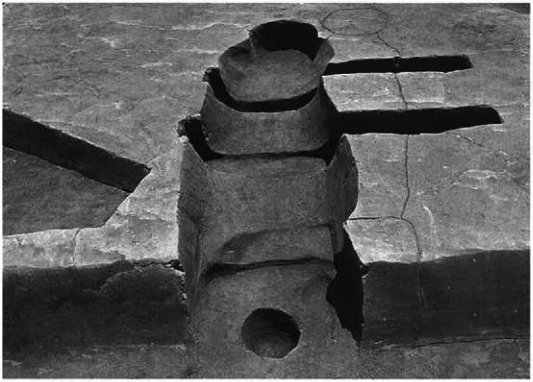


1　185号竪穴住居跡
（南から）

2　185号竪穴住居跡
カマド
（南から）

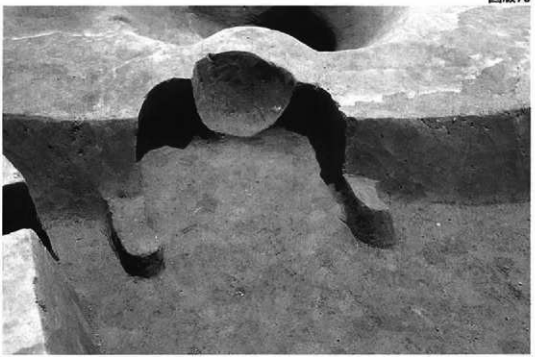
3　187～189号竪穴住
居跡
（西から）

1　187号竪穴住居跡
カマド
（西から）



2　187号竪穴住居跡
カマド1煙道部掘り込み完掘状況
（西から）

3　187号竪穴住居跡
カマド2煙道部掘り込み完掘状況
（西から）

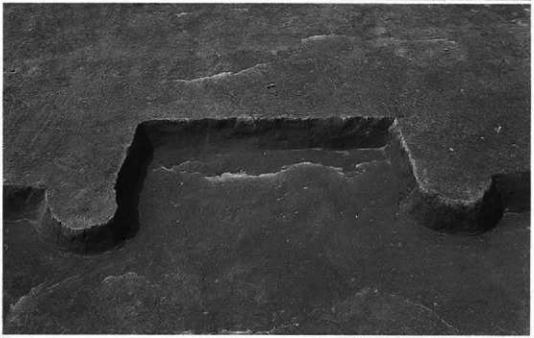


1　189号竪穴住居跡
カマド
（西から）

2　190号竪穴住居跡
（西から）

3　190号竪穴住居跡
カマド
（西から）

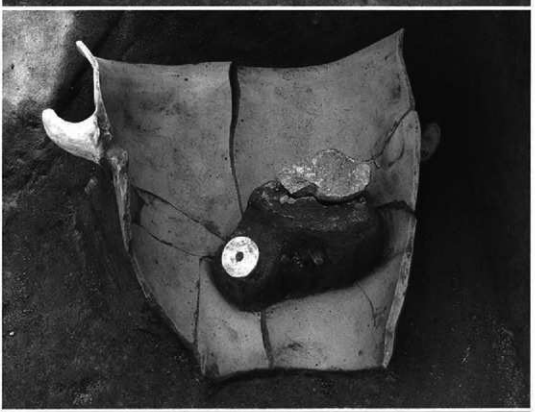
1　193・194号竪穴住居跡（南から）



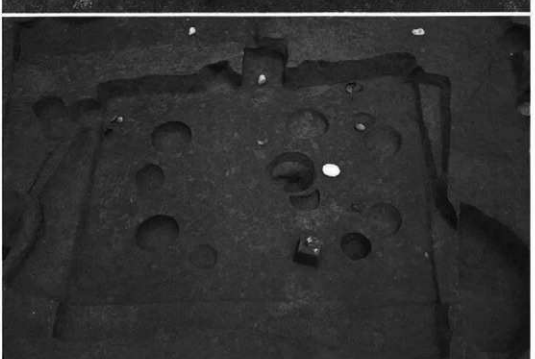
2　193号竪穴住居跡カマド（南から）

3　196号竪穴住居跡（東から）

1　196号竪穴住居跡
カマド
（東から）

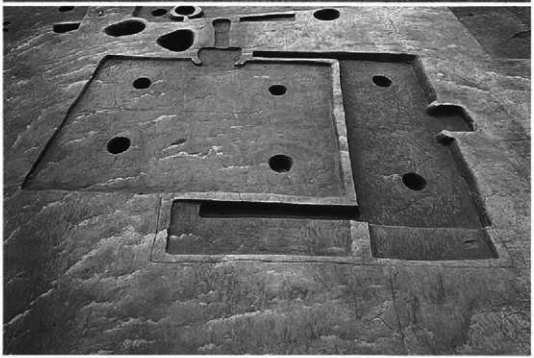


2　196号竪穴住居跡
カマド甑内出土石
製紡錘車出土状況
（東から）

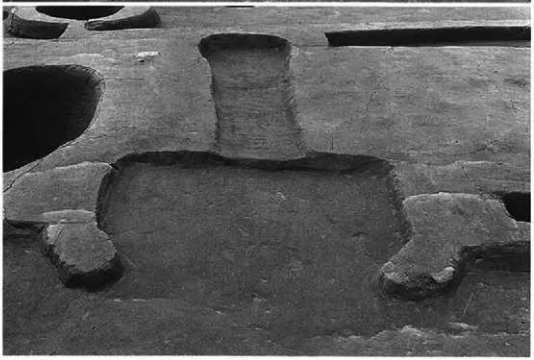


3　197号竪穴住居跡
（南から）

1　197号竪穴住居跡
カマド
（南から）



2　200・201号竪穴住
居跡
（東から）



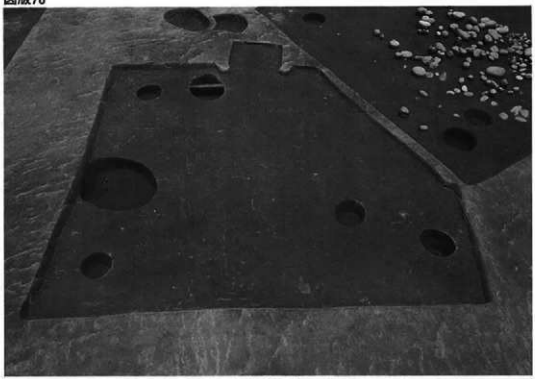
3　200号竪穴住居跡
カマド
（東から）

1　201号竪穴住居跡
カマド
（南から）

2　202号竪穴住居跡
（南から）

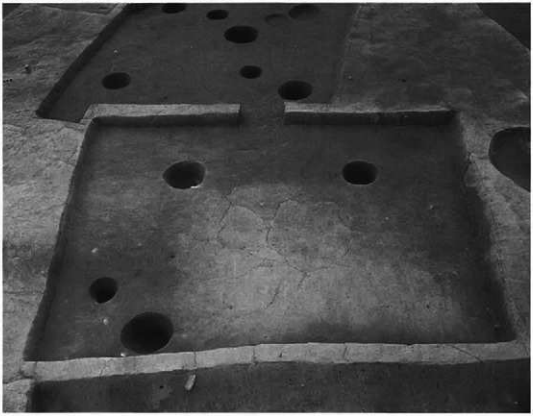
3　202号竪穴住居跡
（南から）

図版78



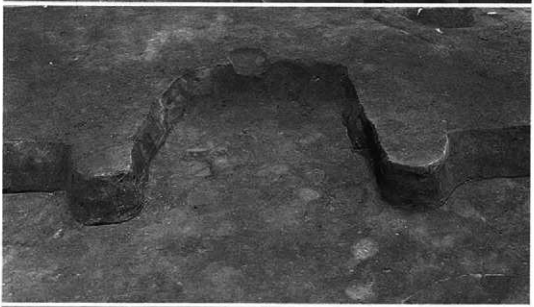
1　203号竪穴住居跡
（南から）

2　203号竪穴住居跡
カマド
（南から）

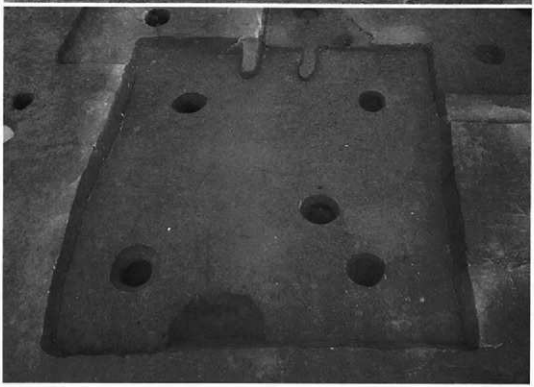


3　204号竪穴住居跡
（東から）

1　205号竪穴住居跡
（南から）

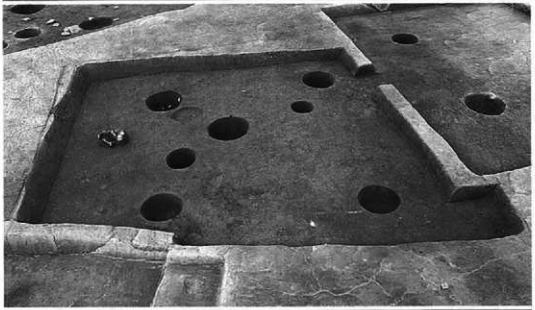


2　205号竪穴住居跡
カマド
（南から）



3　206号竪穴住居跡
（東から）

1　206号竪穴住居跡
カマド
（東から）



2　207号竪穴住居跡
（南から）

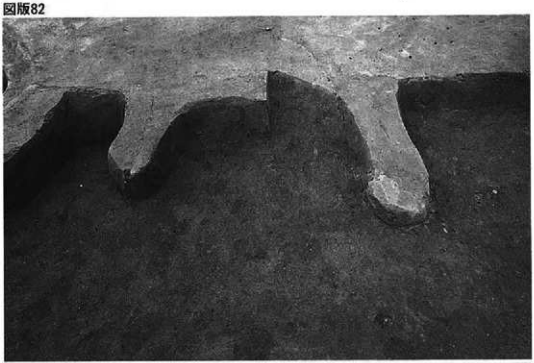
3　208号竪穴住居跡
（南から）

1　208号竪穴住居跡
カマド出土状況
（南から）

2　208号竪穴住居跡
カマド完掘状況
（南から）

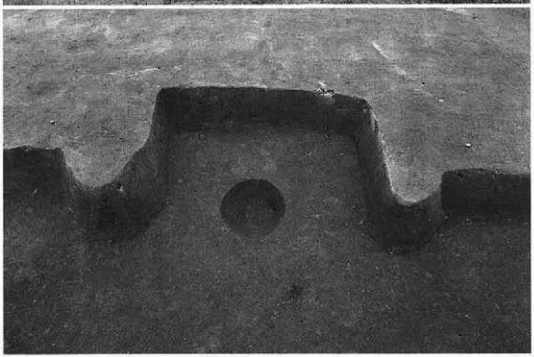
3　209号竪穴住居跡
（南から）

図版82



1　209号竪穴住居跡
カマド
（南から）

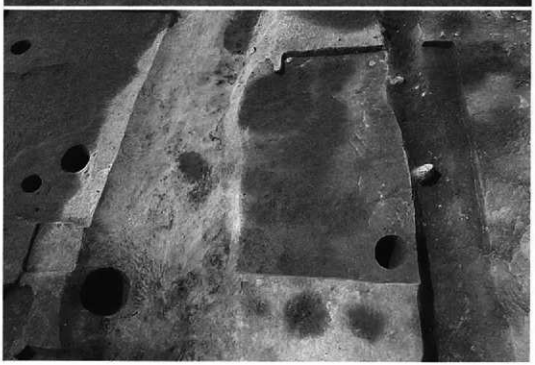
2　210号竪穴住居跡
（南から）



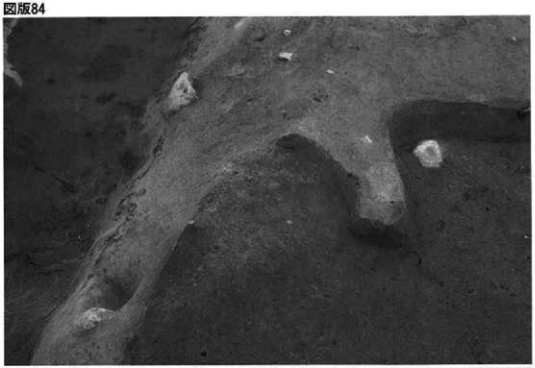
3　210号竪穴住居跡
カマド
（南から）

1　211号竪穴住居跡
（南から）

2　211号竪穴住居跡
カマド
（南から）



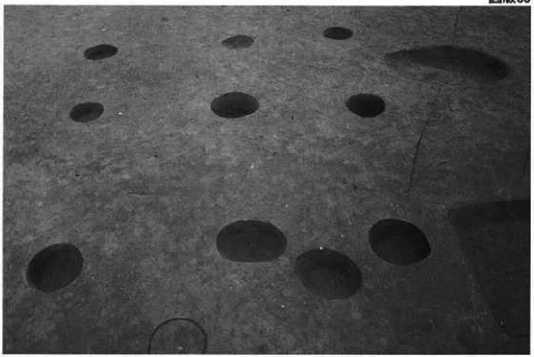
3　213号竪穴住居跡
（南から）



1　213号竪穴住居跡
カマド
（南から）

2　214号竪穴住居跡
（西から）

3　214号竪穴住居跡
カマド
（西から）

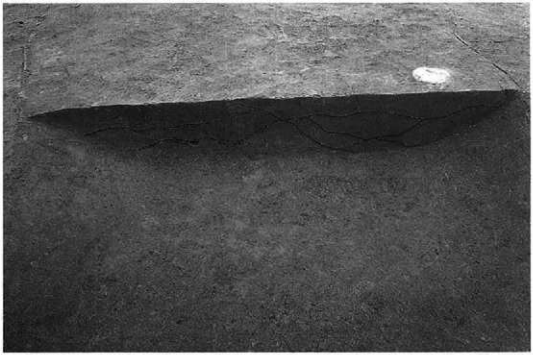


1　12号掘立柱建物跡、59号土坑（南から）

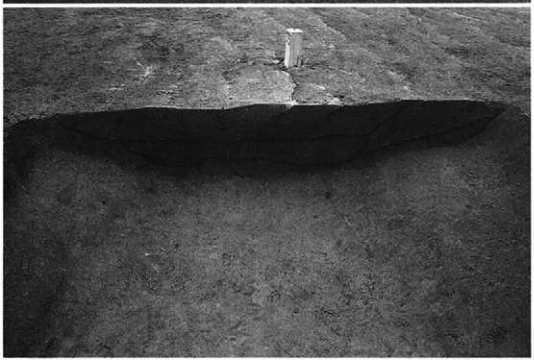
2　56号土坑（南から）

3　62号土坑（東から）

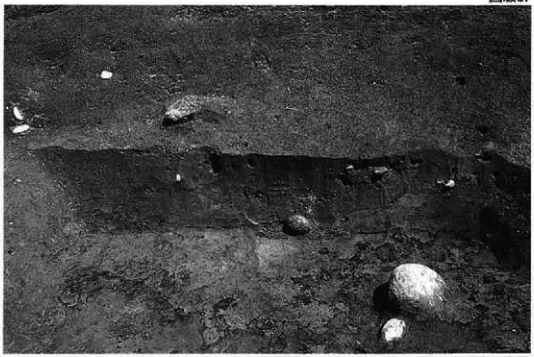
1　66号土坑
（北北西から）



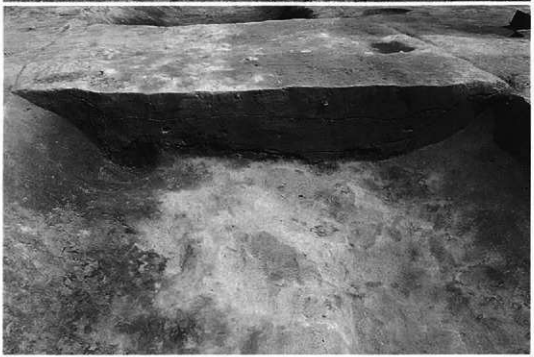
2　28号溝北土層
（北から）



3　28－1号溝南土層
（北から）



1　29号溝北土層
（南から）

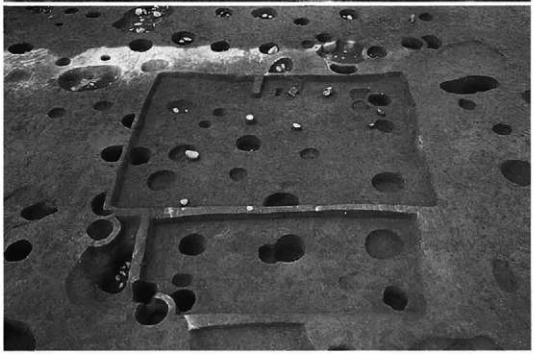


2　29号溝中央土層
（北から）

3　33号溝中央土層
（北から）

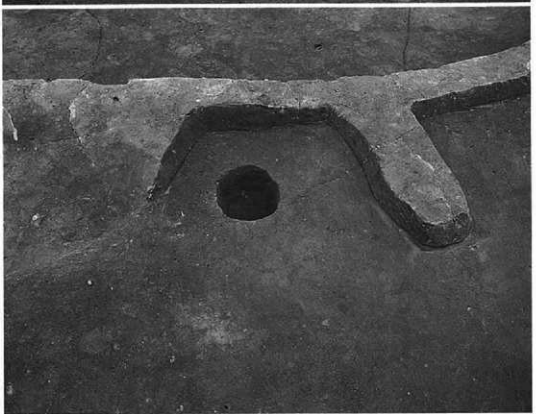
1　3区第2面全景
（空中写真、
上が北）

2　3区第2面全景
（西から）

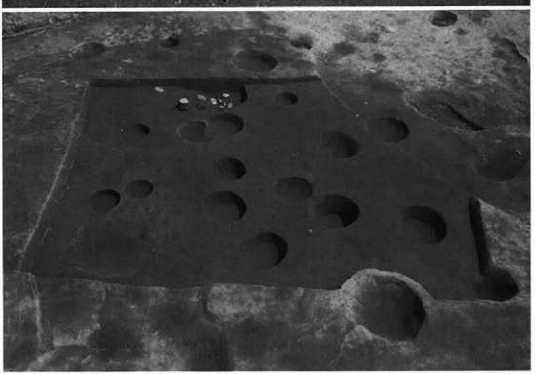


3　226・227号竪穴住
居跡
（南から）

1　226号竪穴住居跡
カマド
（南から）

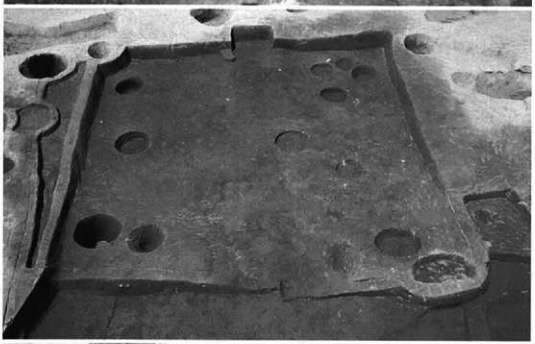


2　228号竪穴住居跡
カマド
（東から）



3　229号竪穴住居跡
（南から）

1　230号竪穴住居跡
（南から）



2　231号竪穴住居跡
（東から）

3　231号竪穴住居跡
カマド
（東から）

1　232号竪穴住居跡
（北から）

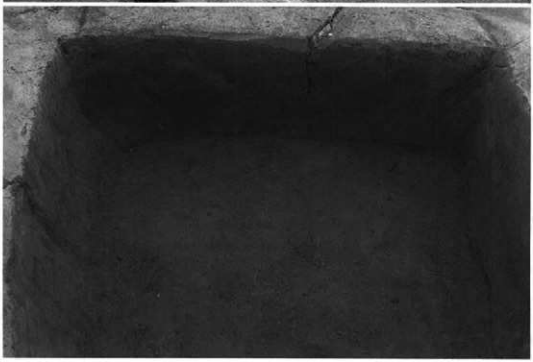
2　1号竪穴遺構
（北から）

3　74号土坑
（北から）

図版92

1　75号土坑
（西から）

2　81号土坑
（南西から）



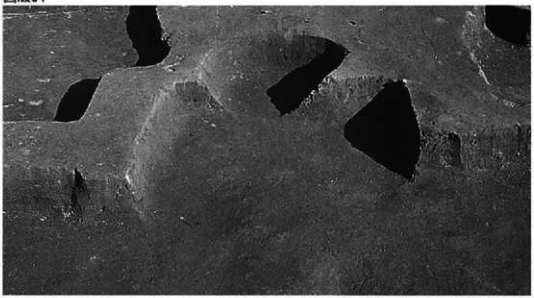
3　37号溝土層
（東から）

1　4区第1面全景
（北から）

2　4区第1面北
（南から）

3　216～219号竪穴住居跡
（南東から）

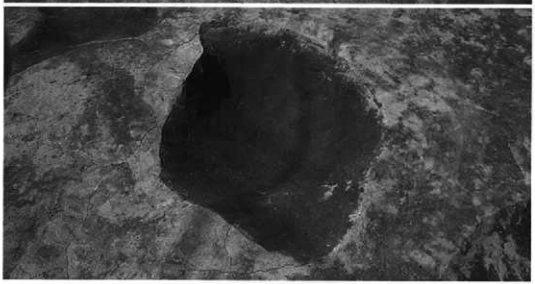
図版94



1　217号竪穴住居跡
カマド
（南東から）

2　218号竪穴住居跡
カマド
（南東から）

3　68号土坑
（北東から）



4　70号土坑
（南から）

1　4区第2面全景
（北から）

2　4区第2面全景
（南から）

3　39号溝土層
（東から）

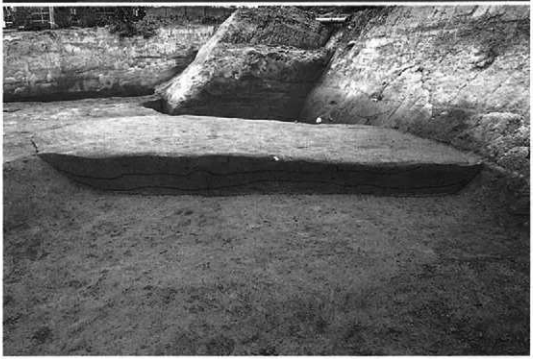
1　5区第1面全景
（東から）

2　41～44号溝土層
（西から）

3　5区第2面全景
（東から）

1　82号土坑
（北から）

2　82号土坑土層
（南から）



3　SX06土層
（東から）

1　41～45号 溝 土 層
（第 2 面時、
西から）

2　5 区第 3 面全景
（東から）

3　5 区東壁土層
（第 3 面時、
西から）

1　47号溝完掘・土層
（西から）

2　5区西トレンチ
全景
（西から）

3　5区西トレンチ
北壁土層
（南東から）

8-2

10-22

8-4

10-24

8-14

10-31

10-17

10-32

10-18

10-35

78～81号竪穴住居跡出土土器

12-14

20-6

12-15

20-27

12-26

20-19

12-27

20-22

23-2

18-33

26-20

90・93・95～97・106号竪穴住居跡出土土器

31-35

31-37

31-39

37-1

37-8

37-9

37-12

40-1

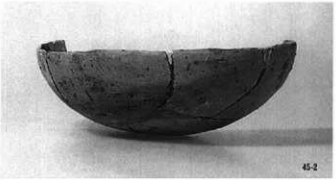
40-2

40-12

40-16

45-1

108・109・112～115・120号竪穴住居跡出土土器


45-2

45-14

45-3

45-15

45-6

45-16

45-17

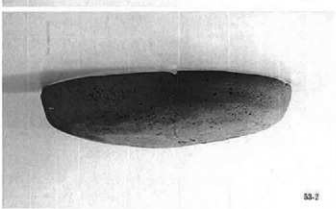
45-11

47-1

45-13

47-13

120・121号竪穴住居跡出土土器



121・123・129・133・134号竪穴住居跡出土土器

58-6

71-7

58-8

71-8

58-9

71-10

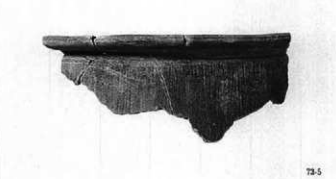
58-12

71-12

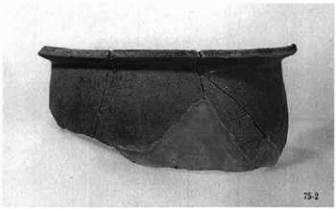
58-17

72-14

134・135・137号竪穴住居跡出土土器



21・22・26号土坑出土土器


75-2

75-11

75-3

75-12

75-8

77-1

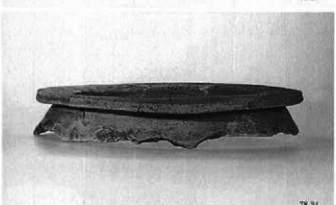
75-4

77-3

75-10

77-4

27・29・30号土坑出土土器



37号土坑出土土器

33号土坑、18号溝、2区第1面遺構面等出土土器

2区第1面遺構面等、117・142・145・147号竪穴住居跡出土土器

96-5

96-6

96-7

96-8

97-13

97-14

97-15

97-19

97-20

98-21

148号竪穴住居跡出土土器

98-22

98-23

98-26

98-27

101-8

98-28

101-10

102-16

104-2

104-3

104-4

148・151・152号竪穴住居跡出土土器

104-5

104-13

104-6

104-14

104-7

104-15

104-8

104-16

104-9

104-17

104-11

104-18

152号竪穴住居跡出土土器

104-19

104-20

105-22

106-28

111-4

111-5

116-8

116-9

116-12

117-27

121-1

121-5

152・157・162・164・166A・166B号竪穴住居跡出土土器

121-4

121-5

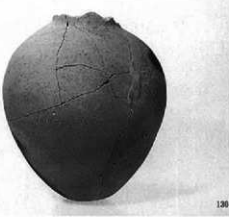
121-8

122-10

122-14

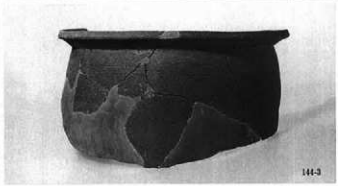
122-15

129-13

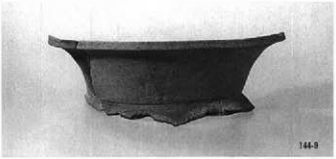

130-1

130-3

166B号竪穴住居跡、38・40・44号土坑出土土器



44・55号土坑、20号溝（1）出土土器


144-9

144-10

144-11

145-18

145-20

145-21

145-24

145-25

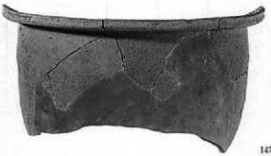
145-26

146-27

146-30

20号溝出土土器（2）

146-33


147-47

146-38

147-48

147-1

148-51

147-42

148-52

147-44

148-62

20号溝出土土器（3）

149-63

149-69

149-64

149-70

149-65

149-71

149-66

149-77

149-68

150-80

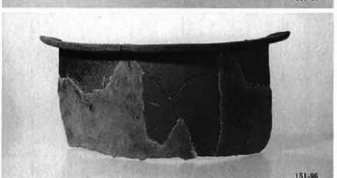
20号溝出土土器（4）

150-81

150-82

150-85

150-87


151-96

151-107

154-159

154-161

154-163

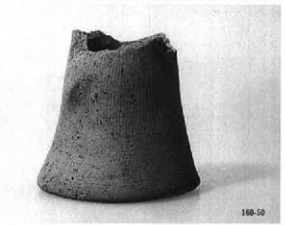
154-165

20号溝出土土器（5）

154-167

160-48

154-170


160-50

155-189

160-54

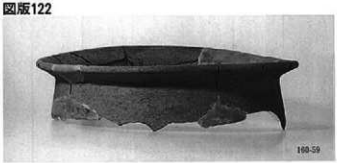
159-33

160-56

159-34

160-57

20号溝（6）、24号溝（1）出土土器


160-59

160-60

160-82

161-71

162-82

162-93

162-98

163-105

163-108

163-109

163-110

24号溝出土土器（2）

163-111

163-123

163-112

164-129

163-113

164-132

163-114

165-8

165-15

163-115

165-19

24号溝（3）、25号溝出土土器

25号溝、4号円形周溝状遺構、SX05出土土器

169-10

171-5

169-15

171-6

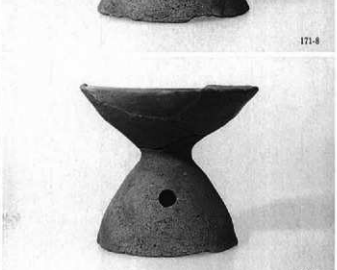
171-1

171-7

171-2

171-8

171-3


171-9

ＳＸ05、２区第２面ピット、365号ピット出土土器

172-1

172-3

172-15

172-19

172-20

173-25

173-27

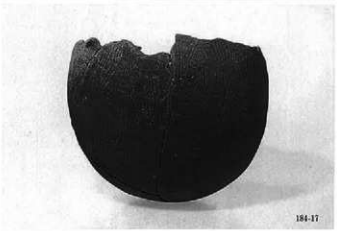
176-9

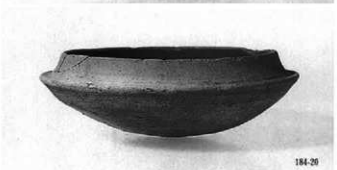
176-11

176-11

176-13

2区第2面遺構面等、171号竪穴住居跡出土土器





185・187・196号竪穴住居跡出土土器

197-15

197-16

197-23

197-27

200-1

200-11

200-12

201-18

201-23

201-25

201-27

209-1

197・200・202・207号竪穴住居跡出土土器

216-4

224-5

224-6

224-14

225-8

225-16

225-18

225-19

226-7

226-27

227-3

227-4

227-5

215号竪穴住居跡、28・29・33号溝出土土器

227-6

230-1

227-13

230-4

227-14

230-18

228-18

243-2

228-19

243-5

228-22

243-7

230-3

3区第1面遺構面等、226・229号竪穴住居跡、3区第2遺構面等出土土器

243-11

244-16

244-17

261-16

261-17

261-18

261-19

262-21

262-22

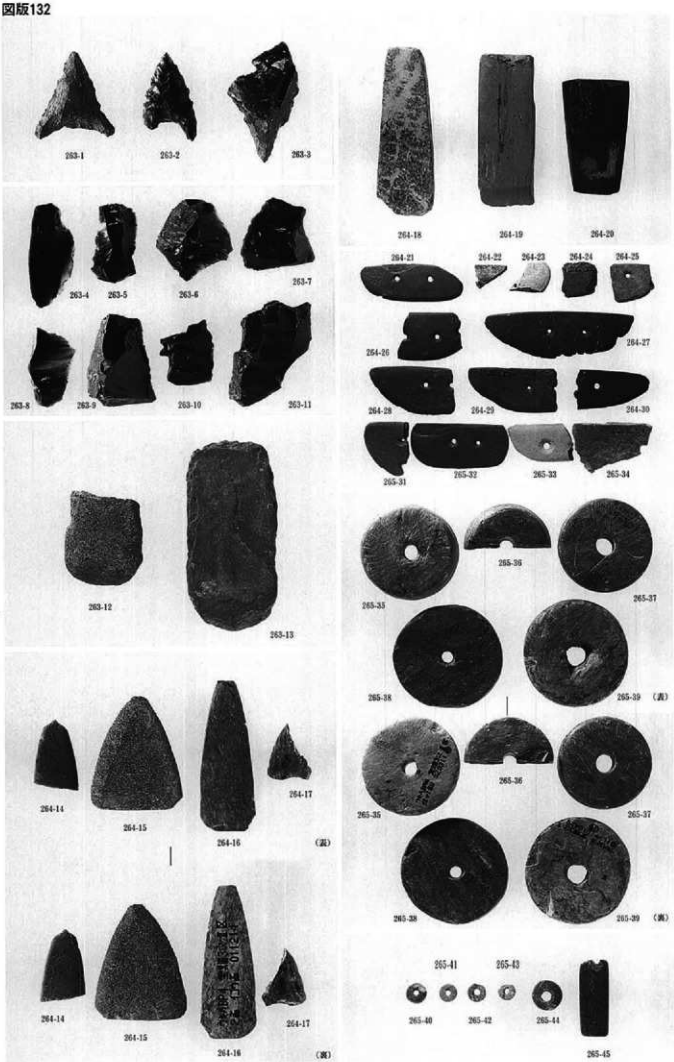
262-24

262-25

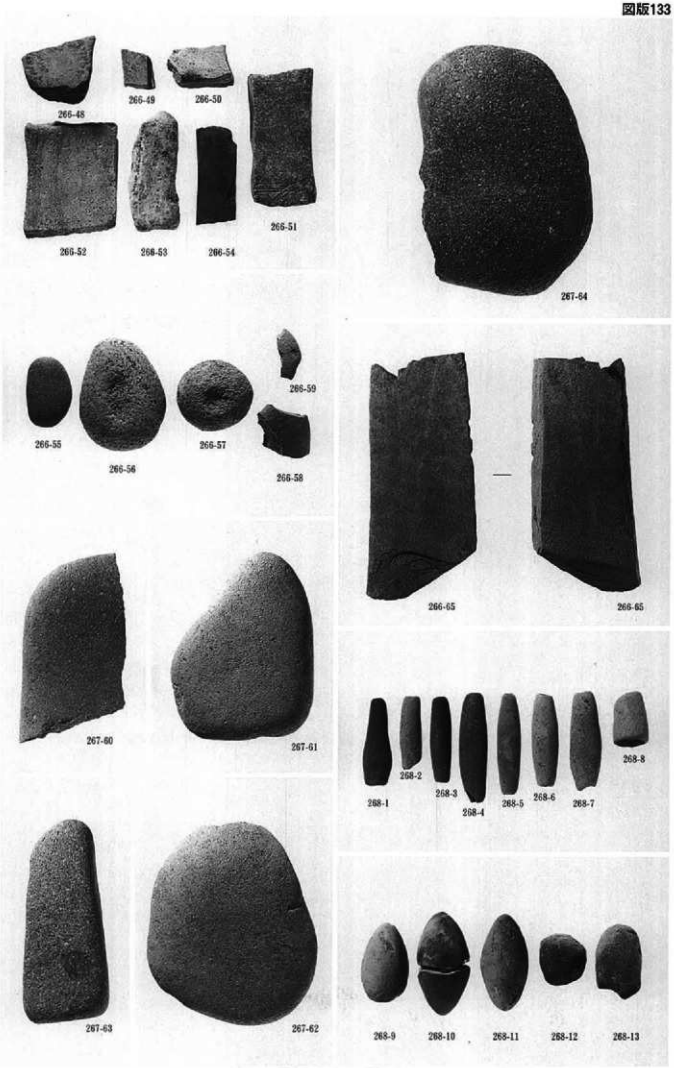
262-30

262-31

3区第2面遺構面等、表採・側溝出土土器

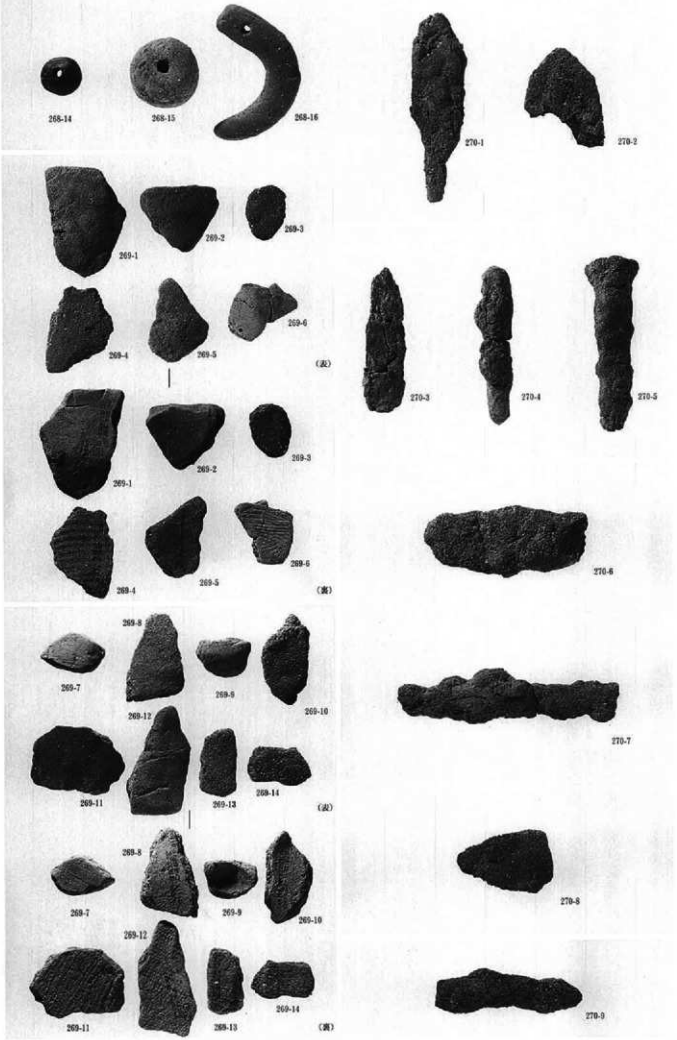

263-1
263-2
263-3
263-4
263-5
263-6
263-7
263-8
263-9
263-10
263-11
263-12
263-13
264-14
264-15
264-16
264-17
(表)
264-14
264-15
264-16
264-17
(裏)
264-18
264-19
264-20
264-21
264-22
264-23
264-24
264-25
264-26
264-27
264-28
264-29
264-30
265-31
265-32
265-33
265-34
265-35
265-36
265-37
265-38
265-39
(表)
265-35
265-36
265-37
265-38
265-39
(裏)
265-40
265-41
265-42
265-43
265-44
265-45

石器・石製品（1）


266-48
266-49
266-50
266-51
266-52
266-53
266-54
267-64
266-55
266-56
266-57
266-58
266-59
266-65
266-65
267-60
267-61
268-1
268-2
268-3
268-4
268-5
268-6
268-7
268-8
267-63
267-62
268-9
268-10
268-11
268-12
268-13

石器・石製品（2）、土製品（1）

図版134



土製品（2）、製塩土器、鉄器（1）

270-10

270-11

270-12

270-13 270-14

270-15

270-16 270-17 270-18 270-19

270-20

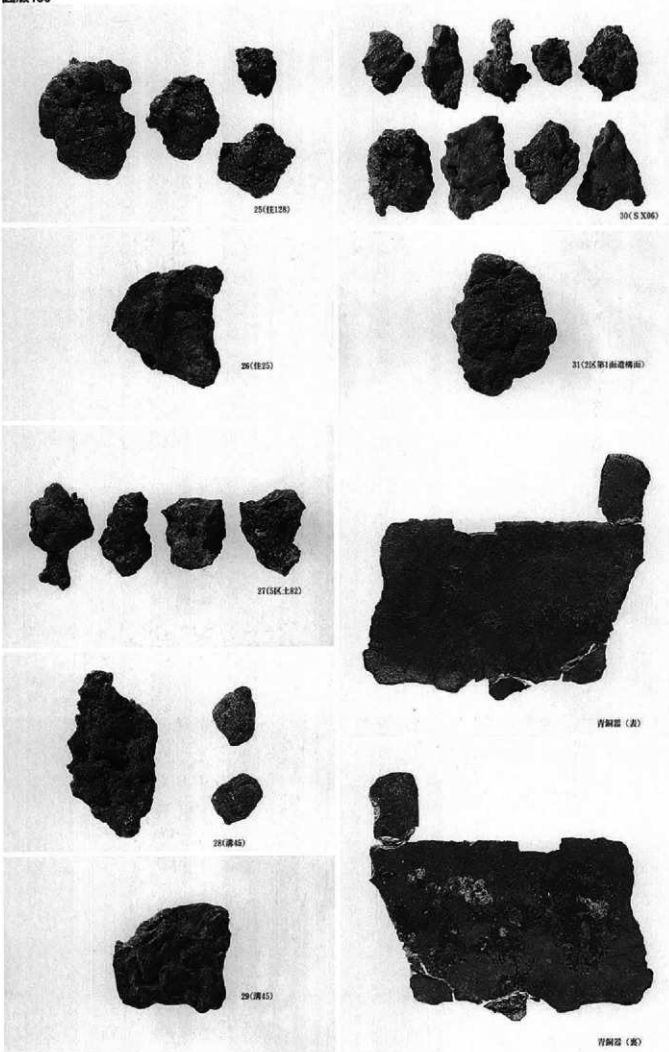
270-21

270-22

23(住109)

24(住102)

鉄器（2）、耳環、鉄滓（1）


25(EE128)
30(SX06)
26(住25)
31(25K第1面遺構面)
27(5K土82)
青銅器（表）
28(溝45)
29(溝45)
青銅器（裏）

鉄滓（2）、青銅器

報告書抄録

ふりがな	どうはたいせき
書名	堂畑遺跡Ⅲ
副書名	福岡県うきは市吉井町新治所在遺跡の調査
巻次	Ⅲ
シリーズ名	一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第23集
編集者名	大庭孝夫（編集）・小澤佳憲・能登原孝道・輔古環境研究所・平尾良光・淀川奈緒子・谷水雅治・輔元興寺文化財研究所
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8575　福岡市博多区東公園７番７号　電話095-651-1111（代表）
発行年月日	西暦2005年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
堂畑遺跡（どうはたいせき）	福岡県うきは市吉井町（ふくおかけん うきはしよしいまち） 新治字堂畑（あらはるあざどうはた）	40225		33°20′55″	130°45′28″	2000.11.13 ～ 2001. 3. 7 2001. 4. 9 ～ 2002. 3.19 2003. 4.15 ～ 2003.10.31	10.500㎡ （１～４次調査総面積14.000㎡）	道路建設（一般国道210号浮羽バイパス建設）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堂畑遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 中世	（１～４次調査総計） 竪穴住居跡　253棟 掘立柱建物跡　16棟 土坑　95基 溝　58条 円形周溝状遺構　５基 竪穴状遺構　１基 不明遺構（SX）　２	弥生土器　上師器 須恵器　石器 石製品　土製品 製塩土器　鉄器 小形仿製鏡 青銅器片　瓦 白磁　青磁 瓦質土器　磁器	・弥生時代中期後半現墳集落 ・古墳時代前期畿内系土器 ・古墳時代後期～奈良時代カマド付住居跡が密集 ・円面硯、転用硯

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１１４１０７
登録年度 16	登録番号 12

一般国道２１０号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第23集

堂畑遺跡Ⅲ

平成17年３月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園７番７号

発　行　凸版印刷株式会社
福岡市中央区薬院１－17－28

一般国道210号　浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第23集

堂畑遺跡 Ⅲ

福岡県うきは市吉井町新治所在遺跡の調査

下巻

付図

第284図～第286図

第284図　堂畑遺跡遺構配置図（1）（3・4区）（1／200）

第285図　堂畑遺跡遺構配置図（2）（1区）（1／200）

第286図　堂畑遺跡遺構配置図（3）（2区）（1／200）